
神話の創り方

雪銀世界

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神話の創り方

【Nコード】

N7766X

【作者名】

雪銀世界

【あらすじ】

犬神隼は実家が神社である普通の高校生。しかし、近衛刀が転入し、平穩の学園生活が終わりを告げる。近衛刀は前世の記憶を持った『正義』の言葉が好きなために、前世で罪を犯した犬神隼を敵視するようになる。そんな、物語が幕を開けた。

プロローグ

「おぬし、まだ見つけれないのか？」

偉そうに少女が聞いてくる。昔から良く言えば豪胆。悪く言えば乱暴者である。

その性格は直らないものか？

「そう焦らないでくださいよ。そうだ、ケーキとコーヒーがあまりますよ。食べませんか」

乱暴者の前にコーヒーをマブカップに注ぎ、ケーキを持ってくる。

(これで、少しは大人しくなるだろうか？)

少年は素直に期待するが。

「そんな、甘ったるい食べ物は何も食べん」

少女はそっぽを向き、少年の期待を裏切る。

しかし、その言葉に反比例して少女の口から涎がでていた。

威厳にこだわっているんだろうか。昔から威厳なんてなくせに。しかし、そんなことを言うとは鉄拳がとんでくる。まったく、乱暴者は困る。

内心、少年は少女に対して悪態を尽いた。

「なんだ、その目は」

昔からそうゆう所だけは目ざとい。

(まったく、はあ〜)

またもや、少年は内心に溜息をつく。少年はこの歳では珍しく素

直にきつぱりと諦めて従う。

「では、コーヒーでも飲んでいてくださいよ。いい豆で作ったんですよ。その間に探しますから」

「うむ」

よし、大人しくなった。探すか五月蠅くなる前に。

少年が探す体制に入ったときに、「ちやぼん、ちやぼん」と効果音が少年の後ろから聞こえてくる。

「何をやっているんですか？」

信じられないという目つきで少女の方を見ると。

「見た通りコーヒーを飲もうとしているではないか」

すばやく少年は聞き返す言葉に、少女は平然とすまし顔で答える。

「その、コーヒーに角砂糖を何個入れたんですか？」

「8個だが。何か変か？」

少女は平然に聞き返してくる。

(イヤイヤ、甘ったるいのが嫌いな癖に、砂糖8個も入れるのは変じゃないか?)

少年は心の内で突っ込みを入れて目を細めた。その瞬間「とりゃあ」と掛け声と共に少年の体が逆さまに飛んでいた。

「うぎゃ〜」

惨めな声と共に本棚にぶつかった。その拍子に本が崩れ、倒れた少年の頭に本が落ちてきた。

「うあ〜イティイティてってっ……」

投げられたのか？と思い。頭を抱え込みながら少年は床に蹲る。

(なぜ、こんな目に)

そう、考えてくると少年は徐々に腹が立ってきた。

「何をするんですか！！ 急に！！」

少年の厳しい顔つきで理不尽な暴力を立ち上がり抗議しようとするが、少年の愛らしい顔つきの為か怒っている風には見えない。

「いや、おぬしが拙者の事を侮辱しているみたいでな。今度は完璧に顔に出ていたぞ」

しまった。態度に出ていか。と少年は反省する。

昔からこの男は……。いや、今は少女か。と思い直す。

「ふむ、早く見つける」

しまいには謝りもしないでと、ぶつぶつ文句を呟きながら立ち上がる。

その瞬間、探し物が少年の目に入った。

「あ、見つけた」

ポロツと少年の口から漏れてしまった。

「本当か！！」

身乗り出し少女は聞いてくる。

「本当ですよ。あなたの探し人とあれば、まさかたぶん……」

少年はまさかと思しながら、その忌まわしい名前を呼ぶ。

その忌まわしい名を聞いたとたんに、乱暴者は右手を腰にやり左手に細長い柄が特徴な金槌を天井に上げ、片足を少年の部屋のテーブルに乗っけながら物騒な事を言葉に出す。

「拙者の『正義』で奴を殺す」
やれやれ、本当に正義なんですかねえ？少年は思う。先の反省が口や態度にはけて出すことは無かった。

その前に、少女の足の振動のせいか折角のコーヒーをこぼしている。

（汚れがじゅうたんに付いたら掃除大変なんですよ。まったく誰が掃除すると思っっているんですか）

もう、何度目かの悪態をついた。もはや、何も思うまいと少年は心に誓った。

「これから、どうする気ですか？」
少年は慎重に聞き返す。下手なことを聞いて、こんな狭い部屋で暴れられたら困る。

「簡単な事。転校するのさ」
少女は軽口をたたきながら、ポーズを解く。

「両親にはどう言いくるめるのさ？」

「拙者の家は武人の家、訳を話せば転校など簡単な事だ」

確かに少女の家は武道の名門だ。その中で、あなたの力は抜き出ている。
どうやら、力で脅すようだ。まあ、厄介払いができて嬉しいだろう。

あの乱暴者に話してよかったんだろか。すごく不安だ。

しかし、僕は時が来るまで傍観者である。

プロローグ（後書き）

初めて書く小説です。

言葉が難しいです。本当に難しい……。

ヒゲは主人公ではないよ!!

「おゝす、おはよう」

教室で挨拶と同時に隼の肩を叩く、その人物は、なぜか高校生らしくない無精髭をはやしていた。

「おはよう。て、髭剃ってこいよ。それじゃ、サンタクロースの叔父さんだ」

今はまだ、短く生やしているが、時が経てば自分の髪より長くなる事は目に見えている。

あだ名が見た通りのヒゲである。これでも、生徒会の書記、趣味は18禁がつくものなら、誰の横にも並ばない。なぜかこの学校の裏の権力者であるらしい？

「知っているか。今日、転入生が来るらしいぞ」

「それは、めずらしい」

めがねのふちを手で「くい」と上げる。我がクラスの学級委員の金山さんが話しに入ってくる。ちなみに制服ではなく巫女服の服を着ていた。

「北海道の離れの小島、しかも、5年前に島の山が活性化、島全体にガスが充満、避難勧告が解除されたのは2年前でつい最近です。ちなみ今の島の人口はガス発生前の人口の半分です。この辺鄙な疎開の地に、転校生はとてもめずらしい」

いつも、解説ありがとう。なぜ、いつも説明をするのんだろうか。不思議である。

確かにガス事件以来こんな辺境で危険な地に来るなんて、しかもこの学校は小・中・高等学校と一緒の校舎で、総生徒数200名ぐらいしかない。各学年一クラスしかなく、このクラスも20名しかないのだ。

「このクラスにその転校生が来るらしいぞ。話しによると、清楚な黒髪で座敷童子みたい女の子らしい」

ヒゲの声が大ききようだ。特に男子が騒ぎ出す。え、「まじか?」「そうなのか?」とざわざわと聞こえてくる。

女子生徒は「そうなんだ、仲良くしたいね」とか、「これ以上変な人を増えないように願うよ」と噂話をしている。変態だらけの有名なクラスで、まだまともな意見が言える人がいる事に隼は感心した。

ヒゲの方に隼は顔を向けるとにんまりと笑みを見せる。知らない人が見れば警察に通報しそうな犯罪者並みの笑みである。

「女の子だぜ、どうせなら身長は低いほうがいいな。胸もAカップ」
ヒゲの通称は 愛好家でもある。本人曰く、生まれたその日から墓場まで美人なら対象らしい。クラス一同では「将来はなんだか、有名になりそうだ悪い意味で」が暗黙の見解である。

「で、なんでその事を知っているんだよ。転校生が来るという事を」
ヒゲは自分の無精髭を上下にさすりながら、

「俺がこの学校の事で分からないことはないだろう。ちょっと、職員室にいったな」

隼はヒゲの話が終わる前にハイハイといいながら、腕をすくめた。

どうせ教師の弱みでも握って聞き出したんだろう。

（なんで、こんな奴が生徒会の書記なんだか。誰がした。誰が）
深いため息を隼はついた。

「まあ、俺の人望がありすぎるのがいけないだよな」

去年の5月、暖かい日差しが差し込むようになった時期である。

書記に当選した事を今のように自慢げに話していた事を隼は思い出す。あの日、自慢げに話している時のヒゲの誇らしそうな顔は不気味であった。あの時のヒゲの顔は、今でも表現がしづらい。

そう言えば、なぜ金山さんが巫女服のコスプレをしているかと疑問を持つている人が多いだろう。この教室だけではない、このコスプレは学校中に見られる光景である。

我が学校の伝説になる話である。今でも忘れない2ヶ月前の生徒総会の時だ。

書記なのに教壇の前に立ち、ヒゲはこう演説をした。

「古き風習はいらない、ここに新しい委員会を発表する。メイド委員（美化委員）、巫女委員（学級委員）、体操委員（体育委員）、看護委員（保険委員）を新たに作るうと思つ」

演説を熱狂的に怪しい宗教の教主の演説みたく話す。

その演説を一端くぎると、その間は凄く静かだった。

入学式、卒業式、いや、あんな暇で長つたらしい校長の話のときでさえあんなに静かになったことはない。他人の唾を飲む音さえ聞こえてきそつだ。

「委員は業務を行うさい制服を着用する。なぜなら、社会には制服という枠で役割がより分かりやすくなっている。それは、とても効率の良いことである。君たちは警察を見てその前で悪事を働こうとはしないだろう。それなら、学校でもそうではないだろうか」

さつきまで、頭が真っ白だったかようやく隼は理解した。そして、他の人も理解したのか、静かだった体育館が、今では床が底抜けするぐらいに騒がしいものになった。

「はあ、何を言っているの?」「つつか、ばかじゃないの」

女子が否定的な意見が述べている。常識的に考えてそうだ。

その状態を見て、ヒゲは指をパツチンと鳴らす。教壇の後ろの布を掛けているのを副会長が取る。

なぜ、副会長が裏方の役をしているんだろうか。こうゆう案を出させてくれると言う事は、もはやヒゲは生徒会を牛耳てるよな。と隼は考えていた。

「これを見てくれ。こちらは、生徒会で案を出し家庭科部に作ってもらった服だ」

指を後ろに指す。男共は「うお〜」という掛け声を一齐に発する。

やはり、この学校は変態ばかりだ。

「ちなみに、このメイド服はこのふりふり〜〜という事だ」

などと服の自慢をする。この先は長い話になるので省略をさせてもらおう。

決案を出そうとする。この案が通るかどうかは生徒の過半数以上を取ればいい。

(はつきり言おう、こんな案が通るわけが無い)

だが、隼は切望を胸にしていた。一応、男だし。

「では、賛成の人はその場で手を挙げてください」

この学校ならではのやり方である。普通は紙に書いて賛成か否定

大声で叫んだ。しかし、いつの間にこんなに協調しあっているんだ。隼は疑問に思った。

この1年間でヒゲが怪しげの集団を作っていたことを知らなかった。(本当は知っていたが見てみぬ振りをしたかった……。)

後で聞くことになるが、その集団のリーダーはヒゲで、その目的は学校に「萌」を作ること。この案も色々と根回しをしていたそうだ。何も知らないたいけな小学生も使ってた。

「ちなみに、頑胞というのは元は中国語らしいです。共同して励めとも意味だと言われています。それが、アメリカの軍隊に伝わりガンホーという言葉に変わったそうよ」「

金山さんがいつものように解説する。

「いつの間に隣にいるんだ。もっと前のほうにいたはずなのに?」

「私のスキルです。がんばりましょう」

金山さんは静かににっこり笑う。

(返答の意味が分からないぞ、しかも、ヒゲの賛成派なのかよ)
のちにこの事件は小学生以外の女子に非難を受ける。

先生に抗議しようが「決まったことだから……」「まあ、生徒の自主性に任せる」と言い訳をして去っていく。

どうやら、先生の後ろに暗躍をしている人がいるそうさ。まあ一人しかないない。

そして、ヒゲは男子達には英雄として、女子達には最大の敵として認識された。

そう回想を思い返して、隼は教室を見回すと、金髪の「美」がつ

くほどの美少女外国人のメイド服は似合っ
て目の保養になるが、丸刈り野球部のナース服はとて
もではないが凝視は出来ない。

「さてと、みわちゃんが来るまでに座
んないと。転校生か、楽しみだな」

学校の朝礼の始まりを知らせる鐘の音が島中に鳴り響いた。

ヒゲは主人公ではないよ!! (後書き)

ヒゲのキャラが目立ってるよゝゝゝ。

転校生が来ることで話が進むのはよくあることだよね!!

はりせんを机に叩き今日も元気な声が響き渡る。

「おはよう。なんと今日は転校生が来るでえ〜。男共は喜べ。結構かあわあええよ」

特徴的な大阪弁を話す大阪出身でもない北海道人。23歳という若さで担当のクラスを受け持つ。しかも、副生活指導の先生である。まあ、この学校は先生の数も足りていないと言う事だ。しかも、その若さで一児の母である。

「イジメはないように。や、入ってええよ」

先生の言葉とともにドアが開く。

身長は145cmぐらい、髪は日本人特有の黒髪で短い。背は低いくせに胸はある。予測としてDカップぐらい。手には剣道をしているのか、竹刀袋を持っている。容姿は胸がある座敷童子みたいだ。ヒゲの方に目をやると、値踏みをしているような眼つきをしていた。男共が歓喜の口笛を吹く。しかし、人数が少ないせい、口笛の音もすこし虚しかった。

(口笛、吹かなきゃ良かったよ・・・)

隼は顔を真っ赤にし、少し恥じた。

座敷童子に似ている少女が教卓の前に立ち教室を見回す。顔はだんだん険しいものになってくる。

「なんだ、この仮装は。何だか知らないが、拙者が来た限りこの風紀は取り締まる。ちなみに拙者の名前は近衛刀だ。好きな言葉は正

義だ。以上」

威風堂々と言う言葉が似合うだろうか。コスプレ衣装を見たら、目を真ん丸くするのが普通であろう。

知らないとはいえ、ヒゲに逆らう言葉を発言するとは・・・。

ヒゲの方を見ると、どうやら近衛刀を獲物と判断したらしい。

どうやらクラス全体の皆が認識したらしい。変人の分類だと言う事を。

「正義」という言葉を発するのは、たいていは怪しいにおいがする。

「よし、近衛刀に質問タイムや」

先生は、はりせんを手で回しながら「ほらほら」と周りにはやし立てる。そのお蔭で数人が拳押し質問をしてきた。

「前はどこに住んでいたんですか？」

「日本」

無愛想に面倒くさそうに単語一文字で答えを返す。

普通は前に住んでいる地名を言うのが常識だろう。しかし、大まかに『日本』と返すあたり、転校生のやる気のなさがうかがえる。

それでも、クラスメイトはめげないで質問を投げかける。

「彼氏いますか？」

「伴侶はいる」

その質問に何名か机に伏せる。近衛さんはなぜかクラスの金髪美少女を真剣に見ていた。

「和服に興味はないか？」

「拙者を愚弄するきか。さっきの話を聞いていないのか！」

このクラスで一人しか発さないであろう単語が飛び出す。もはや

分かりきったことである。

「この学校は分かりやすく服によって役職が分かりやすくなっているんだ。ちなみに、風紀委員は和服を着ることになっている」

(初耳だぞ? つゝか、転校生の姿を見て今決めたな)

分かりたくはないが、長い付き合いのおかげかヒゲの考え方が隼には手の取るようにその後の流れも分かった。

やはり、ヒゲの演説が始まった。そう、生徒総会に演説をした話だ。その話を聞いて男供はやはり雄叫びを上げる。

はつきり言って俺はついていけない。どうにでもなれと感じた。

(本当は心の中では期待をしている)

「拙者は知らん。そんなものは。風紀を乱しているのは、その生徒会自体なのか」

近衛さんはどこかで見たことがある様なニヒールの笑みを浮かべる。この笑みはよくは知っていた。獲物を見つけたときに顔を浮かべる顔だ。

よく見たことか……。他人がどうなるうが自分の目的が果たせればいいという笑みだ。

そう身近によくいるヒゲのその笑みとそっくりだった。それを見た後、いつも校舎では何らかの事件が発生した。

ヒゲと近衛さんの目線の先で火花が散った。どうやら互いに敵だと認識したようだ。

その後も、近衛さんに沢山の質問がされていくが、しかし、その返答も質素だった。分かった事は将来を誓い合った彼氏がいる事と、好きな食べ物がトマトと言うことだ。

質問時間が終了し、近衛さんは運が悪くヒゲの前の席に座るよう
に指示されたようだ。

「シブの隣の席に座りたい」

きつぱりと、はっきりと近衛さんは言った。

それほどまでにヒゲの前の席が嫌なのか。それとも先に見ていた金
髪少女を気に入ったのかどちらかだろう。

そりゃあそうだ初対面であれで、誰があこのヒゲの後ろの席に座り
たいだろうか。

誰だって女だったら天地がひっくり返ろうがそんなのは嫌だろう。
なにをされるか分かったもんじゃない。

金髪少女の名前を知っていた。知り合いだろうし、そこに座りた
いだろう。

（うーん！！）と呻りながら、先生は悩んでいた。ヒゲとのやり
とりを見ていた為にしようがないと思ひ承諾していた。

シブの隣の席の男子は「ちくしょう」と言い残しヒゲの後ろの席
に移っていた。

分かるぞ、その気持ち。シブは美人だ。金髪の髪が神々しいほど
に美しい。ちなみに去年の島の美人コンテストの優勝者である。

何人かの男子は近衛さんを見ていた。まあ、男なら仕方がない。
なぜか隼には興味もてなかった。逆に近衛さんを見ると寒気がす
る。本能的に近寄ってはいけないと体が警告していた。

（しかし、可愛そうにこの学校生活もシブの様にコブスレを着させ
されるだろう）とクラス一同共通な認識、話題になった。どうやら

ヒゲは気に入った様だ。

独り言で「胸がAカップだったら」と言っていたのは気にしないで
おこつ。

転校生が来ることで話が進むのはよくあることだよね!!!(後書き)

大阪弁が分からないよ。同じ日本語なのに難しいよね。
句読点がどんどん分からなくなっていく。。。。

ライトノベルでは親と別で暮らしているのは常識だよな？

昼休みまで近衛さんは寝ていた。

我が学校では生徒の自主性を重んじ、うるさくしなかつたら授業中は何をしてもいいという校風なのだ。

途中に起こそうとした人がいたが、手を置こうとした瞬間竹刀袋で叩き落すという芸当を見せた。昔の武芸の名人みたいだった。

その近衛さんを昼休みで起こした人物がいる我がクラスのメイドさんシブである。クラスメイトで始めて接触をした人物であった。

近衛さんは他の人には無愛想な顔を見せたが、シブには無愛想ではなく色々な表情を見せた。

例えば、今のように頬を赤く染めながら昼ごはんを一緒に食べたり、寝ていてもシブに話しかけた男がいたら、いきなり起きてきて変な虫がつかないように威嚇をしていた。

その様子も、放課後まで続いた。

「今日、家に遊びに行ってもいい？」

「まだ、荷物が片付いていない。今度、遊びにきてくれ」

「なら、私の家に来る？」

仲のいい親友見たく、近衛さんとシブは家に遊びに行く約束をしていた。

なぜ、そこまで仲が良いのか2人の話は聞いていたいが、

「お前の妹の銘ちゃんが来てるぞ」

クラスメイトに声をかけられたので、仕方がなくドアに近づく

「おい、どうした」

不機嫌そうに声を出したが、年頃の男性ではしょうがない事であった。肉親がクラスに尋ねてくるのは恥ずかしいものだ。

仕方が無く、身長は隼より少し低く誰に似たのかしらないが雪み
たいな綺麗な白い肌もつ妹の方に顔を向ける。

「今日三者面談だから、私の教室に来て欲しいのですけれども」

そう言えばそうだった。今、家には親がない。ガス事件の時に親の勤めていた会社が無くなった為に出稼ぎにいつている。そのためこの島での妹との2人暮らしである。長く家を空けるのが心配なのか隼だけが、こちらに住むはずだったのに我儘を言ったことがない銘が

「兄さんが行くななら私もいきます」

親に銘はきっぱりと宣言した。それに父親と隼は断固抗議をした。

父親は銘に溺愛をしており、小学生である銘が親元から離れるのは反対、隼は一人暮らしをしたい年頃であるためにもちろん反対した。2人係りで説得をしたが、銘は首を縦には絶対に振らなかった。

それどころか、母親を味方につけ、父親を説得し、隼に銘を連れて行かないと生活費は自分で稼ぐだねと、母親に脅迫されるまでにいった。隼の一人暮らしの夢は断念するしかなかったようだ。

現在、生活費は銘が握っている。

それでも一応、銘の保護者は隼という事になっっているが、精神年齢では銘の方が上で、家の中では立場が逆転していた。

ついでに言うと犬神家では名所正しい神社に住んでいる。爺さんの代まで神主をしていたが、爺さんが死んでからは神主不在である。親が言うには、神主だけでは生活をやっていけないらしい。

「ああ、そうだった。今行くよ」

声を掛けたが銘の反応はなく、今日来た転校生を見ていた。

「あの人、今日新しく入ってきた転校生ですよね」

転校生と知っている言い方である。この島では人口が少ない。そのため皆が、顔見知りなのだ。一日も経てば、すぐに噂が島中に広まる程である。

「そうだよ。クラスに入ってきた転校生。しかも、髭の生贄候補だね」

同情しながら銘に話すと

「え、そうなんですか」

他人には無表情に見えるが、隼には沈んだ顔をしていると分かった。なんで沈んだ顔をしているのか疑問に思ったが、まあ、相手の

同情だと隼は思い直した。

「気をつけたほうがいいですよ」

「何に？」

ふと、銘がこちらに向ける。

「あの転校生に・・・」

銘の顔はいつもの無氷な表情だが、なぜか怒っている気配を感じた。なぜ、怒っているのか姪に質問する前に。

「三者面が始まります」

隼の背中をやさしく軽くなでると、銘は自分の教室に歩き出した。隼は近衛さんの顔を一瞥して、銘の後を追いかけた。

今日は転校生が来た事以外はいつも通りの日常だった。いつも通り学校に行き、ヒゲと話し、学校が終わると部活をして、家では銘が作った食事を一緒に食べ、疲れを癒すために風呂に入り、そして寝る。それが毎日の繰り返しだった。

しかし、その日常も自分の人生も終わるとは思いもしなかった。

ライトノベルでは親と別で暮らしているのは常識だよな？（後書き）

ライトノベルでは親とあまり暮らしていないことが多いよね。家族をテーマにしているライトノベルは別だけどね！！

親衛隊（笑）！！

「号外〜〜。号外〜〜」

次の日、登校すると、我が学校に誇る新聞部の大声が聞こえてきた。

しかし、今時「号外」という言葉を聞くのはすごい古臭く感じるが……。

新聞部の人達が新聞を配っているのを手に取ると、見出しに大きな字で書いてあり、見出しを読もうとすると後ろから声が聞こえてくる。

「副会長、工藤章君、書記、新藤久信君が怪我して本土の病院にいったんだよ」

美しい声をしたほうを向くと

「おはよう」

ヒゲの生贄のシブが元気に声を掛けてくる。隼も「おはよう」と声を掛けた。シブは新聞紙の見出しに指を刺し、

「私ね、その新聞の見出しにある記事の現場に居たんだよ」

自慢するようにシブは言ってきた。ヒゲがいる前では内気な性格

だと思っていたが、意外と明るい性格のようだ。いつも、ヒゲが側にいたために、2人だけで話すのは始めてかもしれない。

それに、いつも思うが、金髪の外人が日本語を上手に話すのがとても違和感がある。

そのためか、少し緊張する。

「そうなんだ。どうして、あいつが病院送りに？」

ヒゲには興味がないが、話の流れで聞いてみた。

「簡単に言うとね。昨日の転校生、刀が来たでしょう？その・・・、手を出そうとしたらしたのよ。私みたいだね。そしたら、刀がすごく怒って、教室の窓から落としたんだよ」

ヒゲの事件は本当にどうでもいいが、転校生の事を昨日の今日で名前を呼び捨てにして呼んでいるのに気が付いた。

仲の良い女子でも「さん」「ちゃん」付けて呼ぶシブには珍しいことだ。

(窓から落とすとは、またや、変な特徴がある人がクラスメイトの一員になったのか)

そうゆう認識で済むような隼も変人の仲間だとは自分では気が付いてなかった。

「で、大丈夫なのか」

「1週間で病院から出てこられるみたいだから平気じゃないかな。」

その間、私はメイド服着なくても済むんだよ」

とても嬉しそうに言う。

隼は内心に「しまった」と思った。

美しい少女のコプスレが見れないという事は非常に残念だ。

「そう言えば。副会長はなぜ、病院送りに」

「あの人は、ほら校内で有名な女好きだから。手を出そうとして新藤君と同じ状態に・・・」

玄関に着きシブは上靴に履き変えながら気まずそうに言った。

副会長は、校内でも有名な女好きで、狙った女はスツポンの様に追いかける。

シブも狙われた時があった。その時の記憶が嫌なのか、その人の名前は言おうとはしなかった。

そのスツポンの工藤をどう諦めさせたのか？

それは、誰も逆らうことは出来ないヒゲが登場し撃退した。

シブは美化委員にも入っているし、その事件の解決のお礼のためなのか、メイド服を着るようになった。

「あ、なるほどね。で、その窓から落とした人物は自宅謹慎かい」

シブに聞いたとき隼の背後に殺意を感じた。

後ろを見ると昨日の転校生、近衛さんが立っていた。

昨日のように竹刀袋を持っていて、隼の顔を睨み付けながら、シブの手を引いて先に行く。

「今日学校に来ているということは平気なんだな」

隼は自分の上靴を手に取りながら、静かに小さな声で呟いた。

後でクラスメイトに聞くと、病院送りにされた二人組みは問題児という認識をされていたみたいで（まあ、当たり前か）、近衛さんが被害者（転校初日でもあるから）という立場らしいと説明された。

（しかし、近衛さんは本当にシブの事が好きなんだな。百合か？百合なのか？マリ てなのか）

心の底で、隼は淡い期待をしていた。

教室に着くと、近衛さんは昨日と同じように寝ていた。

シブはクラスの女子と話している。

男共はやはり少しへこんでいて、シブのコスプレを見られないのは精神的なダメージがあるらしい。その男供とシブのコスプレを見られない残念会を開き、不本意だがヒゲが早く復帰しないかとバカ話をしていた。

今朝の新聞の情報によって、裏の支配者を病院送りにしたとして、校内では近衛さんの噂が有名になっていた。

女子生徒には英雄として語られ、男子生徒には、裏のオークションで近衛さんの写真が出品されるほどまでになっていた。

我がクラスではシブと並び2大美人の誕生である。

そんな騒ぎに拍車を掛ける事件が発生、いつもの授業では寝ていた近衛さんも体育にはしっかりと参加し、1000m走を10・04秒の記録を叩出したときには驚愕した。

のちのち陸上部の女子に聞くと、女子世界記録を超しているそう

だ。

そのため、体育の先生や生徒達の部活勧誘大合戦が始まった。しかし、それを近衛さんは睨みつけ威嚇し撃退、それでもしつこく勧誘をしていた部員は昼休みに3名ほど行方不明になったため、それ以降は勧誘する人は誰もいなくなった。

その噂に拍車をかけ、畏怖と尊敬の眼差しが集まった。

1週間後には親衛隊が出来るほどまでの大きな組織になるのは別の話である。

ようやく事件の始まりです。

授業を受け放課後を向かえ、部活動（茶道部）も終わり山が真っ赤に染まる頃、後ろに誰か付けている？と気づいた時には山道の人通りが少ない道だった。

隼は走っても止まっても、ピッタリと付いてくる事を確認した。

（なんだ、ストーカーか？もしかして、副会長か？

しかし、あいつは本土の病院だし男だからな。だけど、両刀使いとも噂されているし、こんな辺境な島ではみんな顔見知りで、人をつける行為をするのは副会長以外いないからな）

隼は馬鹿な考えで思考が埋まる。

その思考が正しければ隼の尻の が危ないと言う事だ。

別の意味で身の危険を感じる。

「おい、おぬし止まれ」

この声に口調は最近聞いたことがあり、すぐに振り返ると、その人物は思ったとおり近衛さんだった。

「何かようか？」

近衛さんとは転校してからちゃんとした面識は隼には一回もなかった。

しかし、近衛さんの睨んでおり、あきらかに敵意を感じた。

(まさか、シブを口説いていると、勘違いをしているのか?)

今朝方、シブと会話していた事を思い出していた。「ただ、世間話をしていただけだ」と声をだそうとしたが、

「おぬし

」

隼が言う前に近衛さんが話しかけた。

その声に背筋が凍り畏怖を感じ、なぜか手が震えだし鞆を落とす。近衛さんは隼の顔見て手に持っていた竹刀袋の紐をゆっくり解きながら言う。

「拙者の事を覚えているか？」

なぜか、竹刀袋を解く行為が、とても隼には嫌な予感がした。

隼の嫌な予感は結構な確立で今まで当たっていた。

ヒゲが起す事件に巻き込まれたり、島の火山が活動したときもそうだった。そして、今度は命に関わるような予感がする。

しかし、近衛さんについては、いくら考えても昨日が初めて会ったばかりで、隼には覚えがなかった。

「拙者は、おぬしの事を忘れた事はない。本当に忘れたことは、
」

視線は地面を向け、近衛さんの顔は親の敵を見るみたいに憎悪に歪んでいく、最後のほうは「ごにやごによ」と言葉になっ
ていなく何を言っているのか分らなかつた。

「おぬしの子供の毒のせいで死んだ。しかも、おぬしの呪いのせいで拙者は女として生まれてしまった。そしておぬしのせいで！」
地の底から出てきそうなうめき声を出し、隼の顔さらに睨みつける。

（何を言っているんだ。何を・・・）と呆然と立ち尽くし、隼の背中は冷や汗が滝の様に噴出している。

近衛さんの鬼のような形相を見ると腰を抜かしそうになる。

近衛さんは竹刀袋を取り、その中身は竹刀ではなかった。

その中身は細長い柄が特徴な金鎚だ。

「その・・・金鎚を・・・どうする・・・つもりだ？」

震える声を出しながら隼は言った。はっきり言って怖かった。近衛さんの体はピクピクと震えている。

「おぬしのせいであのおなごとは結婚できない・・・。妻にもできない。お前のせいで・・・」

隼の話は聞いていないようだ。あの人とは誰だろうか？

「それで、おぬしは拙者のことは覚えているのか？」

百獣の王の前で武器も無く立ち尽くしたときはこんな感じだろうか？

自分の体なのか感覚がよく分からなく、すごく、重く感じる。
近衛さんが質問した答えには、隼にはその記憶も無く答えようが
無かった。機嫌を悪くしないように慎重に答えないと、本当に金鎚
で殴られそうな勢いだ。

「落ち着いてくれ、まず、その金鎚をしまつてくれないか」

震える声を抑え、しっかりと隼は答えた。

「覚えているのか。覚えていないのか。はっきりせえい」

興奮したように大声で言う。

「どうやら、問答無用のようだ。」「やばい」と思い早口に隼は言
った。

「す、すみません。覚えてないです」

つい隼は敬語で話してしまう。

その敬語で答えた瞬間に、近衛さんは鋭い眼光とともにニヤリと
背筋が寒くなる笑顔を見せた。その笑顔は獲物を前にする獣に似て
いる。

金鎚を上段に振り上げながらゆっくりと隼に近づいてくる。

「じゃ、素直に死ね」

簡単に言うと、勢いよく振り下ろした。

その瞬間、ヤバイと思い後ろに下がろうとしたが、足が纏れて坂
にころげ落ちた。それがよかったのか上手く避けられた。

すぐに近衛さんの方に向くとこの世の物かと思うぐらいの映像を見た。

近衛さんが振り下ろした金鎚から電撃を起こし、その金鎚の振り下ろした周り直径10メートルぐらいに大きな穴ができ、鞆は跡形も無く灰になっている。

昔、凶鑑で見た隕石が地球に降りそそいだ跡、クレータのようだ。

（まさか、あの金鎚で電撃を起こしたのか？ まさか、今の科学ではそんなの無理だ。しかも、近衛さんの体は電撃を少しでも浴びている筈なのに無事なのか？）

隼の思考はぐちゃぐちゃになり何を考えているのかが分からない。

非現実？ 現実？ 夢？

「おぬしが覚醒してないのなら、電撃を起こさなくても殺せるとは思う。しかし、もしもと言う事があるのでなあ。おぬしが作らせた物で殺せるとは……。おぬしにふさわしい死に方だな。はあ、はあ、はあ~~~~~」

目が笑っていない状態で近衛さんは笑い声を上げる。隼は何を話しているのかは頭に入らなかった。人間を殺そうとしているのに、人間としてみていない目、人を物だと思いながら見ている殺人者の目だ。

（逃げないと。逃げないと。逃げないと—————
—————）

本気で殺されると思った瞬間に、人間の生存本能なのか気が付いていたら隼は走り出していた。

逃走開始です。

どこに逃げているのかが隼には分からなかった。

分かることは森林の中を走っていることだ。それ以外は今は何時だろうかさえ分からない。

もしかしたら遭難をしているかも知れない。でも、殺されるより遭難の方がましだった。

(なぜ、俺が襲われなきゃいけない~~~~~)

逃げながら冷静になって考えてみると、あまりにも理不尽さにムカツイてきた。

自分は何も悪いことはしていない。

しかし、あの電撃を引き起こす金鎚をみて恐怖で体が竦む。

隼の頭の中は、怒り、恐怖、羞恥心で交互に頭が駆け巡った。

外の暗さから見て近衛に襲われてから30分は過ぎていそうだ。

山の方から消防車のサイレンの音が聞こえてきた。さっきの電撃で山火事にでもなったのだろうか。

(放火犯として捕まればいいんだ)

心の底から隼は本気で願った。

悪態ついたお蔭で周りを見る余裕がでてきた。

どうやら、近衛は追ってきてないらしい。

その事が分かり心の底から安心し、顔に涙や鼻水を垂らしていたことに気が付き服で拭いた。

(惨めで醜いな……。とりあえず、駐在所に行こう)
惨めな気持ちを振り切り夜空を見上げる。

隼の気持ちとは裏腹に、夜空は曇りもない綺麗な満天な星空があたりを照らす。

その中から北極星ポラリスをみつけ、方位が予測できた。

警察官に保護してもらうため予測した方位に向けて森林を隼は歩き回った。

少し安心したせいなのか、今更、体の疲れを隼は自覚した。
よくこんな表現を言う人がいる「鉛の様に足が重い」その言葉が今の状況を的確に表している。

本当に鉛を付けたみたい足取りが重かった。

(こんな遅くまで家を空けたことがなかったから、銘、すごく心配しているだろうな……。)

妹の事を思うと、鉛の様に重い足取りも、鞭打ちながら足を動かした。

それから、数時間が立ち、駐在所がある町がもう少しで見えて来
そうな所まで来た。

あともう数千メートルぐらいで町に着きそうな所に、顔を合わせ
たくない人物の影が目に見え込んだ。

隼がよくやるテレビゲームで例えるとボスとのイベントである。

しかし、隼は勇者ではなく村人がいい所。逃げるにも体力は限界
に近い。まず、話し合いで何とかならないのか思案する。

「おぬし、もう走らないのか」

近衛刀は軽口を叩きながら話す。

獲物を狩るような眼光と笑みは先ほど対面のした時と同じ笑みを
浮かべている。そして、隼にとっては、まがまがしい金槌を右肩に
乗せている。

「はい、おかげさまで。あの、昨日のことですが、人違いではない
でしょうか。あの、私、あなたと初対面・・・です。あつたこと
がないですし、それに、私を殺すと殺人ですよ。警察が黙っている
とは思いませんよ?」

少し皮肉を混ぜながら下出に出て言う。

今、隼のイメージで言うと、お得意様から媚を売りながら右手と
左手を擦っている商人のイメージを浮かべる。

自分の出来る事と言えば説得・情に訴えるしかない。

「官がどうしたって、電撃で灰になるのだから証拠は出ません。そ

れと人違いではない拙者は気配で分かる」

自信満々に近衛は答える。

（『気配で分かる。』どこの剣道漫画だ。昔、話題だったゲーム脳かよ。人が死ぬんだぞ。人が・・・）

隼は顔に出さず内心悪態をつく。しかし、引き下がるわけにはいかない。

「ちよつと待て、せめて理由を教えてください。理由を……。何も知らなくて死ぬのは嫌だ。なぜ、命を狙われる」

必死に早口で言うと近衛は考えるそぶりを見せた。その間、隼は生き残る手段を考えていた。

必死に走り、たぶん6分も走れば町に着くであろう。

しかし近衛は1000m走10.04秒台の足を持つ。しかも女子世界最速記録を超えるほどの速さがあり、逃げ切れないだろうと立案する。

ここで、悲鳴を出すのも隼は考えた。

しかし、その瞬間に”終わり”というプロットが頭に表示された。やはり、話し合いが優先だ。しかし、どうやって活路を見出すか・・・。

思索している間に近衛がすばやく豹にも勝らない速さで近づいてくる。

隼が気付いたときには近衛の足払いを受け、隼は空を見上げていた。

地面に倒されていると気が付いた時には、隼の腹に近衛の足を置

かれていた。

「理由。まあ、別にいいだろう。おぬしが北欧神話に出てくる邪神ロキの生まれ変わりだからさ。そして、拙者はアース神族のツール。おぬしがアース神族の最大の敵だった男だから殺す」

(はあ、北欧神話？悪いけど北欧神話は詳しくない！！分かるのはオーデインと悪戯好きなロキぐらいだ。何、ゲームの世界？やっぱりゲームの影響を受けた奴に殺されるのか)

必死に近衛の足から抜けようともがくが、ピクリとも動かなかった。

軽そうなチビの凶体の癖に、どこにそんな力があるのか隼は不思議でしようがなかった。

「悪いけど、くっく、ゲームはあまり・・・詳しくないんだ。俺を、・・・殺したらお前の親御さん・・・が泣くぞ。その前に・・・
・辞め・るん・だ」

近衛の足の力のせいか喋るのも苦しい。

頑張つて隼は刑事ドラマで、よく犯人が人質をとり刑事が説得する定番の言葉を発するが、

「ゲームの世界とは違う。この金鎚を見ただろ。電撃を起こすところを、この金鎚はミヨルニルという名で前世のおぬし、つまりロキの命令で作りに出したものだ。そして、このミヨルニルがおぬしをロキだと言っている」

そんな金鎚を出してロキだと言っているとわかれても、無機物を見せてもらっても話せるわけが無い。

「て、言うことで死んでもらう」

「待つて・・・くれ。ちょい・・・待つて。聞き・・・こ・・・ある」

なにかを言わないと殺される。近衛の足に手を握りしめながら隼は情けない声だが必死に声を張り上げ様とするが

「殺す」

その言葉と同時に近衛は金鎚をすばやく振り下ろす。

隼はその金鎚がゆっくり振り下ろしているようにみえた。

(そうか、自分の身に危険がせまると物体が遅く見えるのか・・・)

隼が見た最後の映像は、朝日で照らす近衛刀の美しい無表情な顔だった・・・。

そして、この日、犬神隼は死んだ。

私は、トールの意思で人が死ぬところを見ました。

そう、もう戻れない所まで来てしまったのでしょうか。

死体も無く・・・。ただ、ロキという人の体があったところの地面には焦げ付いているだけです。

私は諦めました。

そう、昔から諦めることは慣れているのです。私はもう人を見殺しにしたのも同然です……。

僕はヘイムダル。

どんな距離をも見通す目、どんな音も聞ける耳、眠りも必要としない特技を持っている。

前世では神々の黄昏のときに、ロキと戦い相打ちで死ぬ。

しかし、僕たちは人間として生まれ変わったのだ。

巨人族もでも無く、神族もでも無い。

世界の黄昏では最後は人間が生き残り繁栄をもたらしした。

今や僕たちはたかが特殊能力と前世の記憶を持った人間ではないのか。

僕には現代の記憶のほうが大切なのだ。

ロキの居場所を教えて正解だったのか？

ただ、今は罪悪感が込み上げてくるだけ……。

しかし、前世でも現世でも僕は傍観者である。

『夢才チ』は許されないことですよね。

「起きてください」

体を揺さぶられる。「あともうちよい」と言い隼は布団にうずくまる。

「もう、そう言って中々起きないじゃないですか」

誰かが、布団を引き剥がそうとする。そんなやり取りで「うとうと」と思考能力を取り戻す。

(ちよい待てよ。俺、昨日殺されかけたよな?)

隼は自分の体を起こし確かめるように腕、足を見回すが傷一つ無い。

「火事は？ 電撃は？ 近衛は？ なんで、俺はなぜ生きているんだ？」

ベットから素早く上半身を起こし、隼の妹、銘の肩を必死にゆらす。

「ちょっと、落ち着いてください」

焦るように隼を手で止める。

「深呼吸」

隼の顔に綺麗な肌をもつ白い人差し指を指さしながら、さん、は

いと掛け声を掛ける。

「落ち着きましたか。質問に答えます。火事はありません。昨日の夕方ごろに雷が落ちたそうです。山火事まで発展したので、消化するのに3時間程掛かりました」

深呼吸した後に淡々と銘は答える。そして、あきれたような口ぶり、

「どんな夢を見たのか知れませんが、覚えています？」

ジロオと隼の顔を見る。

「今日の朝方に、学校の裏の階段の下りた場所で倒れていたのを発見されたんですよ」

いったん言葉を止めて、隼の方をジイーと眼を向けてくる。訳を聞かせるという無言の目線だった。

しかし、隼にはその目線を気にする事もなく考え込む。今日の朝、確かに殺されたはずなのだ。

自分の頭が潰される感触がまだ残っている。しかし、体に一つも傷がない。あんなに森林の中を走ったのにだ。

「八重さんに電話を貰ったんです」

八重さんとは銘の友で、家は学校のすぐ近くにある。銘は小言をもらしながら隼のベッドにストンと静かに座り込む。

隼はあの事件は夢だったのか、自分の体を見て夢だよなと思うこ

とにした。しかし、すごく記憶が生々しいのはなぜだろう。

「倒れていた状況を見ると、階段からころげ落ちたらしいですけど何をしていましたか」

今度は、目線と一緒に言葉でも訳を聞かせてもらつぞと圧力を掛けてくる。

「いや、たぶん……。何をしていたんだろうね」

呆然になりながら話す。本当に分からなかった。とりあえず、自分分は生きていた事だけだ。その隼の様子を見た銘はとりあえず無表情で一回咳払いし、

「まあいいです。落ち着いてきたみたいなので次に鏡を見てください」

銘は手に持っていた手鏡を隼の方に向け顔を映しこんだ。

「口調、表情、仕草などの結果、兄さんだと思えますが、とりあえず聞こうと思っています。あなたは誰ですか？ 犬神隼ですか？」

隼は不思議そうにその鏡を覗き込んだ。

「誰？」

「あなたの姿です」

「だれ？」

「あなたの姿です。2度も同じ言葉を言わせないでください」

隼が覗き込んだ鏡には、知らないあどけない少女が映っていた。

その少女が誰なのか隼は気がつくのに1分間掛かってしまった。

その知らない美しい少女の顔は、隼の作った表情と一緒に動きをしていた。

「銘、その鏡はマジシャン！！うえ」

隼は奇妙なソプラノ声を出した。

なぜ、起きた最初の段階で気がつかないのだろうか？

いつもと違う、凄く高い音階の声に戸惑いを見せた。

そして、恐ろしい違和感があるのに気がついた。

重圧な感触が胸に……。そして、男性特有の下半身にはぶら下がっている感触があるはずなのに、物の喪失感がある。

「うえ、なんだ。この声は……。もしかして、この顔、胸！！」

隼が胸を触るとやわらかい膨らみの感触があったのだ。そして、下の感触も確かめるがなかった。

「女になってる・・・？」

呆然とポロツと隼は言った。

「落ち着いてください。とりあえず犬神隼ですか？」

妹に疑問をもたれているのが分った。それは隼にとって妹に絶対に信じてもらわないといけない。とりあえず、何か言わないと

「そうだよ。犬神隼だよ。信じてくれ。犬神銘の兄なんだよ」

かつて無いほどの切実な声を隼は張り上げる。銘はその返事を聞いて隼の手に自分の手を重ねる。

「少し落ち着いてください。もう一度、深呼吸をしてください。では、質問しましょう」

銘は学校の友達（ヒゲの伝説事項まで）や、この島の人たち、家族にしか分からない事項を質問してきた。さらには昨日の朝の献立のメニューまで聞きだしていた。

昨日の朝の献立のメニュー以外はしっかりと隼は答えられた。まさか、昨日の朝の食べた食事なんて普通は忘れているだろう。

その時だけ無表情である銘の顔が少し不機嫌そうに見えた。

「分かりました。あなたは私の兄さんです。安心してください。もう、疑ってはいけません。とりあえず朝ごはんの用意ができましたので、準備できしだい食卓にいらしてください。話はそれからです」

その瞬間、隼のお腹の音が鳴った。今思えば、昨日の昼が最後に食べ物を食べた記憶がまったくない。

その音を聞いて銘は俺の部屋から出て行くこととする。

「心配かけてごめん、ありがとう」

隼はいつも言えないような言葉が素直にポロと出た。

「まったくです」

銘が後ろ向きで返事をした。その言葉にすごく暖かさを感じられた。

とりあえず状況確認をする。まずは自分の体だ。自分の状態を確認すると自分はシャツと柄パンだけの状態であった。

まさか、銘が脱がしたわけではないような。と想像するだけで頭を抱えたくなる。自分の記憶が無い間に体を弄繰り回されるのはすごく恥ずかしい。

制服の状態は擦り傷もなくいつも通りの状態であった。森林の中を走っていたら、こうはならぬだろう。しかも、その横に昨日の闇討ちで灰になったはずの鞆があった。だんだん、あれは夢だと思ってくる。そう現実なわけがない。金鎚から電撃が発生するなんて。。。

そして、確かめたいような確かめたくないような気持ちで、自分の体を見る。

鏡には美しい薄い茶色のウェーブヘアが腰まで伸びていた。目も美しい薄い茶色の目をしている。

金持ちで穏やかなお嬢さんという感じがした。自分のひいき眼で見ても、都会の町で五分間ただ立っているだけでも、ナンパなど寄ってくるだろう。

身長も男だった時より低く、自分の部屋なのにもとは違った風景に見えた。

さて、「これは状況を把握するためのだ」と隼は自分に言い聞かせて、うきつきと服に手を掛けた。

ジーパンとTシャツに着替えていて、ふと、あの夢がもしかしたら本当だったらと思いついた。今、自分が女性になっているのが現実だ。

隼は現実と夢の空間の境界線が崩れていた。

あの夢が現実だったら……。

夢の近衛の目は人を人として見ない目はすごく恐ろしく感じた。

武器を少しでも持っていたら。あの金鎚を振り下ろし終わった後を狙えば何とかなるかもしれない……。そう、武器があれば……。

武器と言えばバットが定番である。

ある日を境にバットを持って素振りの練習をする。

そして、バットで人を殺しバットエンドなんてね。寒くなってきた。

自分のギャグ自分を寒くするとは……。

ふと、忘れていた。今は女性なのだ。近衛も気がつかないだろう。

まあ、武器など持たなくても良いかと思ひ、食卓に向かった。

『夢才子』は許されないことですよ。(後書き)

主人公の女性化は1番やりたい事ですよ。
さて、ヒロインどうしようかな〜!!
この際、主人公でいいかな・・・。

家族

「遅かったですね」

台所の前で食器を洗っている銘が声を掛けてくる。

いつもの様に先に「ご飯を食べたようだ。」

「ああ、ちよつとね。どこか体に傷が無いか確かめたんだよ」

着替えの時に気持ちを落ち着かせ、銘が作ってくれた朝飯の前に座る。

今日の朝御飯は定番の出し巻き卵、焼き魚、味噌汁、白い米だ。うちのご飯は和食と決まっている。その理由は、母と銘は洋食が嫌いなのだ。夕飯にピザやパスタを食べてから嫌いになった。女性陣いわく、「チーズ、ケチャップ、マヨネーズみたいな調味料は嫌いです。日本人は醤油です」が言い分だ。

たまには洋食も食べたいが、犬神家では女性陣の権力が強いために逆らうことはできない。さて、お腹も減ったし頂くか。

「そうですか。医師の診断では怪我はないようですし……。あ、それと八重さんの叔父様にお礼を言ってくださいよ」

洗い物が終わったのか、手をエプロンで拭きながらこちらを向く、

「八重さんの叔父様の車でこちらまで運んでくれましたので」

「うんほった」

食べ物を含みながら返事をする。昨日の晩からご飯を食べていないので、隼はほうばるように食べていた。

「食べ物を含みながら喋るのをやめてください」

礼儀正しい神社の娘はどんな状況でも注意はやめない。

「それでは、本題に入ります。性別が変わるのは体質ですか？」

銘はエプロンを脱いで、隼の前に座り込んだ。

「ちよつと、待って……。俺にも分からないんだ。起きたら女になっただけなんだ」

「そうですか」

銘は簡素な返事をする。兄が女になったのにこの落ち着きようは何なんだ。と隼は思う。

まあ、化け物扱いなどにされないだけマシである。しかし、もう少し心配してくれてもいいような気がするが。

「しかし、銘は俺が起きる前から平静だったよな。その時俺は女の姿だったはずだけどなぜ分かったんだ」

「兄さんがベットに運ばれた後のことでした。朝の6時ぐらいに女に変わる瞬間を見ました。体の構成が分子単位で分解され新たな体に構成されていく瞬間を初めて見ました。その瞬間はとても神秘的でしたよ」

銘は自分の湯呑みを横の食器棚から取り出し、事前に急須にお湯と茶葉を入れていたんだろ。その急須を傾け湯呑みにお茶を入れた。

「その時は凄く驚きましたが、今朝の様子を見て直感的に兄さんだと分かったんです。言葉使いや仕草がいつもと同じだったものからです」

銘は一息をつき、湯飲みをゆっくり口に付ける。その姿は日本の代表な大和撫子という言葉がとても似合う姿であった。

銘が話した夢物語は、現実だと思い込まなければいけなかった。今、自分は男ではなく女になっているのだから……。

「もしかして犬神家の奇病なのか」

「それはありえないと思います。もし、奇病なのだとしたら幼少の頃に聞かされているはずですよ」

銘は即答する。隼はその返答に納得した。隼は心奥底にある突っかかりを聞いてみたくなった。

「銘」

「はい」

「俺の事……。怖くないのか？」

「なんですか？ それは」

銘は首を傾けた。不思議そうな雰囲気を醸し出している。

「いや……。いきなり性別が変わる家族を持って怖くないのか」

隼は自分で口に出した事で不安がさらに募っていた。その不安が何かとは隼の思考には分かっていたいなかった。今までどんな不安も帰る場所に銘がいた。それが現在この場所で、家族である銘に存在が拒否される不安があるのには隼の思考は気がついていない。

しかし、感じていた。思考ではなく心に。

「そうですね。吃驚しましたね。いきなり性別が変わるんですから。ただ、それだけじゃありませんか。兄さんは私になにか危害でも加えるんですか」

「いや、そんな事はないけど」

「ならいいじゃないですか。私は家族として妹として受け入れますよ。兄さん」

優しい声で銘は話す。隼はその言葉を聞いて胸の奥の不安が消えていく。

そして、この機に隼は更にシスコンに落ちていく。

「……正し、一つだけあります」

銘の真剣な声を聞いて隼は唾を飲んだ。

「兄さんの……いえ、姉さんの胸のバストを少しだけ測らせてく

「ださい」

「はぁ？」

隼は大声で聞き返した。普通そうだろう。「胸を測らせる？」「何を言っているんだ？」と疑問が頭に浮かぶだろう。

「ですから。バストを測らせてくださいと言ったんです」

銘はポケットからメジャーを取り出した。

トールは調理自習のため家庭科室にいる。その家庭科室で何か分からない感情に悩んでいた。

その理由とはロキの事で悩んでいた。ロキを殺す事は我が神族には必須である。

しかし、なぜ罪悪感が感じるのかが分からなかった。

その罪悪感がさつきから頭に離れない。

ロキのある席には誰も座っていなかった。それは当たり前である。今日の朝方、自分で殺したのだから。

トールは『正義』のためにやったのだ。そうだロキはいつも『悪』をおこなっていた。自分の命のためなら敵である巨人族にアース神

族を売る奴だったのだ。

昔からロキは頭が良かった。しかし、その知恵も悪知恵にしか使わなかった。

何度ロキに騙されたことだか・・・。

「お、だんなじゃないか。上手い酒が手に入ったんだ。一杯やらな
いかい」

「おお、気が利くなあ。ご馳走になるか」

ロキに誘われこちよく酒を飲む、しかし、その酒には睡眠薬が入っていたのだ。

次の朝目覚めると巨人族の部屋に貼り付けにされていた事があった。決死の思いで抜けだしロキを問い詰めると。

「俺の命が巨人族に握られていたんだよ。だんななら大丈夫だと思
ったんだ。まあ、落ち着いて聞いてくれよ。命の恩人である旦那に
は電を倍増する神具を鍛冶屋に造らせているから、それで勘弁して
くれないか」

用意のよさと口八丁で命を逃れてきたロキだ。道具に釣られた拙
者もバカだったがこのような事件はまだまだ合った。

トールはミヨルニルと一緒にいるだろう竹刀袋を睨みつけ
た。

ミヨルニルはどんな時にも対応を出来るように竹刀袋を大切に持

ち歩いている。

(まあ、済んだことは仕方あるまい)

「刀、そのトマトを取って」

シブがツールに話しかけたため思考を切り替えた。

声を掛けたシブを見る。ツールは昔からその綺麗な黄金にも劣らない金色の髪が好きだった。

「ほら」

トマトをシブに渡し、シブはトマトを水で洗った。

そのシブの姿は神々しく思えた。どんな、女神にも負けない美しさがある。

たとえ、世界三大美女が現世で蘇ってきてても彼女の美しさには敵わないだろう。

しかし、ツールは分っていなかった。いや、生まれたときから自分を鏡で見てきたのだ。

美人のジャンルが違うが、近衛刀はシブと対抗できる可愛さを秘めていたことを本人は「ノストラダムスの大予言が本当は当たったんだよ」と信じさせることより難しい事だろう。

その証拠にツールの髪には寝癖がついている。自分の身だしなみには無頓着な証拠であった。

「シブ少しいいか？」

「何？」

シブは料理をしながら返事をした。その姿もツールに取っては可愛い仕草である。

「放課後に大切な話がある。付き合ってもらえないかい？」

そう大切な話があった。

とても大切な話が・・・。

家族（後書き）

したが分かりづらいかな・・・。

は場面の違いを表しま

タイトル考えるの大変ですよ。

バストを測った後、銘は少し不機嫌そうな顔をして、小声で「私より少し大きい」と聞こえた声は今でも耳に残っている。

その言葉は銘のためにも聞かないことにした……。

その後、隼は銘と学校を一緒に休み、病院に行くのかどうか話し合いになったのだが、すぐに、保険書や病状の理由（信じてもらえない為）断念した。

妹である銘も親身になって心配してくれるのは嬉しかったのだが、その後、島の中で唯一の婦人服屋である大浜商店に無理やり連れて行かれる事になった。

「この道を一緒に歩いた事がなかったですよ」

銘が嬉しそうに話しかけてきた。ちなみにこの道は学校に繋がる通学路である。

銘の表情は基本的に無表情だなど隼は関係ないことを考えていた。

「最初ぐらいは一緒に行ってほしかったですよ。こんな山道一人で歩くのはすごく、恐怖でしたよ」

やはり霧氷の無表情で話す。表情を出すときは基本的に家族が何かあったときである。

他愛無い話をしながら数分歩くと山火事が会った場所に辿り着く。

昨日、夢で近衛に襲われた所だ。

夢だと思っていたのに直径10mの穴が開いていた。

(夢じゃなかったのか……。穴が開いている。しかし、体は無傷だ……。)

隼は銘にこの穴のことを恐る恐る訪ねてみた。

「凄い穴ですね。雷が落ちたらしいですよ。森林に火災が起こり、消防車が沢山来ましたよ。兄さんを運ぶときも穴のおかげで車が揺れて大変だったんですよ」

(近衛が出した電撃のせいかな……。でも、燃えた鞆はあるから夢だよな)

思考を巡らせているときに、急に銘が隼の顔を覗いてきた。

「大丈夫ですか？ 顔の色が悪いですよ」

「全然、大丈夫だよ」

隼は妹にこれ以上、心配されるのだけは見たくないと思い瞬間的に返事を返し、無言で銘の手を繋いだ。

銘も何も言わないで手を軽く握り返し、隼の横に並んで歩いた。

隼は婦人服屋の前に立ち止まっていた。

男が入るのは禁断の隔離された場所である。

緊張の色を見せながらドアに手を掛ける。そして、初めて入った婦人服屋には沢山の色がついた下着が置いてあった。

「いらつしやい。学校はサボリかい？」

店員のおばちゃんが話しかけてきた。男共が行く服屋とは違い婦人服屋の場合、店員が話しかけてくるようだ。

「いいえ、学校は用事があり休みです。それよりも、この女性に合った下着と服をお探しですけれども」

銘が隼に白い手を向けながら言った。

「てっ、必要ないって下着なんか」

店の外までに聞こえる大声で隼は否定したが。

「兄、いえ、姉さん。Ｔシャツが透けていますよ。しかも、これから必要かもしれないじゃないですか？」

たしかに自分の格好を見れば透けていた。その事を理解したおばちゃんと銘にすごく説得されたのだった。

しかし、女の買い物は凄く疲れる。下着を3着買うだけで1時間掛かった。ああ、した方がいいとあれこれ話しかけてくるのだ。

今、隼が着ているのは下着の下は男物で許してもらった。しかし、

胸はさすがTシャツ透けるのでブラジャーを着けるのだが「ふりふり」や「ヒラヒラ」には抵抗があった。まだ男であるプライドがあるのだ。あんなこんなでスポーツブラジャーで落ち着いた。

しかし、婦人服屋のおばちゃんとの話し合いの中、銘は隼用の服を買っていたのだ。「それは絶対に着てたまるかあ!!」と宣言していたのだが、家に帰り銘が「昨日からシャワーを浴びていなようなので浴びてきたらどうですか?」と言われ素直にその指示に従ったのだが、その浴びている間に男物である服、下着は、全部洗濯物に出されていた。

今、犬神家は銘の他には白いワンピースを着た少女が居るだけだった。

放課後

ちょうど学校では授業が終わった頃だろうか、玄関に呼び鈴が鳴り響いた。

「姉さん。ではそこにある紙に書いている事を復習してください」

言われ銘は玄関に向かった。ちなみにその紙に書いてあった事は女の嗜みについてだった。

（もう嫌だ）と思い。テーブルに頭を預ける。

なぜ、こんな事になったのだろうか？

なぜ、ここまで教育されなければいけないのか？

鏡にうつる少女は天使見たく可愛いのだが……。その顔が悪魔に見えてきた。

（妹である銘にも「兄さん」ではなく「姉さん」と言われるようになったしなあ。しかも、すごく嬉しそうに指導するし、しかもこの服。スカートの下がこんなにもスウー スウーするとは……。はあ〜）

これまで、銘による「女の子」の教育が始まった。どうやら、女でいる事が嬉しいらしい。表情は相変わらず無表情だが、微妙に嬉しそうだった。

指導内容も、「蟹股で歩くな」「言葉に気をつける」などの指導がなされた。

(正体を隠すためだっけ言うけど、普通は分からないだろう。性別も変わっているんだから)

「隼はいるやろうか？」

いつも、学校に行くと教室で絶対に聞く声が聞こえてきた。

ちなみに銘が対応する声が聞こえてきた。しかし、その声を聞いてうちにどうやら対応を失敗したようである。

(複数の足跡がこっちに来る?)

隼は焦った。このまま、居間に居て対応するか。隠れるか。と考えたが、隼は後者を取り居間にある襖の奥に隠れた。

「えっと、とりあえずこちらで寛いでください」

隼は襖を少し開けそこから覗き見た。

銘は居間のドアを開けて2人の女性を招いた。食卓を囲むように上座に二人を招き、銘自身はドアの近くの下座に座った。

「おおきに」

「はい、分かりました」

やはり一人は、はりせんを持ち歩いている隼の担任であり、もう一人の方は学級委員の金山さんであった。しかし、ヒゲが入院中なのになぜ巫女服を着ているんだろうか。

「玄関でお話した通り隼君のお見舞いに来たんや。隼君の症状はどうや。大丈夫か」

「昏睡状態から目覚めませんでしたので、町のほうの病院に運びました」

銘は淡々と言いのける。しかし、もう少し心配そうな顔をして欲しいと思ってしまう。ちなみに、町というのは島の方言で札幌のことである。

「どうやるか？」

「症状は医師の診察では体の傷は軽症の事ですが、脳に損傷あり、そのため、本土の両親の家にご厄介になる可能性があります、学校も転入届を出す可能性があります」

顔にあまり感情が出ない銘の本領発揮する場面であり、あの顔で嘘を付かれると、大抵の人は信じてしまう。

ちなみに、島の病院は診療所のため患者が泊まり込むスペースがない。そのため自宅で療養するのがこの島では普通の事である。

「そこまで重症やるか。金山」

担任であるみわちゃんは巫女服を着た金山さんに話をふる。

「そうですね。発見場所は学校の裏の階段の下りた場所。症状は失神、気絶なのは確かですね。でも、おかしいですね。今日の便で本土に出た生徒の記録はありません。町の病院に運ばれた人はいませ

んよ」

今、金山さんの眼鏡が光ったよ。絶対。しかし、今朝の事をなぜここまで把握しているんだろうか。

銘はたまらず黙り込む。人は嘘を付くときは饒舌になるが、銘は冷静に頭をフル回転しているんだろう。

「まあ、ええや。その襖に隠れとるのはどなたやる？」

みわちゃんは話をすぐに切り替え、隼が居る襖を見る。それに合せて金山さんや銘が襖の方に目を向ける。

なぜ、ここに隠れたことがわかるんだろうか？一切音も立てていない。

「襖の隙間から姿が見えるで？観念して出てきたらどうや」

みわちゃんは笑いを堪えるように、子供の悪戯を嗜めるように言葉を出す。隼は観念して襖から姿を見せた。

みわちゃんは銘の横に座るように指示をした。隼は少し躊躇をしたがその指示に従った。

「あら、可愛い。せやけど、どなたやるか。島には見ない少女やけど」

みわちゃんは銘に紹介を求めるように顔を向けた。

「犬神家の親戚で、家に不幸があり、同居することになりました。

名前は」

銘は隼の顔を見る。

(て、そこから俺に振るのかよ)

みわちゃんと金山さんの顔を見回す。金山さんは観察するように隼の体を一瞥していた。

みわちゃんの方は顔を伏せ何故か体が震えていた。

「え〜と、俺は〜〜」

名前を考えながら喋っていると、銘の肘が隼の横腹に軽く打ちつけられた。

「なんだよ。いきなり」

銘に抗議するが、もう一度隼の横腹に突き刺さる。

「口調に気をつけてください」

冷たく一言だけ言った。

それを見てみわちゃんは笑っていた。

「えと、私は銘さんの親戚であり、名前は犬神司と申します。しばらく、島に滞在しようと思えますので宜しく願います」

隼は頭を下げた。ちなみに「司」という名前は本当の親戚の名前

である。その名前を使ってもばれないだろうという見解である。次に、みわちゃんと金山さんの自己紹介が始まり質問会（世間話）にまで発展した。

しかし、三人集まれば『かしまし娘』とよく言ったものだ。女性とは本当に話題が尽きない生き物であると実感した。（銘は無口、無表情で普通の女性とは別である）

ある程度の質問を聞かれた頃である。さつきから笑いを堪えている風だったみわちゃんが笑い出した。

「だめや。もう、笑いたい。隼の女性の姿と言葉はおもしろい。しかも、白いワンピースとは」
言いながらテーブルを叩いて「クックク」と笑い出す。

一瞬何を笑っているのかと思った。しかし、みわちゃんが『隼の女性の姿と言葉』と言った言葉が頭で反復する。

「え、え、今、『隼の女性の姿と言葉』と言いませんでした？」

笑いを必死に堪えようとするみわちゃんに代わりに、金山さんが答える。

「そうです。隼君が女性の姿と言葉と言いましたよ。ちなみに司と偽っているあなたの事です。犬神君」

金山さんは凄く驚いている隼の目をしっかりと見ていた。

「失礼です。兄さんは男性ですよ」

銘がすかさず反論する。

「もういいですよ。誤魔化さなくてもわかっていきますから。ちなみに犬神家の親戚に司さんは一人しか該当しません。現在、東京の学校に通っています。司さんの顔写真を見ましたが全然違います。それに二年以内にこの島に来た人の中の記録では司という名前は一人もいません」

銘と隼は絶句して何も言えなかった。その沈黙こそ肯定の意味だと読み取れるのだが……。

問題はそこではなかった。なぜ、ここまで犬神家が調べられているのか。もし、調べられたとしても、隼が女性化の事を調べられるはずはなかった。

数秒、時間をおいてふたたび金山さんは話し始めた。

「犬神君の体は今日の朝方に女性に変換したと……違いますか？素直に白状したほうがいいですよ。」

その場合、こちらでも大切なお話がありますから」

「そつや。きょうび、北欧神話ちう言葉を聞いたやろ？」

隼と銘は目を合わせ、目で語る。

(どうしますか兄さん？)

(どうしますって、どうするかなあ)

(兄さんの事ですから兄さんが決めてください)

(そうだな。女性になった理由が分かるかもしれない)

(そうですね。わかりました)

目で語る事が出来る兄妹は世の中に何人ぐらいいるだろうか？

このスキルを見ると犬神家の兄妹はすごく仲の良さである。

「自分は犬神隼です。お話を聞かせてください」

隼の心情には女性になった理由より、北欧神話、どこかで聞いたことがある単語の方が重要に思えた。

74

下校時間のチャイムが鳴る。

下校中の生徒のざわめきが所々に聞こえてくる。

グラウンドでは陸上部の「1・2」掛け声が聞こえてくる。体育館ではボールを地面に叩きつける音、音楽室にはピアノの音色、化学実験室には薬品の匂い。

約束した場所までトールはゆっくり散策しながら向かう。

(そう、守ったのだ。この風景を……。今度はきちんと)

トールは自己なる絶対なる『正義』で罪悪感を薄くしていた。

その思いをゆっくり胸の中で誓い、竹刀袋をしっかりと握り締めた。約束の場所、学校の屋上のドアを開いた。

ドアを開くと夕日の真っ赤な色で、海、山、空を染めていた。その風景は絵画の名作の中に取り込まれた世界と感ずる程だった。

その真っ赤な色の風景の絵画の中に一人立っていた。その様子は風景を取り込む神々しい美しさの女性だった。

「刀、遅いよ。もう」

少し怒った作り物の顔で話しかけてきた。

「あ、すまぬ。少々、私情事があったな」

「そっなの」

今度は笑みを浮かべ、その場の周辺をゆっくりと回った。

スカートはやさしい風になびく。

その少女が回った姿の絵画は、どの美術工芸品などには、引けを取らない美しい作品だった。

「すごいよねえ。ここから見える風景。すごく綺麗。刀にも、島の美しさ見て欲しかったんだ」

ゆっくり回っていた体をトールの正面で止まる。

「ああ、そうだなあ」

トールは同意する。本当は「おぬしの方が綺麗だと」言いたかったのだが、照れ臭い言葉などは何度転生しても言えないトールであった。

「で、大事な話して何？」

トールは息を飲む。自分の妻を信じたかった。前世の記憶が戻っていることを。

「シブ、前世の記憶があるか？」

その一言を発するのは、どんな強敵と戦うより恐怖だった。もし、前世の記憶がなかったり、自分の事を拒否したりしたらと……。

「あるよ。トール」

シブはトールの目を見て笑顔で言った。しっかりと自分の名前を「刀」ではなく「トール」という言葉を聞いた途端に、トールの緊張は解かれた。いつのまにか手を力強く握っていたらしい。その握っていた手はすぐく汗ばんでいた。

「刀の姿を見た途端分かったんだ。トールの生まれ変わりだって、そうなんだよね？」

「ああ、そうだ」

シブの笑顔を見て、トールも笑顔を見せた。

トールはシブの笑顔がとても好きだった。

もう、2度失くしたくはなかった。

「いきなり転校初日から呼び捨てでごめんね。つつい、懐かしく思ってたね。他人みたいに思えなくて」

シブはゆっくりと風景を見上げた。

「前世で初めて会った時も、こんな風に一緒に景色を見上げていたよね」

「ああ、そうだな」

「そうだよ。あの時も『ああ、そうだな』しか言わなかったよね。相変わらず無口なんだから」

確かに前世でもそれしか言わなかった。

その時も、見惚れていたのだ。

美しい金色の髪、美しく色々かわる表情、美しい音色の声。

初めて会ったときから始まったのだ。

その幸せを守るために一歩を踏み出そうと思った。

そして、トールはシブの右手を掴む。

「何？」

「おぬしの事が好きだ。結納を結んでくれ」

トール顔を赤く染め、前世の時と同じ言葉で大きな声で言った。

また、幸せを掴む為に。

放課後（後書き）

長くなってしまった。

説明

犬神家の食卓を囲むように4人が座っていた。

「これを見て欲しいのや」

はりせんを横に置いているみわちゃんが庭のほうに手を伸ばす。

その伸ばした手から映画や漫画から出てくる様な魔方陣が空中に浮かび上がった。

「魔方陣は総称、ガルドル魔法といえます。ルーン文字という魔法文字を刻む事により効果が発揮されます。名称はルーン魔法です。ガルドル魔法使いの使い手はガルドラ・スミディールとも言われ、北欧神話で出てくる魔法です」

金山さんの解説講座が始まった。解説講座のときが一番生き生きしているように見える。

「では宜しくお願いします」

「はいよ」

掛け声と共に魔方陣から多数の光の球が飛び出した。

「たんなる明かりや。ちなみにルーンの文字を刻んでいるのは、この腕輪や」

袖をまくり腕輪を見せた。腕輪の表面には沢山の模様と古代文字

みたいなのが書かれていた。

「このルーンの文字と知識でルーン魔法は使える」

「この通り現代では不可能な現象をおこせます。率直にいいますと、先生は北欧神話の前世の記憶を持った方です。ちなみに貴方もです。犬神君」

「そっや」

吃驚、イカサマショーを見ているみたいだった。

しかし、イカサマにも限度があり空中に魔方陣みたいな物を出せるはずがない。

現実を考え、このように光球や、隼の身に起こった不可解な現象から隼と銘は魔法の存在を信じるしかなかった。

「北欧神話って、お伽話ではないんですか？」

常に無表情で冷静な銘は素朴の疑問をなぎかける。

魔法を見て我を忘れたいた隼も銘の冷静な声で落ち着きを取り戻す。

「確かに北欧神話で文献による『エッダ』で語られているものは偽者です。しかし、それは、吟遊詩人が口伝で語られ、民衆が楽しむために話を脚色していた物語なのです。しかし、本当は存在していたのですよ」

「そつや。実際に魔法が使えるのが証拠や。その他に遺跡、神時代の宝具が見付かつとる。政府機関も認めとる事や」

「その話が、俺が女性化した事に関係があると」

隼は慎重に聞き返す。

金山さんとみわちゃんは、その問いにゆっくりと頷いた。

「昨日の夕方、近衛刀さんに襲われたやろ」

その言葉で、昨日事件を夢だと思い込んでいた隼は、現実にあつた事件だと目を向ける。

『襲われた』という言葉在必死に頭に叩き込む。

目を瞑っただけでも、鮮明に思い出せる。電気を操る少女を……

「あれは、夢の筈ではないのか……。夢では……」

「夢ではない」

はつきりと、みわちゃんに肯定されてしまった。そう、あれは現実だったのだ。

「ならなんで、襲われたんですか？ あんな化け物少女に……」

思い出しても背筋が寒くなる。人を物として見る目と表情。

隼は机に手を乗せ、姿勢を勢い良く前のめりになりみわちゃんに迫る。

「まあ、落ち着け。その理由も一緒に金山が説明しよる」

みわちゃんは手のひらを前に向け、落ち着けのポーズをする。隼もそれに気が付き元の位置に戻る。

「初めに北欧神話の事を話します。詳しく知っていますか？」

「いや知らない」

「私も少しの知識しかありません」

犬神家兄妹は即答で答えた。では、と金山さんが眼鏡をくい上げると上

「北欧神話とは、簡単に言いますとアース神族と巨人族の戦争の話です。アース神族が住んでいる場所を侵略しようとしているのが巨人族です。まあ、巨人族の戦争の前はヴァーン神族と争っていたんですがそこは省きます。それが、北欧神話です。全部話すと長くなりますので、昨日の事件の事で気になる単語が出てきた事をお答えしますよ」

そこで金山さんは一旦区切る。隼は必死に単語を頭から断片的に抜き出す。

「トールを詳しく教えてくれ」

「ああ、それですか」と金山さんは軽口で言う。

「トールとは、アース神族の中で一番最強の軍神です。そして、雷を司っています。一番の特徴はミヨルニルという武器です。別名トールハンマーといい。色んな物を砕くことが出来ます。その他には人や物を浄化する作用があります。その由来から結婚式などで、鎚が使われるようになったんです。トールの人物関係では、邪神ロキとは親友の中であり、いくつもの苦難と一緒に乗り越えて来た仲間です。家族構成は妻のシヴ、その子供のモージ、マグニです。そのトールの前世の記憶を持つのが近衛刀さんですね」

「その、近衛刀が、なぜロキを恨んでいる。神々の黄昏とは何だ」

あの少女の形相は簡単な恨みではないと思う。親の敵を見るような、それ以上の形相だった。今でも思い出しても寒気がする。

「神々の黄昏とはアース神族の宿敵である巨人族との戦いです。もし、恨んでいるとしたら巨人族の総大将がロキだったからでしょう。ロキが間接的に神々の黄昏を引き起こしたと言っても過言ではない。しかも、トールはロキの息子ヨルムンガントと相打ちで終わります。ヨルムンガントをミヨルニルで頭骸骨を割ったんですが、最後にヨルムンガントの毒ガスを浴びて相打ちに終わりました。まあ、私の読みではその事が恨まれている要素だと思っています。ちなみに神々の黄昏の最後は巨人族とアース神族の全滅で終わります。結果は引き分けと言うことです」

「しかし、トールの親友ならロキは神族ではないのか？」

素朴の疑問を問いかける。それを淡々とすぐに答えられる金山さんである。

「ロキは純粹な巨人族なのですが、ロキの力が最高神オーディンに認められ神族の血を分けられオーディンの義兄弟としてアース神族の一員になります。最後に巨人族の総大将になった理由は逆恨みですね。オーディンの息子を殺した罪で牢屋に入れられていたのを恨んでいたらしいですよ。以下質問はありますか？」

質問はなかった。北欧神話の大体のあらすじは分かった。

近衛刀がトールの前世の記憶を持つ人間だとも分かった。

しかし、それだけの理由で近衛に襲われたのであろうか。

「まだ分からへん。隼はうちと同じ北欧神話の前世を持った人物なのや。前世ではロキの転生した姿。その証拠に隼は女性化しとるやないか」

「女性化という事は、さきの言ったガルドル魔法が関係あるんですか？」

銘が質問する。

「違う。ガルドル魔法は精霊魔法や。姿や形は変えることができへん。女性化をするちう事は前世の個別スキル、特にロキは姿、形を変えることが出来るトリックスターな感じや。せやけど隼は、人間のベースでは自由に変える事が出来ないはずや。やはり前世と現在ではスキルが少し違うようやな。たぶん、スキルは、女性や男性に自由に変換できる事や」

「では、男に戻るんですか？」

重要な項目だった。もしや、男に戻れないのでは？と思っていたが、少し希望が湧いてくる。

「まあ、一応、協会で専門に調べる事で分かる筈」

「協会？」と隼が。

「協会というのは、名称、アリス協会です。怪しい名前ですが、世界各国が認めている機関です。主に超能力者、魔法使い、特殊スキルを持った人を保護したり監視したりします。殆どの人が前世に何か特殊の種族、地位だった人が所属しています」

「うちも所属しとる。金山は所属しておらんらしいやけど」

「まあ、私には必要がない機関ですからね」

「結局、兄さんはこの先どうなるんですか」

銘は心配そうな声で結論を求める。しかし、相変わらず無表情である。

「戸籍、保険書の問題もあるん。そやから、アリスはそうゆう問題も取組んでる。まず、所属、登録をする。それで、問題は万事解決や」

「まあ、ひとまず安心してください。私の情報では怪しいオカルト集団ではなく、世界に認められている機関なので、きちんと統制のとれた保護団体と考えた方がいいかもしれません。まあ、所属すれば同じ体験をした人と交流をもてますしね」

下手な情報より、金山さんが保障をしてくれば、どんなメディア、ラジオ、TV、新聞より安心が持てる。説得力がある。

どんなメディアより、より詳しい情報を教えてくれる。何回か二コースの情報を誤報と当ててくれた。

その結果、ヒゲに認められ右腕になりクラス最強コンビが結成されたが、他の人達にははた迷惑だった。

「とりあえず。そのアリス協会はどこで加入するんですか？」

「うちから連絡するよ。ちょうど、うちの保護観察期間が終わっても、まだ島にいたから、明日の夕方ぐらいには、これるやる」

「保護観察期間中って・・・。島の人ですか？」

こんな小さな島である。島中の人が見知りである。隼、銘にも知っている人物かもしれない。そのため期待して、聞いてみた。

「そうや。でも、明日までのお楽しみや。詳しい事はアリス協会の人に聞いてや」

みわちゃんは含みを浮かべた笑みではぐらかしてしまう。その、笑みを見て隼が知っている人物だと確信した。

「分かりました。明日を楽しみにしています。」

「まあ、いい奴や。安心しとき」

「それより。金山さん、みわちゃん」

「ちゃんと先生をつけや」

「なんでしょう?」

隼は疑問に思った事を聞いてみた。

「2人の前世と個別能力は何?」

2人とも顔を合せてくすりと笑った。そして、足元にルーン文字が描かがれた魔方陣が浮かび上がる。

「後ろを向いといてや」

言われ。犬神家の兄妹は自分の顔を後ろに向けた。

向いたらみわちゃんが立っていた。

「え、みわちゃん」

「やから、先生をつけや」

後ろの立っているはずのみわちゃんからではなく、前のほうから聞こえた。

「え、え?」

「ドッペルゲンガーですね」冷静な顔で銘が言う。

「まあ、少し違うが正解や。この通り個別スキルはルーン文字が魔

方陣に刻まれる。後は召喚など言語で発動する場合もある」

「ドッペルゲンガー、もう一人の自分を見ると死ぬというあの都市伝説だ。」

「ちなみに前世はロキの妻のシギンや」

「そうなんですか」

銘が珍しく機嫌悪そうなドスを利かした声で反応する。

みわちゃんが前世で俺の妻？

そう考えると奇妙な感じがする。なんて言えばいいんだろうか、相手からは恋愛対象範囲外の年上の美人の女性が、本当は恋愛対象以内だったという舞い上がりそうな気持ち。

「兄さん!!」

迫力をもった声で呼びかけてくる。無表情で言われると迫力が増す。

「はい」

「先生ですよ」

銘が警告をしてくる。

「そうだよ。分かっているよ。結婚もしていますし、クラスの担任ですよ。と思いながら先生の顔を見上げた。」

先生はくすくすと笑っていた。

「ちなみに私は秘密です」

「秘密ですか・・・」

「秘密ですよ。しかし、能力は教えます。私の力はどんな媒体のメディアがあれば情報を掴む事が出来るスキルです」

「どんなメディアでも？」隼が

「そうなんや。やるから隼が襲われた事も分かったらしい」

「その顔は、信じていませんねえ」

金山さんが隼の顔を覗きこむ。

そして、笑みを少し変えた。

その笑みは昨日の夢の近衛に睨まれ緊迫した状況ではなく、蛇に睨まれた蛙みたいな状態である。あの変人と近衛とは違う意味で、逆らってはいけないと本能が告げていた。

「では、隼君や銘さんのために一つとっておきな情報をおう知えいたしましょう。翁さん家の本屋で、無く々く」

急いで金山さんの口を手でふさいだ。これは、銘の前で言われてはいけない。金山さんは口を塞いでいるせいか、もごもごしている。

気づかれてはいないと思いつつ、銘の顔を見る。

他人が見たら銘の顔はあいかわらず無表情である。しかし、身内には分かるが物凄く不愉快な顔を見せる。

「兄さんが年頃なのは分かります。しかし、神社の息子として、明日までに処分をお願いします」

「何を言っているんだ？ 何を言っているのか分からないな？」

すかさず反論する。具体的な事を言われてはいない。誤魔化せるはず。しかし、すこしのキーワードで把握するとは恐ろしい奴だ。

「では、今日から部屋の掃除を細かくしてもいいのですね」

「いや……。その……。ほら、プライバシーという問題があるしなあ。お前もヤダだろ。兄に細かく掃除されるのは」

「私は別にいいですよ。モラルを守ってもらえれば、やましい物なんてありませんから。それより明日までに処分をしてください」

「いやだから〜〜」

「明日だけ待ちます」

「持って〜〜」

「明日までです」

持っていることを確定されてしまった。いや、確かに持ってはい

るんだが。しかし、これほど兄を信用していないと思うと少し悲しくなってくる。銘のこの状態には何を言っても通用しそもない。金山さんは後ろで「くすくす」と笑っている。

「これで分かりましたか？」

「はい……。分かりました」

心の中で絶対に逆らわないでおこうと心の中で誓いを立てるのだった。

余談だが、隼が近衛刀（トール）に襲われた情報が金山さんに入った理由は、いつも、遠くから覗いている人物からだった。

空が暗くなり校舎は先の放課後とは違い静まり返っていた。

その静かさと暗さは闇に飲み込まれそうな静観だった。

トールは屋上の上で独り立っていた。

その表情は勇敢でも憤怒でも凄愴でもなかった。

ただ無表情だった。

今でも一つの思いがトールを締めていた。

トールの上から黒い、白い物が落ちてきた。

そう、黒い羽と白い羽が。

僕はヘイムダル。どんな距離をも見通す目、どんな音も聞ける耳、眠りも必要としない特技を持っている。

彼女はトールに言った。間違いは僕たちにあるのか、それとも彼女の言い分が正しいのかが分からない。

何にも縛られない彼女が眩しく思えた。

しかし、全てを監視しなければいけない。それが僕の使命なのだから。

そして、全てを見届けなければいけない。

前世でも現世でも僕は傍観者である。

アリス協会

今、隼は教卓の前に立っていた。

クラスの中がざわめいている。隼の姿を見て、「かわいい」「最近の転校生は当たりだ」呟いている。隼でもこの女体の姿は、シブや近衛刀とは違う「美しさだ」と思う。

しかし、隼は自分自身の姿を見ている、自分の前の姿を思い出してしまうから「美しい」とは完全には思えなかった。

「これから、転校生の紹介を始めるでえ」

隼の肩をみわちゃんが軽く叩く。

「え」と、私の名前は犬神司と言います。よろしくお願いします」

なんで、前にいたクラスで、違う名前、違う性別で自己紹介しないといけないんだろう。と隼は思っていた。

「ほなら、質問タイムといきますか」

みわちゃんの声がいつもの様に元気よく教室の中を響く。その声を聞きながら、教室の中を隼は見回す。そして、女性の立場では最低最悪な奴が目に入る。

どうやら病院から退院したらしい。しかも、元気よく挙手していた。

「はい、新藤」

その場で立ち、机の上に両手を「バン」と強く叩きつける。

「質問だ。君は巫女服に興味があるか？」

意味が分からない質問をしている。その近くに座っている金山さんが「ぴくっ」と動いたのが分かった。

「はい？」

「巫女服だよ。巫女服」

「いえ、興味ないです」

「いや、よく考えて見たまえ、君には巫女服が似合うと思うんだが。しかも、犬神隼の縁の者だと聞いた。神社には巫女服だろ。皆、そう思うだろ」

「イツエサー！シンドウ！」

クラス中に、男供が一ミリの狂いもなしに一斉に立ち上がりヒゲに向かって敬礼をする。そして、太い低音の音が教室中に響き渡る。その声により、女子の批判の声が消し去られた。

「この巫女服は、巫女服の巫女服による巫女服のための人選だ」

「イエッサ！！シンドウ」

力強く、拳を上げ演説する。そして、それに続く男共。

「民主主義の冒涇だぞ!!!」と隼は口に出しそうになるのを我慢する。

そして、怪しい集団はヒートアップする。

「Goooooooo, Fight! Go fight! Go fight! Go fight!」と大きな声で「ヒゲ」が。

「Goooooooo, Fight! Go fight! Go fight! Go fight!」その後民衆が続く。

ヒゲはクラスの男子を軍隊にさせるのか!!!

その掛け声も何回も繰り返された。しかし、巫女服姿の金山さんが静かにすーと立ち上がった。その、瞬間に教室は静かになった。その様子は、嵐の前の静けさだった。

「それは、私に喧嘩を売っていると、判断してもよろしいでしょうか」

クラスの中ですごく重い沈黙が流れた。金山さんはクラス、嫌、学校の中でも最強クラスの地位にいるのは間違いない。

(金山さんは巫女服を気に入っていたのか? そうだよな。今、思えばヒゲが病院送りにされてからも普通に着ていたからな)

隼は心の中で金山さんに突っ込みを入れた。

「いや、やはり眼鏡巫女服もいいが、あの、少し天然がかかっている髪にも巫女服は似合うとは思はないか？」

馬鹿が言う。

「いえ、私はメイド服の方が似合うと思います。シブさんと今日一緒に登校したのを見ましたし、メイドの種類も、ハウス、レディー、ウエディング、チェインバー、キッチン、パーラー、ステイルルム、デイリー、ランドリー、スカラリー、ナースメイドなどの種類があります。シブさんとダブルメイドはどうでしょうか？巫女服に決定する場合。私は、敵だと見なします」

金山さんは冷笑を浮かべ隼を睨む。

(自分を睨まれると困るんだが・・・)

「いや、日本人がメイド服や、ゴスロリを着ても似合わない。怖気のはしるわあ。メイド服は、北欧美人！金髪だ！」

真性な馬鹿が言う。いや、馬鹿以上だった。今の言葉で一部の人を敵に回したであろう。

ちなみに、登校の間ではシブは制服だったのだが、今はメイド服である。無理矢理に着替えさせたのだろう。

「まあ、巫女服、メイド服が駄目なら・・・。和服だ。いや、武道着もすてがたい」

隼本人を措いとして、何を着せるかの会議が始まった。

「あの、みわ先生」

初対面という形なので礼儀正しく隼は先生を付ける。

「よろしい。なんや」

「席、どこですか？」

周りの騒ぎを頭の中で隼は消し去り、とりあえず座って落ち着きたい。

それを感じ取ったのか、みわちゃんは苦笑しながら言った。

「えっと、司は転校生やので、委員会には属せんちう事をお願いや。ええやるか新藤」

「はい」とヒゲは元気良く返事を返す。しかし、あの眼は絶対に納得してはいなかった。

あの憎たらしい笑み。その、笑みは幼少の頃から隼は覚えている。その笑みをかけられた女子生徒が、転校して行った事も最近の記憶の片隅にあった。

今度は自分が体験するのかと想い、隼は初日の朝のホームルームで、もはや不登校になりそうになった。

その勢いあるヒゲの返事を聞いて、みわちゃんは納得してしまっ

た。
「シブを知っとるね」

「はい」

白々しい、会話をみわちゃんと続ける

「では、うちから見たシブの席の右側に座り」

みわちゃんはジェスチャーで指示を出す。どうやら、元、自分の席（隼の席）ではない場所に座るようだ。

まあ、シブは元々みわちゃんの監視のためにいるらしいから、アリス協会の意向かもしれない。

みわちゃんに「分かりました」と言い、指示された席に向かう。

シブの方に目を向けると、シブは「にっこり」と爽やかな笑みを返した。老若男女に好かれる笑みだった。下手な男子が見たら勘違いが生まれるほどだ。

そして、気になるシブの左側の席は空席だった。

指示された席に座ると、爽やかな声色でシブが話しかけてきた。

「学校でもよろしくね。刀が来たら説得するから大丈夫だよ」

「うん、分かっているよろしく」

「いつゆづ風に仲良く話すのも、5日前、犬神神社に訪れてからである。」

みわちゃんや、金山さんの言うとおりの日に、アリス協会の人
が犬神神社に訪れた。

その人物の正体を見て隼も銘もすごく驚いた。

犬神家の畳の部屋で、西洋人形こと、我がクラスメイトの愛玩動
物シブがお茶を啜っていた。

「日本人はやはりお茶ですね。すごく美味しいです」

日本人みたいな事をいいだした。いや、もしかしたら戸籍上は日
本人かもしれない。そこら辺はよく分からないが。

ちなみに服はメイド服ではなく黒い神父服だった。コスプレじゃ
ないか？と隼は内心思っていたが。

「この服はですね。アリス協会の制服なんですよ」

すごく愛嬌のある笑みを浮かべながら言った。ちなみに、自分の
横には巫女服を着た銘が座っていた。どうやら、朝のお勤めがあっ
たらしい。今、思えばこの空間は、洋和の宗教が入り混じっていた。

「兄さんの同級生のかたですよね？」

銘が上級生にも関わらず怖気せずに淡々と話す。

「はい、そうですよ。シブと申します」

「何しに来たんです？」

「え〜と、アリス協会の使いの者と言ったのですが……。説明、先生から聞きましたよね？」

「それは聞きました。なら、用件を早く済ましてください」

無表情な娘と感情豊かな娘が交互に話し合う。銘の突き放す言い方に、シブは戸惑い色の表情を見せていた。

「銘、失礼だぞ」

兄としてここは注意をしとく。

「姉さんはもう少し警戒してください」

逆に注意される。

「いえ、いいんですよ。隼君。いい妹さんですね」

「……………」

妹を褒められるのは少し照れくさい。内心は複雑な気持ちだ。銘の方に顔を見ると、銘はシブを注意よく見ていた。それは自分の兄を守るという気持ちの表れが、隼の心を暖かくする。

「では、犬神隼君」

シブは気劣りなおし、業務用の真面目な顔に切り替える。その真剣な空気が伝達し、隼にも真剣さが顔に出る。シブはポケットから

本を取り出し、本を開き、その本の内容に目を向けながら口を開く。

「私共、アリス協会はあなたを保護するつもりです。精神的自由権、経済的自由権、人身の自由を保障します。そして、思想・良心の自由や信教の自由も縛るつもりはありません。しかし、前世の記憶がある人の凶悪犯罪行為を規制します。では、書類が見終わり次第この契約書に名前と印鑑を書いてください」

シブは鞆から契約書を出し机の上に置く。その、契約書を隼が手を伸ばそうとすると横から手が伸び契約書を取る。そのまま、自分の前に持っていき真剣な顔で読み上げる。

「銘、自分で読むから。その紙を返してくれ」

契約書を奪った本人に注意する。

「もう少し待ってください」

銘が真剣な声で言う。最近、兄妹の立場が逆転しているのは勘違いだろうか？

「あ、それと隼君の女性化による戸籍や住所の事もこちらに任せてください。戸籍も融通が聞きますから、能力が制御できるまで女性として登録ができますし、名前も変えられます。能力が制御でき次第、元の戸籍に戻します。その間の学校の成績や出席日数も統一できます。あと、家にご都合が悪い場合でも、住む場所の確保、生活保護なども受けられますよ」

結構、魅力的な提案がある。戸籍が変えられるのは、これからの人生で必要なことだ。今の状況では、自分の戸籍は無いこと同じこ

とだから。

「もし、この契約書にサインしない場合はどうなるんですか？」

銘が隼の目を見て語ってくる。うまい話には注意しろと。「え」と、このページかなと」本のページを探す。そして、シブは目的のページを探り当てる。

「サインしない場合は、アリス協会で会議を掛け、犬神隼君の場合は無国籍という名の犯罪者として監禁されるでしょうね」

さらりと、その顔には似合わず恐ろしい事を言ってくる。隼は喉をならす。

「それほど、能力者には凶悪犯罪が沢山あるという事です。それに、犬神隼君には世界を滅ぼすほどの恐れがある。その人物がどの組織にも属さない事は恐ろしいことです」

どこでも人間は流れがあり、その流れに逆を行ったり外れたりすると犯罪者、異常者、落ちこぼれという烙印を押したがる。隼は女性化という人間の理が外れた異常者としての烙印が押されている。しかし、一つだけ反論したいことがあった。

「俺には世界を滅ぼすほどの能力や力などないよ」

隼には信じられなかった。体の変化も女性化だけ、能力もみわちやんや金山さん見たく自覚しては使えない能力。ましてや、世界を滅ぼすほどなんて信じられないほどだ。

「確かに、今の状況ならその可能性はないかもしれませんが。しかし、

新しい能力に目覚める場合、そして、巨大の力の歯車に利用される可能性がります。」

隼は巨大な力を身に持って知っていた。近衛に襲撃されたという形でだ。

銘は反論する事は無駄だと悟り違う質問を続ける

「では、サインした場合の規約は？」

「そうですね。アリス協会に所属してもらいます。しかし、それは職員ではなく保護という形です。まあ、私みたく就職したい場合は大歓迎ですよ。そして、1〜3年間、観察期間があります。査察官が能力者を監視し人格を見ます。その期間で能力の制御も教えてもえますよ」

「もし、査察官に異常者と思われたら？」

さらに、銘が突っ込んでくる。

「その場合、アリス協会で審査をさらに加え、それでも、その烙印を押された場合では、協会の元で施設に入ってもらいます」

その後、「犯罪を起こさなければ大丈夫ですよ」と付け加える。それが、普通のことかも知れない。もし、日本の近辺のどこかの国が核を保持していた。と情報が入ってきたら普通は必死に調べる。見つかった場合は、監視をするか、破棄を促し、それでもダメな場合は経済制裁をするだろう。

「能力者にも規則が必要です。規則があるから人間と言えると思う

んですよ。理性という名がただ規則と変わったただけだと思います」

シブは本から目を離して自分の考えを述べる。それに反論すべき銘が言う。

「確かにその通りだと思います。しかし、その組織という内側にいる人が言う言葉です。その理を相手に押し付け聖戦という名の争いがあるんです。自分の方が『正義』だという馬鹿な名目で……。アリス協会も一部で同じことが言えると思いますよ。まあ、ここで口論しても意味がありませんが」

銘が一息をつきお茶を飲む。納得はしていないという顔をして口を開く。

「ここでの選択肢は、その契約書にサインをしなければいけないらしいです。安全性などは、金山先輩を信じましょう」

銘は契約書を隼に渡す。隼が契約書を見ようとすると、英文のためまったく分からなかった。ちなみに、隼の成績は下の中である。英語の質問にも「I don't know」と答えればなんとかなると思っているほどである。それに加え、妹は普通に英会話やスピーチが出来るほどある。ここでも、兄と妹の差が出ていた。

「そつだな」

隼は頷く。銘がそう言うならば「大丈夫だ」という気持ちがある。隼は頷きながら契約書にサインをする。その後は、戸籍、住所をどうするのか？ という話し合いになった。住む場所は、ほぼ兄妹だけで暮らしているのでそのままがいいという結論が出た。隼は近衛刀の事があり、この島を出て憧れの一人暮らしを満喫してみたかつ

だが、銘にすぐく反対された。（理論理屈で攻めてくるため頷くしかなかった）

戸籍は男性に戻れないため女性に移すことに、そのため名前を変える必要があった。名前は、みわちゃんや金山さんに最初に名乗った「犬神司」を採用することになった。

「では、一通り決まりましたね」

シブが嬉しそうに本を閉める。

「そうですね」

無表情だが、不機嫌そうに銘は頷く。

「少し、疲れた」

隼は体をだらけさせる。それに、ついて銘が「はしたない」と注意してきたが、疲れていたので無視を決め込んだ。

「では、私もこれから査察官という立場で犬神家にお世話になりますので、よろしくお願いいたします」

シブは礼儀正しく頭を下げた。それは、日本人らしい丁寧なお辞儀だった。

「一緒に住むつもりですか？」

いち早く、不機嫌そうに銘が反応する。隼はワンテンポ遅れて反応した。

「はい、これでも査察官ですから……。それに私が、この事件を解決しないといけないんですよ」

「事件？」

隼はその言葉に反応した。その事は、近衛刀の事を言っているのだろうか？

「近衛刀の説得と、犬神隼君の保護と護衛です」

シブの顔に陰りを見せる。ぼそっと、「本協も事件を昨日の夜ではなく、もっと、早く言ってくれればいいのに」と小言を漏らした。

「まあ、とりあえず。失礼ですが、空き部屋などを用意してくれたら嬉しいんですが」

ここから、犬神兄妹とシブの同居が始まった。この後、銘に「近衛刀事件」の事情を話せと夜まで離してくれなかった。（落ち着くまで待つてくれたらしい）

そして、今日まで犬神隼という男性の戸籍が終わり、新たに犬神司という女性が誕生した。

授業

転校生として通過儀礼の質問討議は何事もなく終わり（色々、シブが手助けしてくれた）そして、隼の楽しみにしていた時間帯が近づいてきた。

（俺はヘタレじゃない。男としてやるんだ。いや、女だからいいんだ）

心の中で勝手に納得する。隼は顔をすごく真面目な顔をした。隣にいるシブに自分の表情から悟られないためである。鞆の横に掛かってあった袋を手に持ち立ち上がる。

「あ、司。一緒に行こう」

隼の肩を叩く。クラスの女子生徒で、いつも、中心人物にいる橘由香里だ。質問討議のときも場をしきり盛り上げるほどだ。

「ほら、シブも行こうよ」

シブの手を握り、机から立ち上がらせる。

「ええ」

シブは困惑の顔をしながら、鞆掛けに掛けていた袋を持ち出す。シブは考えていた。男性が・・・今は女性なのだが、女子更衣室を使ってもよいのだろうか？でも、女性の体になったため見られているから大丈夫かなと結論が出た。

「じゃ、更衣室に案内するね」

隼達は更衣室に向かうために教室を出た。しかし、隼の野望をこれで成しえた。と思っていたが、致命的なことを忘れていた。

「姉さん。待ってください」

隼が教室を出た瞬間に声を掛けられた。

「銘？」

声を掛けられた方を見ると銘が立っていた。休み時間中に高校生の階の廊下にいるのは珍しい。来るときは昼休み中か、放課後である。

「姉さん。何処に向かうつもりですか？」

「え、次、体育だから着替えに行くつもりなんだけど？」

銘の質問に「女子更衣室」とは答えなかった。いや、答えたくないかった。もはや、女体に変化する事件を向えてから、銘には溺愛をするまでに至った。今、銘に彼氏が出来たら闇討ちをして絶対に別れさせる程である。そんな、銘の前で浅ましい気持ちを引き出すわけがなかった。

「そうですか。では、こちらに来てください」

隼の手を引きながら、銘は歩き出す。橘さんとシブは「え、あの」と銘の行動にあたふめいていた。

「では、先輩方のちほど」

上級生に向かって一言。そして、再び無言で歩き出した。連れて行かれるほど数分、旧校舎の空き教室にたどり着いた。

「ここが、姉さん専用の更衣室です」

銘が教室のドアを開く。

「ちなみに、今後、新校舎の女子トイレ、女子更衣室を使うのは禁止です。女子トイレなどは旧校舎のトイレを使ってください。分かりましたか？」

無表情の顔をさらに眼までも無にする。その眼光には逆らうことは過去の出来事から無理だと判断した。

「ああ……。分かったよ」

隼の野望がこの瞬間に潰えた事が、頭の中で分かった。

「では、早く体操服に着替えましょうか」

突然、銘は自分の制服に手を掛ける。

「て、何で体操服に着替える必要がある」

「姉さん、合同体育ですよ」

ここで、隼は致命的な事を忘れていた。ここは、田舎である。少子化が進む学校で、生徒の数が少ない。勉強とは違い、運動は上の学年は下の学年を見ることで効率化が図る事が出来る。そのために、

高校生、中学生、小学生の一学年が集まり、体育は合同で行う事が学校の特徴である。ちなみに、男女は別々で体育は授業を受ける。

「はぁ」と銘にため息をつかれた。

「それでは、着替えましょうか」

「て、ここで着替えるのかよ」

普通に着替えようとしている銘に向かって突っ込んだ。

「別に良いじゃないですか、姉妹ですから」

「いいのかよ。俺は男だぞ」

「まあ、家族ですし、今は女性ではありませんか。何か可笑しいんですか？」

男性だから、隔離された更衣室で着替えることになったんじゃないのか？と疑問を頭に浮かべた。

「じゃ、普通に更衣室に着替えていいじゃないか？」

「何を言っているんですか。姉さん」

ふたたび、眼を無にして隼を見つめてくる銘。何気にすごく恐怖を感じてしまう。

「さあ、早く着替えましょう。授業に遅れますよ」

着替えを再開する銘だった。隼は銘の着替えを見ないように、自分の着替えをするため体操服に着替え始めた。ちなみに、うちの学校はブルマを採用している。しかも、普通のブルマではなくちようちんブルマー、旧型ブルマである。こんな、マニアックな採用をしたのは、ヒゲ・・・以下同文・・・である。

「姉さん、髪を纏めといた方がいいですよ」

着替え終わった後に、銘が隼の髪をポニーテールにした。これだけを見れば仲のいい姉妹に見える。とても、慎ましい光景だった。

体育の集合場所で、隼が違う更衣室を使う事は体育の先生が説明してくれた。(体に大きな傷があるという設定らしい) 同情の眼が痛い。女子の体育は前回に引き続き体力テストだった。隼は、握力、走り幅跳び、50m走、腹筋、腕立などを測った。男の時より思っていたより劣っていた事に驚いた。

(ここまで、劣るとわな。二の腕も筋肉がないしなあ。これは、脂肪だよ)

二の腕を指で隼は摘む。女性とは思ったより可弱い存在かもしれない。

「うりゃ、記録はどれくらいだった」

後ろから胸を揉まれる。その瞬間「きゃ」と女性特有の声を出してしまう。隼はその声を出してしまった事にすごく恥じてしまい顔を赤くしてしまう。

「ああ、私よりあるね」

さらに揉まれてしまう。酔っ払いの親父が言いそうな言葉だ。

「~~~~~」。

(~~~~~これは、女性特有の体を使ったススススキップ。)

声を出せない状態で考えを絞り出す。

数分後、揉まれていた胸が解放される。隼は息を荒くさせている。

「ごめん。感じちゃた。私、テクニシャンだよねえ」

橘由香里が嬉々と言う。それを、シブはおろおろしながら見ていた。

「も、揉まないでよ」

息を荒くさせながらも、抗議する。ちなみに外から見て顔は真っ赤だと隼自身も分かっていた。

「なんか、可愛いなあ。真っ赤に染めちゃって」

「そうじゃなくて、胸を揉まないでください」

からかわれていると分かり、隼は強く反論する。

「ごめんごめん、どうしても揉みたくなくてさ。私の胸も揉んでい

いよ」

そう言いながら、橘由香里は胸を張る。

「て・・・え、・・・あ・・・の・・・違う・・・。え・いえ・あのその」

さらに真っ赤にさせながら、言語が変になり明らかに動揺する。それを見て、橘由香里は腹を手に抱え笑い出す。

「くうくうくう。司、めちゃくちや可愛い。すごく、可愛い。何、その男子みたいな反応は」

この瞬間、クラスの女子の中で司の地位が確立した。シブと同じ地位（愛玩動物）だと見ていた周りの皆が認めた瞬間だった。

「姉さん」

「はい」

銘の声が聞こえた。それに、反応して隼は姿勢を正し、強く返事をする。

「触ったら怒りますよ」

小声で隼の耳に吹き握力を測る場所に走り出す。その走り去る姿を最後まで見届けると、シブがメモ帳を取り出し何かを書いているのが眼に入った。

「何しているんだ」

声を掛けると、シブは本から顔を上げニツコリ笑った。

「胸を触らなくて良かったですね。痴漢行為は犯罪ですよ。もし触っていたら、アリス協会に報告する所でしたよ」

シブはメモ帳を閉じ、シャツの中に仕舞い込み。そして、隼から離れる。更衣室で着替えるのは良くて、身体を触るのはダメなのか・
・。

隼はその場で「あははは」と笑い出すしかなかった。

その様子を木陰で見ている怪しい集団がいた。

「司令官殿、見ましたか」

「素晴らしい。参謀長を戦況はどうだ」

「は、工作参謀こちらに」

「こちらに、戦利品であります」

工作参謀が戦利品を地面に皆に見せるように置く。その戦利品を男共が囲う。

「参謀長、やはり、ちようちんブルマーを採用したのは正解だったな。しかも、ポニーテールでこの表情。彼女は天才だ」

「そうですね。では、情報参謀、情報を提供しなさい」

ピシと敬礼する情報参謀。この集団では珍しい女性である。

「まず、名前は犬神隼。住所は犬神神社、同居は、犬神銘、そして、同クラスであるシブであります」

「お、あのシブと同居」「萌える。萌えるぞ」「まさか、百合の世界」「いや、俺は無表情の銘ちゃんがいいんだよ」と男共が騒ぎ出す。

それを見て、司令官が手を上げる。その瞬間、周りが静かになる。

「続きを、情報参謀」

情報兵に続きを促す。情報参謀はさらに情報提供を続ける。

身長、体重、スリーサイズなど、どこでどうやって調べたのかわからない情報を流す。それを疑いもせずには回りには鵜呑みにする。それは、情報参謀が怪しい集団で信頼されている証拠である。

「さて、それでは、本題に入ろう。衣装をどうするか？皆の意見を聞きたい」

周りに意見を聞く。

「やはり、メイド服ではないか？」と輸送参謀

「いやいや、ナース服でもいいと思うぞ」と通信参謀

「でも、委員は定員を満たしているぞ」と後方参謀

「では、新しく委員会を創るのか？」と広報参謀

「司令官殿どうしますか？」と参謀長

「よし、新しく創ろうではないか」

「おー」「さすが、司令官殿」「一生ついて行きます。」「と軍兵は騒ぎ立てる。

「それでは、新しい衣装を考えないといけませんね」と情報参謀

「それは、考え付いた」と司令官

「それは？」と参謀長

司令官は小声である言葉を発する。その言葉を聴いて、

「天才だ。この人は生まれた場所が、秋葉原なら天下を取る程の人材だ」

司令官を崇め始めた。司令官には絶大のカリスマ性のある人物である。

「では、作戦をこころみましょうと近衛刀の件もありますから」

参謀長は作戦を立て始めた。そこに、通信参謀の連絡があった。

「司令官殿」

「どうした」

「通信兵からの連絡です。体育の村上がこちらに向かっているようです」

「分かった。では、この作戦を情報参謀に一任する。では、工作参謀は村上を足止め、後方参謀はその支援を、では成功を祈る解散」

その掛け声ひとつで解散する。司令官、情報参謀が誰なのか？はもうお分かりだろう。ここから、隼の苦難が学校にも及んだことは間違いではない。

体育が終わり、隼は男子が教室に着替えているのにも関わらず、教室に入りヒゲに詰め寄る。

「この服はどうゆうことだ」

初対面のはずなのに遠慮ない言葉を発する。

「この服とは失礼な。立派な制服じゃないか」

悪気もなくすっぱり言う。

「制服？ こんなチャイナ服を制服にしている委員会ないじゃないか！！」

隼は今、制服ではなくチャイナ服を着ている。更衣室に戻った隼は制服が無く、その代わりにチャイナ服に変わっていたことに気が付いた。その上にメモが置いてあった。

チャイナ服を着ないと、あなたが犬神隼だと言います。そして、犬神銘が不幸になります。

BY金山より

立派な脅しだった。こんな事を指示するのはヒゲしかない事を知っていた。ちなみに髪型も変えてあった。それは、銘の仕業である。

「髪型も変えたほうがいいですよ」

無理やり、髪型を変えさせられた。女になってから分かったことだが、結構、服やら髪型を強要される。どうやら、こつこつ事が好きらしい。一種の人形遊びだろうか？ 素材がいいんだから、自分でやればいいのに。まあ、話を戻そう。

「お、転校生なのに詳しいな。しかし、なぜ俺を問い詰める」

隼はようやく自分の失念に気が付いた。

「いいえ、シブや銘、みわち・みわ先生に聞きました」

苦し紛れの言い訳をする。それと、女性の言葉と心の中で反復する。

「そうか。しかし、俺ではないぞ。生徒会の発案で、転校生は普通の生徒とは違う制服を着てもらう。皆で転校生を助けようと言う発案だ。生徒会の意向なんで、文句や議案提出は生徒会の目録箱に投

稿してくれ」

「どうやっても、自分は関わりがないと言つことらしい。さすが、影で操ることを得意にしている人物だ。こつ言われてしまえば後には何も言えずじまいだ。」

「はい・・・分かりました。あと、制服を返してもらえませんか」

ふつと、逆方向から攻める戦略を思いついた。制服さえ返してもらい、金山さんを説得すればいい。制服が駄目でも、冬用の体操服に着替えればいい。」

「それは、金山に聞けばいいじゃないかな」

「私を呼びましたか？」

すうくと、現れる。これが、能力なのか？ と疑問に思った。

「それは、違います特技です」

隼の心を読んだみたいに的確の返答である。

「読んでませんよ。それに、制服は帰りに返します。そして、犬神さんの明日からの制服はチャイナ服です。断った場合、メモの通りです。では、これにて」

金山さんがふつと消える。どうやら、これは学校の確定事項になったらしい。転校一日目で絶望し隼だった。

隼はまだ男子が着替え中ということで、教室から立ち去った。その瞬間にクラスは闇の集団に変わる。

「やはり。我がクラスの美人は、洋のシブ、和の近衛刀である。なら、その中華の犬神司で間違いはなかったな」

司令官が和食、中華、洋食みたいな言い方で話す。

「それで、工作参謀、戦利品は？」

「は、こちらに」

またもや、戦利品を机の上に数枚置く。

「今日の昼休みに闇ルートで競に出せ」と司令官

「は!!」と工作参謀は敬礼する。

「この資金で、また新しいコスプレを買っぞ」

司令官、新藤久信、どんな困難の道でも我が道を行く。十歳で神童、十五歳でマニア、二十歳過ぎればただの変体と言われる男である。この男に会ったせいで、マニアックに落ちた人間は幾多の星ほしより多いだろう。女子共の苦難は続く。

講義

学校の初日が安全？に終わり、部活動の誘いを断り、チャイナ服を脱ぎ制服に着替えて早速に銘とシブと一緒に帰宅した。帰宅した瞬間に女性の服に着替える。男性の服は銘に隠されてしまった。

「さて、講義を始めますよ」

2階の隼の部屋から一階の居間に降りてくると、神父服に着替えたシブが言ってきた。

「ああ、分かったよ」

シブが、この家に来てから毎日のように前世やアリス協会、力の使う心構えの講義が始まる。それが、隼の日課になっていた。

「では、まず。隼君が男に戻るためにどうするかです」

シブは犬神家では、隼君と呼び。外では司さんと呼ぶ。

「戻るのか？」

一番、知りたかった情報だったために声を張り上げる。横から、ひょこりと銘が現れ、隼の横に座る。

「はい。予測なのですが、隼君は半覚醒の状態だと思っんですよ」

「半覚醒？」

「能力を使えるようになる、前世の知識が脳に流れ使えるようになります。でも、隼君の場合は、女性化という中途半端の覚醒のために元に戻れなくなっている。と言う事です。」

「つまり、完全に覚醒すると、男性に戻れると」と銘が

「はい。でも、隼君の場合はおかしいんですよ」

シブが顔を渋くさせながら言う。

「おかしい？」と隼が

「言いづらんですが……。犬神隼は、一回、死んでいるはずなんですよ」

シブが、とんでもない事を言います。じゃ、ここに座っている人物は誰なのか？と疑問が浮かんでくる。

「はあ、じゃ、俺は誰だよ。犬神隼に化けていると言うのかよ」

「そうですね。姉さんは姉さんです。生まれてから一緒にいる私が証明します」

犬神姉妹が反論してくる。それを、見てあわててシブが弁明する。

「私もそう思います。しかし、神でも死にますと冥界に送り込まれます。普通はそこから、転生に向けて輪廻します。しかし、隼君はなぜかここにいます。あなたは、確かに隼君です。でも、確実に死んだことも事実です」

シブは一端区切る。その瞬間、重い空気が流れた。隼は、自分は誰なのだろうと思っていた。ここで、答えられる人はいないだろう。もはや、哲学の分野にも入っているのかもしれない。

隼の手を下から、握る人物がいた。

「姉さん、大丈夫です。なんとわれようが、私の家族です。とても大切な兄さんです。今は、姉さんですけどね」

その正体は銘だった。銘はいつも隼が落ち込んでいる時に暖かい言葉を送る。苦しい時に助けてくれるのはいつも銘である。

「銘、ありがとう」

隼もそれに合わせ素直に礼を述べる。銘と隼の前には兄妹とは思えない暖かな空間が生まれる。それは、熟年の夫婦が数年蓄積していく「愛」という言葉が会つのかも知れない。

「え〜と、あの、その、ちょっと、続きいいですか」

シブが申し訳なさそうに、続きを促そうとする。

「ああ」

「いいですよ」

二人が返事する。よかつたと二人に目を向けると、銘の目がいつもより、霧氷な眼になっている事に気が付いた。

「え〜と、だから、は、隼君が男に、も、も戻れるとは言えないよ」
シブはしどりどもりの口調になる。シブは凶悪事件も査察官として立ち会ってきたが、今の状況はそれよりも怖かった。

そんな状況に、隼は気付いていない。自分の事で周りのことを気にする余裕はなかったのだ。

「そうか、男には戻れない可能性がありか……。そうか……。」

「ああの、銘ちゃん」

「何でしょう?」

「……怒って……いませんか?」

シブは恐る恐る聞いてみる。

「何をです」

銘は普通に返す。しかし、銘の様子が尋常じゃないとシブは気付いていた。

「あははは、そうですね。私は何を言っているんですかね」

シブはあたりさわりのない様に愛想笑いで返す。

(え〜と、日本語でなんていったかな? たしか、さわらぬ神には……樽? いやいや、お払い系だったような。そうそう、さわらぬ神には祟り無し。日本人は面白い日本語を作りますね)

この状況はその通りにしようと思っただけだ。

「シブ、質問があるんだか？」

「はい？」

シブはこれから『さわらぬ神には祟り無し』を実行しようと思っ
ていたが、その願いは叶えられなかった。これからの隼の質問のせ
いである。

「今までの話を聞いてだ。シブは俺と関わりの前世がある人物では
ないのか？」

「あれ、言ってませんでした？」

「いや、聞いていないが」

シブは頭を傾げ、それを、隼が答える。

「そうですね。そうですね。私の前世は、北欧神話のシヴですよ。
隼君と一緒にです。ちなみに名前が「ブ」「ヴ」が違います」

「北欧神話のシヴ？」

「はい。そうですねよ」

「北欧神話のトールの妻の」

「はい。そうですね」

「え、シヴ」

「だから、そうですね、言っているじゃないですか？」

隼は何回も繰り返す。それも、そのはず

「なら、今回の事件は、あなたのせいでもあるんじゃないんですか？」

銘が物事を中心に爆弾を突っ込む。

そうである。今回の事件は、前世では男だったトールが、来世には女性になり、シブも女性である。やはり、女性同士では色々と障壁がある。トールと対面したときもそうゆう言葉を発していたことを記憶していた。

「ちょっと、待ってください。待って」

シブはあわてて、手で制する。ここにて、神にさわらなくとも巻き込まれると心中に思った。

「え〜と、え〜と、そうだ。隼君」

「何？」

シブは頭で一生懸命に考え、隼に話を振る。

「隼君、前世では、よくも私の頭を丸坊主にしてくれましたね」

シブは唐突に言ってきた。それもその筈、今は近衛刀とシブの関係を問い詰めている筈なのに、いきなり前世に話が飛んだこと隼も銘も唾然とする。

「なんで、いきなり前世に話が飛ぶんだよ」

隼が突っ込む。それを、待っていたとシブが口を開く。

「そうです。それです。私も前世の事を言われると困ります。今はシブではなくシブなんです。そうですよ。問題はこれからなんですよ。前世は忘れ、今の問題を解決しましょう」

シブは早口ではやし立てる。確かに正論を言っている。前世は前世、現世は現世である。つまり、現代で言えば、ネットゲームの世界と現実を混ぜなと言っ事だ。

「私は、事件が起こる前から、気難しい刀さんと、シブさんが慎ましい仲だと聞き及んでいます。あなたは、刀さんが前世の記憶がある事を知っていましたか？ 知っていた場合のアリス協会の取り組みを教えてくださいたいですが」

銘は冷静の問題を指摘する。「う、う、う」とシブは呻く。観念してシブは答える。

「はい。事件が起こる前に知っていました」

シブは刀がツールだと知っていたことを認めた。

「ではー」

銘が言い終わる前に、シブが言う。

「ですが、刀はアリス協会の1年間の観察期間を終えています。それ以降、犯罪を起こす場合などは、未然に防ぐことは難しいです。アリス協会では、犯罪を起こした場合の対処は、逮捕という形を取る事になります」

シブは突然、業務用の顔つきに切り替わる。その顔つきは「出来る女」とも言える顔つきである。

「アリス協会が失態を起こしたことも事実ですよね」

銘は厳しく追及する。シブは素直に「はい。そうです」と頷く。

「では、早く人数を増やして逮捕してください」

「それは、できません」

銘の切実の願いを、シブは一言で終わらす。

「なぜです。そちらに失態があつた事は確かではないですか」

大切の兄、姉を守るために銘はくらいつく。

「失態があつた事は確かです。しかし、能力者の逮捕には一般人は使えないんです。いても、邪魔なだけです。それに、アリス協会のほうでも人員が不足しているんです」

「しかしー」

「なので、私が派遣されました。私は戦闘能力、交渉能力などは協

員の中でもトップクラスです」

普段のシブを見ていると到底そうは思えないが、仕事中のシブは隙のない別人に見えるほどである。

「安心してください。隼君はきちんと守ります。私はそのために派遣されているんですから」

シブはそう付け加える。あの刀との夕日の時に、まだ伝えたい気持ち伝えていない事をシブは悔やんだ。

「分かりました。しかし、覚えといてください」

決意を見せる銘が静かに言う。

「姉さんを傷つけるもの、汚すものは、全力で私が排除します。」

私はトールから、恐ろしい計画を聞きました。それを、実行することは、もはや後戻りが出来ないと言う事。私は、あの人が言うとおり、この世には悪意が満ちていると思います。しかし、良いのでしょうか。人を一人殺すだけで、罪悪感が満ちてくる。私はただ、静かに生きていきたくった。誰も傷つけないで。そして、自分が傷つくことがない世界を。

その願いも、もう誰にも届かない。

僕はヘイムダル。どんな距離をも見通す目、どんな音も聞ける耳、眠りも必要としない特技を持っている。

世界は変革を求めていることが分かる。だから、僕たちがいる事も……。

これから、彼女たちがやる事、する事を、

全てを監視しなければいけない。それが僕の使命なのだから。

そして、全てを見届けなければいけない。

その、全てを……。

しかし、前世でも現世でも僕は傍観者である。

巫女

そして数日が過ぎた。

その間、近衛刀は学校に来なかった。その数日は隼にとって、一部の出来事以外は平穩の日々だった。

隼、銘、シブは神を祀る祭祀施設の本殿の中にいた。犬神家は古代から続く神社であり、犬神家の裏山の中に本殿が建っている。神は人間と同格ではないために禁足地になっている。島の古き風習であり、神聖な場所だと島人に知らしめるため、その場所に入れるのは犬神家の人と、犬神家から認められた人間だけになっていた。

ちなみに、犬神家の横にあるのは、境内と俗界の境界を示す鳥居と、島人を常に見守り、農作物の豊作をなす神がいる社殿が建てられ一般の人にもお参りが出来る。

「これから、何をするんですか？」

本職の巫女服を着ている銘・颯の服装をした隼が本殿の中で何かの準備に忙しく追われていた。

その横目で、着いて来たはいいが、何をするのかが分からない気まずさの為にシブが犬神姉妹に聞いてきた。

「ああ、神降鎮守の儀だよ」

隼が簡潔に答える。忙しく準備していた銘が手を止める。

「姉さん。簡潔すぎです。シブさん、今日は月食がありますよね」

そう言えば、今日は月食だったなとシブは思い出した。

「この島では、月が隠れる、すなわち神がお怒りになり災いが起こると伝わってきました。それを、お諫めする為に巫が神楽を舞う儀式です。推測ですが、岩戸隠れがこの島にも伝わったと捉えてもいいと思います」

「岩戸隠れ？」

「昔の日本昔話です。太陽の神アマテラスが岩戸に隠れ、闇が訪れました。それに、困り果てた八百万の神が相談し、様々な儀式行いました。岩戸の近くで宴会をし、その宴会をアマテラスが覗き、岩戸から出たときに注連縄を岩戸の入り口に張りました。闇が消え、光が高天原も葦原中国を照らしました。古事記にも載っているのが機会があれば読んではいかがです」

銘、隼は作業をするのは一端やめ、話し込む。それを、聞いて複雑な思いがシブに襲う。

「隼君、変な気分ですよね」

「変？」

「もしかしたら、自分の知らない所で、自分の前世が祭ってある可能性はあるんですよ」

考えてみたらそうかも知れない。自分の知らない所で自分自身が祭っているのは、嫌な気分になる。自分の前世を知らないにしても

だ。

しかも、最近、前世が関係している事件に係わっているのが、さらに隼に拍車を掛ける。

「ああ、そうだな」

隼もそれに同意した。

「そうだよな。でも、銘ちゃんの舞が見れるのは楽しみだな」

落ち込んでいた顔が一瞬に初めてみる神楽に興味を示す。神楽は日本でも伝統的な舞である。それを見られるのは外国人で言えば魅力的なのかもしれない。

「見れませんよ」

淡々と銘は答える。それを聞いてシブは一瞬に楽しみが消え衝撃が訪れる。

「何で!!」

「それは、神降鎮守の儀に入れるのは巫だけです。いい迷惑ですが世襲製ですので、犬神の血筋しか巫になれません」

無表情だが、うんざりした口調で話す銘。銘は、行事がある事に担ぎだされるのが嫌ならしい。

「でも、他の人にばれなきゃ大丈夫だよな」

よほど見たいのか、一旦、断られたのにも関わらず、交渉を始めるシブである。

「古き風習に従い。その願いは聞けません」

「でも〜」

「でも、こうもありません。シブさんは駄目です。でも、姉さんはいいですよ」

急に隼に話を振る銘。それに、いち早く反応するシブ。

「え、でも隼君は男・・・いえ、今は女です・・・」

「ちょっと、待て。俺は男だ。第一、踊れねえぞ」

隼が銘の言葉を止める。ここで、止めないと神降鎮守の儀に参加しなければいけない。そんな、面倒なことは避けるべし、第一、神楽など舞った経験など隼は一度もない。

「でも、近い将来を見据え、今から学ぶこともいいかと」

「んなあ。その前に、男に戻ってやる」

「出来ますかねえ」

男に戻れないと前提で話す銘とシブ、それを覆してやると新たに誓う隼であった。

「さあ、休憩は終わりにして、作業を始めましょうか。シブさんも

手伝わってください」

隼、シブに発破をかける銘。それに答え、動き出す隼と、仕事を
得たシブが作業を始めた。

「では、これから神降鎮守の儀に入りますので、朝方に迎えに来て
ください」

神降鎮守の儀の準備が終わり、新月が刻々と近づいてきた時刻だ
った。本殿の入り口の前で銘は本殿の外側にいる隼、シブに無表情
だか神妙な口調で言った。

「分かった。お勤め頑張れよ」

「銘ちゃん。怪我のしない様に気をつけてね」

二人は銘にそれぞれ激励を送る。銘はそれを見て本殿の入り口を
閉める。ここからは、部外者や、男は入ってはいけない領域だった。

「さて、帰るか」

銘がドアを最後まで締め終わるまで見送り、隼はぽつりと呟いた。

「そうだね」

シブも同意する。そして、隼は懐中電灯と灯しながら先行する。
それに、従来するシブ。漆黒の闇が光を灯す。田舎の山道は都会と
違い明かりがない。漆黒の闇なのだ。例え、携帯用の小型電灯を持
ちえようと、一線を光で灯すだけだった。

その闇に吸い込まれそうで、吸い込まれたら二度と出て来れない気がする。そう思いシブは静かに隼の手を触り握った。

「えっ」と隼は顔を紅潮しながら軽く口を開く。隼に取って、女の子に手を握られた事は銘以外には初めてのことであった。

「ごめん。ちょっと、暗くなっていて怖いから」

隼は真っ暗でよかったと思っていた。自分の顔を見られなくて

そして、二人は無言で暫く歩く。

二人以外には、はなやかな音色の虫の音。

漆黒の闇も、目が慣れれば星の光、欠け始めている月が照らす。

二人の息遣いが聞こえてくる。

手から温もりが感じられる。

二人だけの世界になっていた。

その二人を見ていた影がいた。

気に食わなかった。全てが、この世界が間違っている・・・。

多くの植物、多くの動物、多くの人間。

それが、同格、同一に見られることが気にくわなかった。

頭にノイズが掛かる。

コノ・・・セ・カ・イ・ハオ・・・カ・シ・イ・・・ト。

「隼君、あれ、見て」

握っていた手が、汗ばんでいるかいないかを気になり始めていた隼が、シブは立ち止まり顔を見上げた。隼も顔を上げると、月が欠け始めていた。

「もう少しで、新月だな」

「そうだね」

二人の会話が途切れ、周りが静かになる。手を握られてから、緊張して会話が続かない。気の利いた話が出来ないことに隼は歯がゆい気持ちだった。

必死に会話のネタを頭から探りあてる。必死に絞りだしたが、結局、隼が知っている事を話題に振った。

「そう言えば、シブは何でこの島に来ていたんだ？」

「お仕事だよ」

「仕事？」

シブは夜空を見上げたままこちらを見ない。隼もそれを習い夜空

を見続ける。月はゆっくりと消えていく。昔も今も変わらない月の美しい神秘。

「みわ先生の観察期間だよ」

「みわちゃんのこと？」

「そうです。隼君の前世の奥さんだよ」

「奥さんと言うのを止めてくれないか。照れるんだけど」

「なんで。それは真実なんだよ」

「それは、ロキであって、俺ではないんだから」

「そうですか」

夜空を見上げるのを止めて、横に並ぶ隼の顔を見る。隼も見上げるのを止めてシブの目を見詰め合う。互いの顔、鼻、口、目が近かった。

「その気持ちを大切にしてくださいね」

嬉しそうに、美しく笑う。美しかった。思考停止をしてしまう程である。見惚れるほどだった。

「隼君？」

反応がない、まだ、見詰めている隼に呼び掛けをする。ようやく、それで反応を起こす。

「あ……あつあ……。そう言えば金山さんは？」

隼は思考を起動するのに時間がかつたが、最後のほうは早口になる。

「金山さんは、アリス協会の方では禁則ですね。名前を出すだけでも禁句になっています。規則にも載っているほどです」

シブは苦笑する。金山さんは一体何者だろうか。と隼の頭の中で眼鏡を光らせる金山さんのイメージが浮かぶ。

そして、月の明りが消えるまで、二人の語らいが続いた。

月食

二人は夜空を見上げる。

月が完全に隠れる神秘の姿を見る。

その瞬間、星々の輝きが消える。

虫の音が消える。風が撫でる草の音が消える。光が消える。

そして、漆黒の闇が生まれた。

「何か変じゃない?」

周りの異変に気が付いた隼が神妙な口調でシブに問いかける。シブも周りの異変に気が付いていた。

漆黒の闇が体に纏わりつく湿った気配。普通の月食とは様子が違っていた。

「何か嫌な感触だな。銘の所に戻らないか」

異変を感じ、一番、最初に思いつくことが、妹を心配する事だった。

「そうだね」

その気持ちをシブは肯定した。隼にとって自分では分かっているな

いが、心の中では、一番銘ちゃんを大切に思っていることを日々一緒に暮らしている間に感じている。

二人は、引き返そうと思った瞬間に、シブ、隼が立っている下の地面に大きな魔方陣が生成される。

（これは、ヴァルハラ魔法！！）

シブは前世の記憶を呼び起こし、この魔方陣の意味を一瞬に呼び起こす。

ヴァルハラとは、戦死した勇士たちを天上の宮殿ヴァルハラへと迎え入れる。勇士達は、神々の黄昏での戦いに備えて、世界の終わりまで武術を磨き続けるだけの存在である。

（誰が、この魔法を！？）

シブが考える間に、魔方陣から数多の狼と鷲と人間が召喚された。生前には勇者や英雄といわれた人々がこの世に黄泉える。

その黄泉からの人間、狼、鷲がシブとツカサを囲う。人間達の顔、目は虚ろである。しかも、異臭を放っている。たぶん、体の半身が死んで、もう半分は生きている状態だろう。

「何だこれ」と呟き、隼の表情は蒼白になり、持っている懐中電灯を下に落とす。腰を抜けそうになるのを必死に堪えていた。

（グラスヘイムの候補落ち・・・。）

異臭がするということは、ヴァルハラグラスヘイムが戦死者を

選び、選定落ちだろう。つまり、ヴァルハラ勇士よりは実力も落ちる。人を一人守るぐらいなら、大丈夫だろうとシブは判断した。

「隼君、けして動かないように」

シブは隼に顔を向け絶対大丈夫だという笑みを見せ。握っていた手を離す。その笑みを見て隼の蒼白の顔色に血の気が戻った。

シブは神父服のポケットの中に手を突っ込み。死者達に真剣な顔で牽制する。その様子に死者達は躊躇もなく怒涛に攻めてくる。

シブは迫ってくる死者達に集中する。ポケットから手を出し、持っている物を四方八方に幾多に放つ、シブに近くにいる死者達の体は細切れになるもの、真つ二つになる物、切り傷はそれぞれだ。そして、沢山の細切れの死者達が土に返った。

（やはり、候補落ちは知識がない分、簡単な動作しかしないか）

幾多の死者を前にしても、シブは脅威に感じていなかった。シブは手を振り体を上、下、回転の動作だけで、周りの死者が細切れになっていく様子を隼は見ていた。

隼はシブが振っている手をじっくり見ていた。

（黄金の糸？）

シブの両手には幾多の黄金の糸が纏わり付いているのが、シブの指を少し動かすだけで、複雑に変化する。糸が死者や木に触れるだけで、スッパンと綺麗に切れる。

（たかが、人間が沢山の糸を操れるのだろうか？）

複雑の動きをする糸が、シブや隼が近づく死者達を微塵切りにする。糸の動きを把握している事を証明していた。

シブ、近衛刀の様な異能力者の力は人の能力を遥かに超えている。

いつかシブが「能力者には凶悪犯罪が沢山ある」「能力者の逮捕には一般人は使えないんです」という言葉を思い出す。

（これは、凶悪犯罪になるわけだ。警察官も殺されるだけだ）

この世に地獄というのがあれば、今の状態だろう。

死者達は簡単に滅ぼされていく、それも、一人の美少女が戦場を舞うように血吹雪を上げていく。一騎当千、戦乙女というのはこういう状況をいうのだろう。

しかし、シブは沢山の死者を土に返すが、魔方陣から死者が次々に召喚される。

（召喚者をどうにかしないと）

シブは死者達に脅威は感じていないが、その死者達の相手で精一杯である。魔方陣は大きく、黄金の糸より有効範囲は広い。そして、敵は正体も見せない。しかも、新月である。死者達が活発になり、その魔法に使う労力も消費が少なくなる。

（持久戦かな……。少しヤバイかな）

持久戦の考えよりも早く戦況が変化した。シブの複雑な糸の軌道を華麗にかわす黒く早い二対の狼がツカサの元に辿り着く。その二対の狼は大きな闇になり、隼は悲鳴を上げる暇もなく包み込み、地面に吸い込まれながら消える。

「隼君！！」

シブは驚愕な声を大きく張り上げるが、黒い影はもはや消えていた。

（あの狼は、ゲリとフレキ）

ゲリとフレキは、主神オーディンに付き添う一対の狼で「貪う」「飢え」を象徴している。そして、ヴァルハラ守護獣でもある。

（やはり、黒幕はオーディンが・・・）

ヴァルハラは主神オーディンの宮殿である。その宮殿の守護獣を簡単に召喚できるのも、その持ち主のオーディンである可能性が高い。相手がオーディンだとこの事件を解決するのは不可能に近い。全能の知識を持ち合わせているお方だからだ。

だからと言って、隼君を見殺しにする訳にはいけない。

「襲撃主は直ちに襲撃を止め、隼君を解放してください。こちらはアリス協会に所属しているものです。このまま、続行される場合には重要犯罪者として世界中に指名手配される場合があります」

虚空に警告を発するシブである。今状況での最善は、警告をすること。いきなり襲われたりしたが、異能力者の決まりを知らなかつ

た可能性もあるからだ。

まあ、その望みも少ないが……。アリス協会の方でも、まずは警告をし、それでも止めない場合は、実力行使に移るというマニュアルがある。

その警告を聞いたのか、シブの下にある魔方陣が消え、死者達もシブが相手をしているのが最後だ。

最後の死者を細切れにした時に、甲高い声がシブの耳に入る。

「それが、あの誇り高いトール神の妻の武器か。お笑いものだね」
「誰ですか」

甲高い声の方向に顔を向けるが、向けた方向には人がいなかった。確かにこちらの方に声が聞こえたんだけど……。とシブは顔を左右に振り人を探す。

「そこじゃないんだけどなあ。上だよ。上」

声変わりしていない少年みたいな声だった。その声にしたがい上の方向に顔を向ける。そこには木の上に立っている天使がいた。暗くて良く分からないが小学二、三年生ぐらいの子供の背中に羽が生えていた。

「そうそう。ここだよ。分かる」

無邪気の子供の声が「くすくす」と笑う。さっきまでの戦場が虚空の様になり、場の雰囲気が出るものに変わる。

「あなたがヴァルハラへの召喚をしたんですか？」

「そうだけど」

気を取り直しシブは子供に問い詰めようとしたが、子供はその問い詰めを無かった様に話を進める。

「その武器さ。前世では金髪のカツラだったよね」

前世ではシヴの自慢の金髪は邪心ロキに切られて丸坊主にされた。その時、シヴの夫トールが怒りのままにロキを追い回した。その結果トールの怒りを治めるためにシヴの髪のと全く同じ金髪のカツラを職人に作らせた。それは、被ると頭にくっついて本物の髪のようになってしまうという黄金製のカツラ、宝具でもある。それを、指摘される事はシブにとっては物凄く恥ずかしかった。

「そうじゃなくて、この死者達を召喚したのは君なの？」

今度は、聞き分けの無い子供をあやすように、強気にはつきりと言葉を吐いた。

「口の聞き方に気をつけて欲しいな。それでも、キミよりも長く生きていくんだけど。それと、先の質問は肯定の意味に取っていいよ」

「隼君を解放してください」

子供はシブより年上と主張するが、シブはそれに興味はなかった。それよりも、隼君の安否を気にしている。

「そんなにロキの事が好きかい。トールはどうでもいいのかな」

「今はそんな事は関係ありません。指示に従わない場合には、アリス協会の元で重要犯罪人として裁くこととなりますよ」

「ああ、アリス協会ね。そんなもの必要なくなるよ」

「どうゆう事です」

「人間という枠組みで、異能力者の規則を作っても意味が無い。そんな組織も必要なくなるよ」

この世界は異能力もない人間が中心に回っている。そのための、異能力者の規則が絶対に必要だ。世の出来事でもそれを証明している。有名どころで言えば、中世末期から近代にかけての魔女狩り、特にセイラム魔女裁判が有名である。どれも、発端は異能力を他者に見られて起こったものである。そのために、異能力者の中での規則が必要になった。

「そんな事はないです。能力がない人にも規則があるんですから、巨大の力を持つ人にも、それだけ責任は生まれます。そのための規則が必要なんですよ」

名声、地位、財力があるだけで強大な力が発生し、そのための責任が生まれる。

ましてや、自分達が持っているのは強大な力、世の中を滅ぼすことが出来るものもある。ただでさえ、ちょっとした超能力を使えるだけでマスコミ達が騒いでいるのに。

「ふっふ、だから、なんで無能な人間共の位置から考える。僕達は選ばれた特別な神なんだ。この世にも変革が必要だよ」

シブや絶句した。これは、思想の問題だ。いくら、議論しても平行線の話し合いになるだろう。相手は人間自体を見下しているのだから。

「それより、隼君を返してください。返し次第、アリス協会と共に話し合いに応じますよ」

警告を発するシブ。

「ああ、ロキね。ロキはもうそろそろ、出て来るんじゃないかな」

「出てくるっ」

「僕達の時代が幕を明けるのさ」

洞窟

隼は漆黒の暗い闇の洞窟の中に立っていた。

確か黒い物に覆われ、気付いたらここに立っていた。

(つまり、連れてこられた)

隼の思考の中で、答えが行き着いた。そして、洞窟らしき物を見回す。

その場所には、見覚えがあった。

とがった岩の上に蛇の毒が、岩の横に器、一番目に付くのは鎖

(ここに、幽閉されていた)

(ここで、大切なものを失った)

(ここで、あらゆるものを呪っていた)

(ここで、大切な……とても大切な誓いを立てた)

隼の頭に流れ込んでくる。ここに昔いた。今の自分ではなく昔の・
・前世の自分……ロキが……。

(ここでナルフィ、ヴァーリが殺され、シギンが亡くなった)

そして、闇が生まれる。いや、自分が闇になる。頭の中にエンドレスが鳴り響く。解放しろうと、

身をゆだねると

一番大切な者の死を無駄にするなと

大切なものを助けに行けと

隼は解放する。自分より意思が強いものに。

自分の体がゆっくり変換されるのが分かる。足、手、体、顔、脳、神経、細胞までが分子単位に変換される。

大量の知識が脳に流れ込んでくる。大量に処理しきれない知識が隼の頭の中を変にする。

ゆっくり表から裏に変換されるのかが分かった。

知識から記憶の強い映像が脳に焼かれ、映像が再生される。

古き記憶を呼び起こすために……。

古き記憶、ロキが大切なものを失った記憶。

薄暗い洞窟の中・・・深淵ともいえる洞窟。

沢山の高貴な神々がここに集まっていた。その集団から一人の女性、オーデインの妻フリッグが前に出る。隼には古き記憶から、神々達の名前、正体が分かった。

「よくも、バルドルを殺したなあ」

もの凄い形相な顔で、縄で縛っているロキをフリッグは睨みつける。ちなみに、バルドルとはオーデインとフリッグの最愛の息子である。

「何を言う。そちらこそ、よくもフェンリル、ヘル、ヨルムンガンドを最果てに追放したな。しかも、直接、殺したのはバルトルの兄弟であるヘズだろ」

「ふん、ヘズをたぶらかした癖に。それに、化け物たちをアースガルドにおける分けないだろう。考えるだけで、おぞましい」

フェンリル、ヨルムンガンド、ヘル、前妻の子供達である。

ロキの子供たちは、獣の形をして生まれてきた。それは邪悪な者として、神々達に無理やり捨てられた子供である。

縄に繋がっているロキに一人の神が蹴りを入れる。縄で抵抗が出来ないロキはそれをまともにくらう。しかし、ロキはこたえた様子を微塵にみせなく憤慨をもって、神々を睨みつける。神々はそれを見て、ロキを困い蹴ったり、棒を持って殴ったりする。もはや、これは集団リンチと言った方がいいかもしれない。

「もう、お許してください」

ロキの妻、シギンがロキの前に震えながら守るように立ちはかる。暴行を加えていた神々は一同、シギンに注目する。

「お願いします。私も一緒に罰をお受けいたしますので。なにどぞ、最高位と謳われる器量の広いお心を持つてお情けをください」

シギンは神々の前で土下座する。「お願いします」と何度も懇願されて、オーデイン、トールなどの男共は困っていた。

シギンは穏やかな性格でロキだけを想う誠実な妻である。ロキは罪があるにはしろ、直接バルドルを手に掛けていない。ロキの妻は、誠実な女性である彼女まで罰を与えることは、非道な極悪人と巨人族、他の神族に罵られる。

しかし、最愛の息子を失ったフリッグには、そんな嘆く声は心に届かず。とてつもない残酷な事を思いつく。

「あなた、私にいい考えがありますよ」

最高位の女神であるフリッグは整った顔立ちをしている。それを、憎悪に顔を歪めている。それは、直視などできない程である。

「ロキとシギンの息子、ヴァーリ、ナルフィをこちらに呼びなさい」

フリッグは低位の神に傲慢に命令する。その命令を聞いて、シギン、ロキは顔色を変える。

「何をするつもりですか」

れる。そして、しまいには母親と父親の名前を呼び泣き出ししてしまった。

「あなた、この罰。こうしましょう」

フリッグはオーディンに耳打ちをする。そして、オーディンは聞き終わると瞳を大きく開けフリッグに反論する。

「それは、あまりにも残語なんでは・・・」

「そんなことはありません。ロキはイズンの誘拐の件、エーギルの宴会の件、ロキの口論、そして、今回の件があるんですよ」

「決めるのはあなたです。最高位のオーディン殿」

オーディンは考え込むが、恐妻家のフリッグには頭が上がりなかつた。

「分かった。では、この案を採用しよう」

オーディンは他の神々の前で採決を言い渡す。シギンとロキは「残酷」と言ったオーディンの言葉が耳に残っていた。

「邪神ロキ、そして、シギンよ」

「はい」

シギンは神妙な顔つきで頷く。ロキは無言、無表情でオーディンの顔を見る。

「二人は、この場、暗黒と悲嘆の深淵で無期限の幽閉とする」

「はい」

シギンは安心したように頷く。確かに無期限にこの洞窟にいるのは死ぬよりも辛いだろうが、息子達にはなにも危害はない。それに、旦那であるロキが一緒である。シギンは愛するロキと何処にいようが幸せで入れると自覚している。その間、離れているヴァーリ、ナルフィが心配だが……。

「では、幽閉の準備をしよう。ヴァーリ、ナルフィはもっと前に連れてきなさい」

シギン、ロキは安心したのも束の間、オーディンは息子達に命令を下す。低位の神々はヴァーリ、ナルフィを無理やりオーディンの前に連れてくる。

「判決は決まったはずです」

「そつだ。これ以上何をするつもりだ」

判決は決まっている。無期懲役という数万年の時を暗黒と悲嘆の深淵と言われる暗黒の場を二人で生きていく。それは、死ねと言われるより辛いことだ。その上、息子に何かをするつもりらしい。

「息子二人には、ロキを繋ぐ鎖になってもらう」

ロキ、シギンは必死にその命令に異議を訴えるが、その異議に答えるものは誰もいなかった。

ロキの人生で後先なかった。

喜怒哀楽を一番共にしたのがシギンだった。

死んでから気付いたのだ。ロキで一番大切な存在、

.....シ
ギンを失った。

心に大きな穴が開いた。なんで、もっと、大切にしなかったのだろっ.....。

しばらくして、シギンの遺体を日の当たる場所に埋めようと外に運び込む。幾万年に見た外は悲惨の光景だった。

神族が巨人族を虐殺していた。神々はその傲慢さにより他の種族を見下していたのだ。

殺戮、虐殺、強奪、強姦.....
.....やりたい放題だった。

その凄惨さを見て、ロキの心は完全に壊れた。もはや、喜怒哀楽の感情はない。

シギンを地面に置き、手を強く握り締める。強く握り締めすぎたのか赤い血が流れていた。

「シギン見ている。傲慢な神族を滅ぼしてやる。全てを破壊、燃やし尽くしてやる」

シギンの前で誓いを立てる。そして、一人の復讐神が生まれる。

その後、神々の黄昏に繋がる。暗黒と悲嘆の深淵でフェンリルを解放し、巨人族を率いて神を滅ぼすために最後の戦いを挑む。

そして、再び、ロキは暗黒と悲嘆の深淵に立つ。

女体から男体に変化した体の状態で。

新たな、誓いを立てる。傲慢な神族を滅ぼすために。

ロキはまずフェンリルの居場所を探る。

知識をルーン文字に変化し魔方陣で探る。

「そこか」

すぐに見つかる。それも、血の繋がりがなす技でもある。

「あの地脈を辿ればすぐだな」

ロキは、目的のために動き出す。

もう一度、神々に復讐するために
.....。

洞窟（後書き）

神話は結構酷いことしますよね・・・。

再開

シブは大きな地面の揺れに必死に近くの木にしがみ付く。その揺れは激震で大きな地割れが生じ、地滑り、山崩れが発生した。地表部の隆起等で地形が変形する。

「ほら、来た。僕らを導いてくれる神が創造されたんだ」

「神の創造？」

「そうだよ。愚かな人間の支配は終わり、僕らの時代がやってくるのさ」

「何を言っているんですか。たかが、地震じゃないですか」

木にしがみついていたシブは立ち上がり、戦闘状態に戻る。子供は、木の上に立っていたのだが、地震が起きた為に空を飛んでいる。

「地震という仕組みは神族では誰が創造したんだい」

「まさか」

そんな筈はないとシブは思案する。間違いであってほしい。

「そう君が考えるとおりロキだよ」

暗黒と悲嘆の深淵に閉じ込められていた時である。頭に毒液があたりロキは苦痛のあまり大声で叫び身を擦る。その影響が地上に現れたものが地震である。その仕組みを創造したのはロキであった。

「では、隼君が完全に覚醒したと」

「それは、少し違うな」

「何が違うんですか」

「だから、新たにロキ神を創造したんだよ」

分かりづらい言い回しである。もう一度シブは具体的に聞き返す。

「隼君が前世を思い出したと言う事ですよね」

「違うよ」

シブの疑問を全否定する。子供は、寛大な物言いで言葉を吐き出す。

「隼という人格はなくなり、ロキ神が新たに甦ったのさ」

変な事を言い出す。人間をベースにしている限り、覚醒しても前世の記憶、知識だけが甦るだけだ。

それを、事にかけてロキ神が現代に甦る？ そんな筈はない。

「そんな訳ありません。何で、あなたにはそれが分かるのですか、一体、何者ですか」

「これは、これは。言っていないかったっけ」

「聞いていません」

相手は子供らしく手や体を「やれやれ」とおどける仕草を見せる。

「では、要望に答えて」

子供は手を前に掲げ、魔方陣を組み立てる。その魔方陣から一寸の光球を生み出す。その明かりで子供の姿を映し出した。

子供は、髪は長く白い、そして、紅い色の目だった。特徴的なのが、背中に白い羽と黒い羽が生えていることだ。しかし、顔立ちから見ても、男の子か？ 女の子か？ は分からなかった。

「まあ、シブとは、神の時代がきたら仲良く暮らす仲間だからね。僕はワルキューレだ」

ワルキューレとは、主神オーディンの命を受け、天馬に乗って戦場を駆け、戦死した勇士たちを天上の宮殿ヴァルハラへと迎え入れる。別名「戦死者を選ぶ者」「戦乙女」といわれる。

（そうか、ワルキューレだから、ヴァルハラ魔法を使えたんだ・・・）

ヴァルハラはオーディンの宮殿である。しかし、そこを管理しているのはワルキューレであった。

「ワタリガラス、ムニンを知っているか？」

「ムニン、あのオーディンの使い魔、記憶を司る獣」

「その記憶から、ヴォルヴァの予言があったのさ」

「ヴォルヴァの予言って、あの神々の黄昏も予言した」

「そう、今まで、外れたことがない予言」

今まで、ヴォルヴァの予言で外れたことはなかった。天地創造から神々の黄昏まで予言し、見事に全部当てている予言である。

「それに、予言されていたのさ、ロキ神が新たに創造されるとね」

(揺れがおさまった)

銘は本殿の薄暗い地下、何重にも鎖に繋がれた御神体の前にいた。御神体の前には、儀式に使う炎を灯している。その場所は犬神家は、銘以外は知られていない場所だった。

そのため、地震のせいか、埃がそこら中に舞っている。

埃が舞っているため巫女服の裾を口に当てていた。

(どうやら、地震の影響はないようですね)

地震の影響があるかないか周辺を見回し確認をする。どうやら、この地盤は固いようである。

(では、お勤めを果たしますか)

やれやれと溜息をしようかと衝動に襲われたが、埃だらけなので自粛した。

銘にとっては、例え、どんな、自然災害が起きようが、儀式を優先するのが優先事項である。しかし、銘の兄である・・・いや、姉である隼だけは例外である。

隼が死ななければ地球が滅びると言われようが、隼を守る方を平然に選ぶ女である。

そして、二度目の地震がおこる。さつきよりは揺れが少なめである。その、地震が切掛けなのか、鎖が数本外れていく、御神体から地面、壁が薄暗い血色でじわじわと染められていった。

(まさか、これは・・・。まだ早い。早すぎる。自分はまだ準備は終えていない)

血色に染められていく地面を見て、心臓が飛び出そうになるほど銘は驚く、さすがの霧氷の表情でも、ピクリと眉毛が動く。

間違いで欲しかった。銘が今想っていることが事実なら、儀式を飛び出して兄、姉の所に行きたい。しかし、今回だけは目的のために優先しなければいけないことがある。

そのために、神楽の舞を踊る準備をするため、腰に差している扇を持つ。

「犬神様、お諫めいたすために」

神妙な一言言い放ち、静かに舞を始めた。

ロキは地脈を辿り、海の上に出る。

(フェンリルはあの島の近くか)

潮の香り、無音の風、真っ黒の空を見て懐かしむ。

悠久な時を越えようが自然は
- 変わらない。

もしかしたら、世界の異分子は俺達かもしれない。

ロキは感傷に浸っていた。

「ロキーーーーー!!!!」

『正義』を自称する。少女らしくないどす黒く最果てまで届きそうな大声で叫びながら、何もかも小さい少女が遥か遠くの上からロキを見下す。

「トール」

こちらにも、声を抑えているが怒りが満ちていると分かる。ロキも声の方向に見上げる。

その両方とも、憎悪に満ちている目で見詰め合っ。

ここにきて、トール、ロキは、悠久の時を越え、再び

.....幾億年の再開を果たす。

私は全てを見てきました。親友同士だった二人の出会い。別離、そして、敵対。

世界の全ては何で傷つけあうんだろう。

どっちも、正義を盾に公憤に燃えている。

私は、傷をつけたくない。傷つけられたくない。

そして、何も見たくない。

その願いも、もう誰にも.....届かない。

僕はヘイムダル。どんな距離をも見通す目、どんな音も聞ける耳、眠りも必要としない特技を持っている。

再び、神族、巨人族の戦いが始まるのか.....。

そして、自分の使命が近づいているのが分かる。

しかし、神々の黄昏が起こるまで、

前世でも現世でも僕は傍観者である。

災害

「九つの鍵を掛けしシンモラの鉄箱、ロプト死の扉の下、災いの枝」
トールの方に両手を上げ、ロキは呪文を唱える。

ロキは頭の中でイメージを浮かべる。遙か遠くの時空にある破滅、災厄を運ぶ枝を、全てを焼き払う剣を時空の彼方から呼び起こす。

呪文が唱え終わると同時にロキの手から、蒼い炎が召喚され、トールの方に蒼い炎が天に一柱が立ち、トールを蒼い炎に覆いつくす。空を蒼い炎が一体を占め、太陽より明るい眩しい光を照らす。

しかし、その蒼い炎も、トールが振るうミヨルニルの金色の雷が蒼い炎を中和する。ミヨルニルとは、浄化する作用の効果がある。

「レーヴァテインか」

トールは呟く。蒼い炎を伴う剣を握るロキの姿が見えた。

「また、世界を炎で燃やし尽くすのか。おぬしは」

レーヴァテインとは、その炎の剣の刀身は太陽よりも眩しい輝きを発し、一薙ぎで持ち主の見える所すべてを焼き尽くすほどの威力を持っている。

神々の黄昏の時も、ロキの最後の力を絞り、生き残りすべてと、世界をまるごと焼き尽くし、九つの世界を海中に沈めた。そこには、

ムー大陸、アトランティスなどの伝説の島もあった。つまり、巨人族側の最終兵器である。

トールはロキ同じ高さに昇った。そして、静かに対面する。

二人はお互いに恨みがあった。

トールにしては、アース神族は絶対の『正義』だった。神々の黄昏の敵方、総大将のロキを許せるはずがない。神々の黄昏の時には、ロキの息子、ヨルムンガンドと対決し、最期に吹きかけられた毒のために来世では女性になっている。夕方の告白の事もロキのせいだと思っている。

ロキに言わせれば、神族は全て恨むべき種族である。神々の黄昏の時には、子供が一人殺されているのだ。ヨルムンガンドも生まれたときに海に捨てたのはトールだった。

そして、来世でも突然に襲われ、一度殺されている。

ここで、対立するのは当たり前だった。

『ロキ』対『トール』

『炎神』対『雷神』

『地』対『天』

『レーヴァンティン』対『ミヨルニル』

『全てを燃やし尽くす』対『全てを打ち壊す』の構図が生まれた。

二人の前にレーヴァンティンから創造される蒼い炎と、ミヨルニルから創造される金色の雷で空の一面を二分する。二人から生まれる蒼い炎、金色の雷は天災規模以上だった。

二人は眼を神妙な眼つきでぶっつけ合う。

そして、レーヴァンティンとミヨルニル、蒼い炎と金色の雷が纏わり付きながらゆっくりとぶっつけ合った。

その刹那、天が割れ、海が割れ、地が割れ、大気が割れた。

空は眩しく光、蒼い炎、金色の雷が踊っている。踊るたび地震がおきり、地が割れ、天が割れる。いつ、この島の火山がまた活動しだすかが分からない。

「由香里大丈夫か!!」

父は顔を血相に変えて、母と私を守るように抱きしめた。父のそんな必死になる顔を始めて見た。娘の誕生日も忘れているぐらいの父がだ。家族を愛してくれていたんだと橘由香里は思った。

「早く、避難しましょう」

母のあわてぶりに少し笑いそうになる自分を少し叱る。外を見ても、建物が傾いたり、大きく破壊されている。地震が起きるたびに

自分の意思で行動できない程に揺れている。

(でも、このままいても家の下敷きになるだけか)

「お父さん、お母さん、学校に避難しようよ」

持ち前の明るさで母、父に元気つける。それが由香里の武器である。二人と共に貴重品を持たず、すぐに学校に避難することに決めた。

なんとか、学校に着いた橘親子は安堵した。学校に来るまでの過程は惨めなもので話したくはない。まあ、救助する自衛隊員の気持ち少し分かったかなという気分だ。

体育館には島中の避難人で満ち溢れていた一杯だった。

「由香里、せんぱい!!」

腰を低く屈め、頭にはヘルメットを被っている。どうやら、地震による飛来物を避ける為に付けているらしい。

無表情のクラスメートの隼の妹といつも一緒にいる、由香里のパートナーでもある人物が目飛び込んできた。

「八重？」

「そうすつよ」

「八重も無事だったんだ。良かれ、良かれ」

「それ、どうゆう意味っすか。まあ無事ですけど」

いつもの様に軽口を開く。嫌な雰囲気が流れているときは私の持ち味で洗い流すべし。

私はそうゆう信念を持っていた。

「まあ、私の様ないい女は死なない。水もしたたるいい女」

「泥水だけどね」

「右手をご覧ください、一番低いのが小指で~~~~」

「著作権関係でヤバイし、その前に八重いくつよ」

「わかつちゃいるけどやめ~~~~」

「だから、やめ〜い。その前になぜ私が突っ込みを、しかも、ネタす〜く古すぎ」

「そんなの関係〜」

「やめい~~~~つぎゆ」

地震のせいで舌を噛む。由香里も八重もその場に座り込んだ。とてもではないが、立ってられない。勘違いだろうか、地震の感覚が短くなっている。

「八重・・・」

私は地震が収まるのを待って、とんでもない提案をした。

「なんっスか」

「外を出てみない？」

「え、危ないっスよ」

「大丈夫。グラウンドに出るだけだよ。体育館も、グラウンドも変わらないよ」

「いやはや、お主も悪よの〜〜」

「お主も、って使い方違うじゃん。だが、許す」

由香里は八重に向かって親指を立てる。その時の笑顔は、我ながらいい笑顔だろう。

八重と由香里は両親にはれないようにそつと外に出る。外に出るとしても体育館の傍を離れるわけではない。外から体育館に出る階段に座り込んだ。

外に出ると、夜空とは言えなかった。凄まじい眩しい光に包まれている。海は、炎と雷の竜巻を作っている。なぜ、炎は海の水で消えないんだろう。

「八重見て、雷と炎が混ざっているところ、黄金の色ですごく綺麗」

「そつっすね。すばやく、ちよろちよろと移動しているっスね」

二人で奇想天外な夜空を見上げる。蒼炎が移動すると地面も一緒に大きく横縦と揺れる。

奇想天外模様の空は、宇宙の創造みたく見える。

「八重、私、心残りがあるんだ」

私は語りだす。その落ち込んだ雰囲気には八重は言った。

「だめっスよ。先輩らしくない。ない」

「そうじゃないよ。ただ、八重とコンビ名決めてないのがね」

「コンビ名 いいスね。決めましょう。今すぐここで」

「マチユピチュ」

「それは、老いた峰。しかし、なぜマチユピチュ……。うわぁ〜頭に残る」

「では、チュパ ン」

「放送禁止用語、チュから離れませんか」

「ちくわコーティング」

「.....」

「いや、突っ込んでください。すみません」

「では、では」

「これは、雷火」

「……ただ、まあ、いっすよ。これで、いきましょう」

「くくく」と二人で笑いあう。

「私達で、犬神銘を笑いの道に導きましょう」

「隼の妹だよ」

「そうっすよ。あれは、私達の挑戦状です。あの霧氷の表情を溶かす。それが、私達の使命っすよ」

「そのために付きまわっていたのか」

「はい。いまだに笑顔を見せてもらえないっすけど」

「そうか。そうか。と囁し立てる。橘由香里は分かっていた。この世界は終わりに近付いていることが……」

親が自分の心配してくれるのは初めだった。友達、親友がいつもの様に自分のバカに付き合ってくれた。

由香里はそつと八重の肩に頭を乗せた。今日ぐらい我侭を聞いてもらってもいいだろう。

八重も何も言ってこなかった。幸せそうに私の頭に頭を寄せ合う。

……少しヘルメットが痛い。

.....私は幸せものだ。

目の見える人間は、見えるという幸福を知らずにいる。

ジツド

その通りだった。普通の日常がこんなに幸せだと分からなかった。私の横にはいつも友がいる。家には守ってくれる親がいた。

「これ、何しとる。危ないから学校に戻りや」

しばらく頭を傾けていたが、空気が読めない場違いの元気な声が、私達に注意してきた。

「先生やん」

「みわちゃん」

「由香里、先生をつけなきゃいけへん」

いつもの様子で注意する由香里の担任。

やはり、小学生組はきちんと先生と付けるんだ。由香里は場違いな考えをしていた。

「ほらほら、体育館に戻った戻った」

「はい」

素直に返事する。確かに外は危なすぎる。いつ、落雷が落ちるか、地面が割れるか、隕石が落ちてきてもおかしくはない。

私は八重に手を差し伸べ手を繋ぐ。そして、体育館のドアを開こうか手を伸ばしたところに、勝手にドアが開く。

「先生、行くんですか？」

金山さんだった。ちなみに由香里は金ちゃんと呼んでいる。

「金山、そりゃ、うちには関係がある。見て見ぬ事はできへん。それに裏がうるさいんや。たくはた迷惑な」

みわちゃんは自分の胸に親指を向ける。すごく面倒臭さそうに。長年企業の為に働いてきた疲れたサラリーマンの様な顔をしている。見ているだけでも、こちらも疲れてしまいそうだ。

「では、私も参りましょう」

そんなに、二人は仲良かった？と由香里は考えてしまった。

「フラグが立った」

「なんでやねん。寒いわ。引く」

「先生だめ。私がつっ込むとこだったのに」

「ちなみに、フラグとは英語で旗と意味がありますが、こちらの意味ではストーリーに〜」

「いや、いいっす。長くなりそうっすから……。」

「そうですか。残念です」

金山さんは残念そうな顔をする。本当に説明をするのが好きらしい。でも、フラグぐらい誰でも分かる事だ。

「じゃ、付いて来い」

「はい」

「あ、あんたたちはもどり」

そして、誰もいないグラウンドの中を二人は真直ぐ歩く。二人が見えなくなるまで八重と由香里は見ていた。

「よく、歩けるなあ」

「そうっすね。あんな地震の中を」

「それより、何しに行くんだらう?」

「さあ、分からないっすね。それより、もう戻らない?」

「そうだね」

二人は体育館に戻ろうとする。そして、私はここで一生、後悔をすることになる。

今までに比べられないほどの衝撃が由香里と八重に襲った。激震よりも上のレベル、日本全体ではなく世界、地球全体が揺れている感覚だった。

橘由香里は体育館の入り口から3〜4mグラウンドに投げ出されていた。強く八重と繋いでいた手も大きな揺れでいつのまにか外れていた。

私は暫く気絶していたのだろうか。目を開けると地面とキスをしていた。少し、身体を起すと地面が少し赤色に染まっている。

(頭が痛い。どうやら、さっきの地震で・・・八重は!!)

由香里はグラウンドの周辺を見回すが八重の姿は見当たらなかった。どうやら、私の周辺には投げ出されていないらしい。

(じゃ、どこに?)

由香里の背中がチリチリと熱いのに気が付いた。由香里はゆっくりゆっくり振り向いた。

昨日まで普通に通っていた学校が・・・

・・・私達の通う学校が燃えていた。

蒼い業火な炎が焼き尽くす。全ての建物を。全ての生き物を。

「八重。お母さん。お父さん」

由香里は大声で絶叫した。大切な人と呼んだ。それは、何も出来

ない赤ん坊みたく泣き声を張り上げる。

その泣き声に一人だけ、返事をするものがいた。

「お~~~~~」

返事ではなく、怨念の声だったかもしれない。それでもよかった。由香里は急いで返事の方に向かった。

（いた。一人じゃない。誰がいる）

一瞬の絶望から、喜びに変わる。由香里はまったくこの状況を考えていなかった。

一人の人間が立っていた。人間？人間ではなかった。

「きゃ~~~~~」

由香里は初めて叫び声を上げた。気が付いたら叫び声になっていた。由香里は動くことが出来なかった。恐怖とは身体を硬直させるものを学んだ。

もそもそと、ゆっくりと由香里に近づいてくる。

それは、肌色見たいのが溶けていた。その奥には赤いものが見えている。目が飛び出て片方はとろけている。口みたいな穴が開いている。髪の毛もパラパラと落ちていた。肌が燃えていた。手みたいのを前に上げ、怨念みたいな声を上げていた。

ここで、一番してはいけない事をしてしまった。

由香里は化け物が近づいて来る恐怖の為に叫んでしまった。

「ば、ばけ物来るな。来るな。来るな。死ね。あっちいけ。この化け物~~~~~。誰か助けて、母さん。父さん。八重~~~~」

その、言葉を聴いて一瞬止まり化け物は悲しい表情を見せるが、由香里は気が付かなかった。そしてまた、近づいてくる。

由香里の頭の中は真っ白だった。その化け物に殺される。呪い殺されると思ったのか、近くにある建物の破片らしき物を手に持ち必死に化け物に投げつける。

何度も何度も~~~~~化け物が倒れるまで破片をぶつけた。

化け物が倒れたときに、その化け物を動かないのかその場で確認する。

(これ、人間.....?!)

由香里は気が付いた。正視出来たものではないが人間だということ.....。

人間だと分かり化け物の近くに寄ると、由香里の足が手らしきものに捉まれる。

「いや、いや、やめて」

人間だが、見た目は化け物だ。嫌悪感が由香里に襲う。必死にそ

の手を振り届こうと暴れた。

「ゆ……か・い」

その聞き覚えがある声を聞いて、由香里の動きが止まる。

「八重」

一言ポツリ。いつも、呼んでいる単語をいつもの様に口から漏れた。

しかし、いつもの掛け声は返ってこなかった。

しばらくの時間立ち止まる。

(私は56何をしたかな。何を？石を投げ& amp; #1245\$
”1誰に& amp; ;\$’574745^0^?化け物?何?何を言
,5740-94#\$2546yehadoko?/okas
nn/¥・father)

由香里の中であまりの出来事が起きた為に頭の中を処理しきれなかった。

いつも、家に帰ったら母が小言を言ってくる。

そして、夜になれば律儀に早く帰ってくる無愛想な父。

学校に行けばクラスメートの新藤が馬鹿な事をしだす。

そして、八重と一緒に笑うんだ。

これは、夢だよな？ 夢だよ！！ そう、現実じゃないよ。

「そう言えば、八重、学際でバンドやるんだよね？ え、違ったごめんお笑いだっけ。あははは。ごめん。そうだよな。私、何を言っているんだろうね？ ねえ返事してよ。ねえ、どうしたの？ え、あれ、動かない？あれれ？ ふざけてんの？八重らしいな〜」

蒼い炎の嵐の中で楽しく話す少女の声がいつまでも聞こえた。

災害（後書き）

適当に明言を調べて書いてみました。
魔法の呪文が考えにくい！！

世界の終焉！？

「世界の終焉！？」

壮大な言葉に唾然するシブである。しかし、空や地上の状況を見てもそうは言ってはられない。

なんせ、地殻が変わっているのだ。周りを見て島の形が変わっているのが分かる。しかも、この島自体が移動もしているみたいだ。

「ヴォルヴァの预言通りに世界の終焉を向かえているのさ。それに、神々の黄昏の別の物言いを知っているかい？」

白髪のワルキューレは待って回った言い方をする。それにシブは律儀に反応する。

「偉大なる神々の運命」

「そう、ではその表裏一体は何？」

その質問にシブは頭にハテナを浮かべる。それが白髪のワルキューレは分かっていたのかヒントを出す。

「神々の終焉、そして、天地がぐずれ、新たな天地が創られ人間の世界が生まれる」

ここまで、聞いて蒼白な顔を浮かべ答えをシブは導き出した。

「人間の世界が終わる」

「ふふふ、正解。愚かな人間が滅び、新たに神の世界が創られる。偉大な儀式だ」

神々の黄昏が起きて、神が滅び、そして、人間の時代がやってきた。つまり、今度はその逆だということだ。人間の世界が滅び、ふたたび、神の時代がやってくるということだ。つまり、

「人間の黄昏」

天地の崩壊、ロキが『全てを焼き尽くす物』を持っているのもその為かもしれない。

「人間が汚した大地を滅ぼし、神に値する大地に創り変えているんだ。素晴らしいじゃないか」

その言葉を聞き、世界規模で起こっていると考えついた。そのシブの考えは当たっていた。洪水で埋め尽くされる国、地震が起きたこともないのに地震が起きている国、火山が噴火する国、大気が割れ酸素がなくなる国、それは世界規模で起こっていることだ。

「ほら、見てみな。あはは、人がゴミのようだ」

無邪気に邪気がなく笑う白い羽と黒い羽を持った子供。その目線にシブは追う。

「島が燃えている」

流れ星見たく蒼い炎、金色の雷が島に落ちていく。悲惨な程に逃げまどい業火の炎に焼かれていく人々。

「止めなきや」

心臓から必死に絞り出すような声でシブは呟く。

「ふふふ、何を？」

「トールを止めなきや」

「それを、どうやって？」

「私はトールを止めなきやいけない……いや、止められるのは私だけ」

決意を表示させる目、黄金を見せる髪、地震にも負けない立ち姿勢でワルキューレを見据える。かの女神シヴとも遜色も引けを取らない美しさだ。

「しかし、なぜ止める必要がある？」

「なぜって、多くの人が死んでいます。止めるのは当たり前です」

「そう、たかが人間が死んでいる。あの、愚かな馬鹿共だけがね」

「でも、私たちもその馬鹿共の一員です」

「僕達には力がある。それに、一定の時を過ごせば歳を取らない体。つまり、新世界の神だ」

前世が北欧神話の記憶を持つ人は、神々の黄昏が起きるまで一定

に成長しその後は老いない体になっている。前世がそうだった様に。

「そうかもしれない。でも、それ以外、何があるんですか？人間と神はそんなに違いはないです」

「違いはある。愚かな人間は人間同士殺し合いをしている。第一次世界大戦、第二次世界大戦を見たことがあるか。経験をしたことがあるか。あの卑劣な馬鹿共は、子供も、老人も、病人も平気で笑って殺す。自分の利益のために地球が汚す兵器を普通に造りやがる」

子供らしくない憤怒の形相をあらわにする。子供はシブが想像するより長く生きていたようだ。最低年齢でも第一次世界大戦が起きた西暦を予想して九十歳以上は生きているだろう。

「これは正当な罰なんだ。悪意でしか物事に接することしか出来ないクス達の末路だ」

「そうかもしれませんが。でも、前世の神々達も、同じ神族と争っていたじゃないですか。それに、巨人族を迫害していたじゃないですか。それは、同じことではないんですか」

シブの言うことは尤もだ。支配する側、される側はいつの時代になっても変わらない。暴力という言葉がなくならない時点で何も変わらない。

「馬鹿なこと言う。あの世界はオーディン様による統治。つまり、何をしても全知全能のオーディン様が法だ。オーディン様が間違えるはずがない」

「でも、なぜ神々の黄昏がなぜ起きたんです」

「ふん、そんなの化け物狼の異分子のせいだ」

自分の間違いは絶対に認めない。クラスでも一人いるタイプである。さらに、最悪なことに自分は特別な人物だと勘違いをしている所だ。

「トール達を止める」

何を言ってももはや無駄だと思い。トールたちの空に体を向けるシブ。それを、ワルキューレはすかさずシブを呼び止める。

「無駄さ。これは、必然的に起きる運命。神々の黄昏さえも回避できなかつたんだ。意味のない行動だよ」

「違う！！絶対にやらなきゃいけないんです」

決意を魅した眼光を前にワルキューレは止められないことを悟った。

「ふう。これは止まりそうもないな。まあトールとの約束だし、神が神を殺すのは大罪だから、まあ死なない程度に遊んであげるよ」

格下を見る目でシブを見る。それは、その筈だった。戦女神と大地の豊穡を司る女神とは大きな違いがある。昔の江戸時代に例えると、武士と農民ぐらい武力差が違う。

ワルキューレは死を意味する黒い羽、生を意味する白い羽を大きく広げ、その大きな翼で体を隠す。そして、その翼で力を溜め、魔力を開放すると九人に分かれた。

本来、ワルキューレは戦場で死せる者を選ぶために多くの死者と対面する必要がある。

そのために、オーデインのルーン魔法により、ルーン文字を刻まれ九つの命に分かれる事が出来た。

「ヴァルハラは召喚は魔力の消費が高いから。これで、遊んであげるよ」

主格である白い翼と黒い翼をもつ子供が遊ぶような口調でシブに言い放つ。八人のワルキューレはそれぞれ、両方の翼が白い翼が四人、黒い翼が四人に分かれている。主人各以外の八人は大剣クレイモアを持っていた。そして、主人格は死神が持つ様な大鎌を構えている。

八人のワルキューレはシブの頭上を囲い、騎士みたくクレイモアを体の前に剣先を上のように垂直に誇らしく立てる。

「オーデイン様の誓いを背かず、十戒を守り、腐敗無き祖国の為に働きとう事を誓う」

八人が一声に誓いの言葉を放つ。そして、クレイモアをシブに切っ先を向けた。

シブは戦うことは逃れられないと思いき攻撃態勢に入った。体を斜めに少し向け手を少し曲げ、静かに頭上先を見据える。

そして、静かな沈黙が起き、両者は戦いの切掛けを待っていた。

それは、皮肉な形で訪れた。

大きな爆音がワルキューレとシブに訪れたのだ。皮肉にもシブ達
が通う学校が蒼い炎で破壊された衝撃音で戦いの幕が下りた。

先に仕掛けてきたのはワルキューレ達だった。素早いスピードで
シブの方にクレイモアを八つの連激を放つ。元々、一人のためにそ
のコンビネーションは完璧だった。

シブもその連激に上手く対応していた。先の戦いでは隼という守
る対象がいたために黄金の糸を思い切りに放つことは出来なかった。
前後上下と見事に糸で防ぐ、そもそも、シブの戦いスタイルは複数
の相手に戦うのに適していた。

両者の戦いが均等に保たれていた。

なら、疲れさせればいい。シブが一人に対してこちらは九人いる。
ワルキューレは内心ほくそ笑んだ。

.....長い時間を掛けシブを疲弊させる戦
いが始まった。

その頃、ロキとトールは互角の戦いを繰り広げていた。

一撃の破壊力はミヨルニルを持つトール、魔力の強さではレーヴ
アンティンを持つロキだった。二人は優れた部分で戦いを進めてい

た。

その為か、戦いは均衡状態で戦況は変わらない。

両方とも均等な力にうまく創られていた。

全てを焼き尽くすレーヴァンティンが全てを燃やし尽くし、全てを打ち壊すミヨルニルが過去への浄化を示す。

この戦いはロキとトールでは決着が付かない戦いだらう。

ロキもトールも新世界の神の器になるものである。

両方とも、天地創造の歯車の一部である。

世界が、この世の浄化と破壊の炎と雷に包まれる。

.....この世界が完全に選択されるまでは決着はつかない。

精神世界

「ここはどこだ」

隼は周りを確かめる。そこには、陥没した大きな穴、その穴にはかつて泉があったのだろう。少し水が点々と溜まっている。そして、見渡す限りの枯れた野原、果ての見えない海よりも大きい一本の寿命が全うしそうな樹木があった。その、樹木には葉がない丸裸の寂しい風景だった。まさに、世界の終わりの姿に相応しい姿とも言えた。

（確か、ロキの記憶が俺に入り込んできたんだよな）

今までの出来ことを隼は思い出し、男の姿に戻った思っていたが、隼の体は女体のままだった。

なぜ、この場所にいるのか、疑問を解決するために注意深く、目を細めて辺り見回す。

枯れ果てた大きな樹木の根元に20代ぐらいのロングヘアの女性が立っていた。その人に近くに寄ろうと歩くが、いくら歩いてもその女性には一定の距離から近寄ることが出来なかった。

「すみません」

仕方なく、大声で隼はその女性を呼んだ。しかし、その女性はどんどん離れていく。

隼はその女性を追いかける為に走った。しかし、女性は一步も動いていないのに何故か隼からどんどん離れていく。

「私は過去を変えることも出来ない。しかし、私を通じて思い出すことが出来る」

女性は悲しそうな顔をする。女性は自分が持っていた枝を、魔法で空中に浮かせ隼に渡す。

「想いを妹達に繋げられることが出来る」

「何を言っているんですか？」

女性は悲しそうな顔をする。その後、誇らしげに顔を上げて隼に手を向けて魔方陣を発動させる。

そして、隼は手に持っている枝に吸い込まれた。

この物語はある少女の過去である。

生まれたときから「悪魔」「化け物」「呪いの子」「母親殺し」と呼ばれ付けた少女の記憶である。

季節は秋、空模様も高秋である。イチヨウが公園を黄色という一色に染めている。その、イチヨウの落ち葉模様は秋の風物詩が訪れたと言ってもいいだろう。

「ほら、奥さん見て。あの女の子。あの例、悪魔らしいのよ」

「悪魔って、あの」

「そうなのよ。出産時に武器を持って生まれたらしいのよ。しかも、出産した母親をあの子が殺したらしいのよ」

「まあ、怖い。それは、本当のこと」

「本当のことよ。ほら、あの香奈枝さんの旦那さんがそう言っていたのよ」

「ああ、婦人科のお医者様でしたわよね」

「そうそう。出産時に母親のお腹を突き破って殺したそうなのよ」

「それが、本当なら怖いわね」

近所の奥様方が公園で井戸端会議をしていた。その、話題の少女はどの遊具で遊ぶのかちらほらと遊具に目移りしていた。

「おい、その女」

小学校低学年ぐらいの少年達が幼稚園児ぐらいの少女を複数で囲み話しかけてきた。

「ななななに？」

少女はビクビクしながら声を掛けられた方向に体を向け、消え入

りそんな声で返事をする。それは、少女にとっては当たり前前の姿勢だった。

「おまえ、人ごろしだつてな。母ちゃんころしたつて」

少年たちは侮蔑の表情を隠さずに見せる。

「こころしていない。ひひとりごろしでもないよ」

複数の少年たちに囲まれながらも、少女は果敢に少年たちに言う。しかし、少女の幼い体、足が震えていた。

「うそを言うなよ。うちの母ちゃんが言ってるぜ。はんざいしゃだつてな」

「うそじゃないもん」

「はあ、うちの母ちゃんがうそを言うわけないじゃん」

少年は幼稚園ぐらいの少女の腹に蹴りを入れる。少女はその蹴りをまともにくらいその場に蹲る。

「さすがにやばいよ。けんちゃん」

「いいんだよ。こいつはんざいしゃだぜ。なにすつたていいんだよ」

「それもそうだよな」

リーダー各の一人が少女に暴行する。そして、二人の少年はそれに従う。この頃の少年達は無邪気で自分が何をしているのかよく分

かっついていないため、残虐である。

そして、その暴行を見る近所の奥様方も、その少女がサンドバツクになる姿を嘲笑、侮蔑、悪意を隠そうともしかった。その暴力行為は、

少女が気絶するまで続けられた。

少女が動かなくなったのがつまらないのか、少年達は立ち去っていく。近所の奥様方も、話を打ち切り解散するようだ。

侮蔑も暴力行為も少女にしては、日常茶飯事だった。突然、暴力を振るわれる事もあった。

少女は、気絶から目を覚め、体を動かすにも内臓や筋肉の節々が痛いのに気が付く。だが、少し待てばその痛みも消え体力も回復するだろう。少女は体に傷をつけても、すぐに傷が塞がってしまう。その人体の神秘も『悪魔』と呼ばれる由来の一因になっていた。

少女はあたりが暗くなっているのに気が付き、自分の家に帰ろうと立ち上がる。

(おとうさん。もう、かえっているよね)

まわりが暗くなって、電灯の明かりがチラチラと辺りを照らしている。彼女にとって、父親がいない家の方が危険の場所になっていた。

最初の方は、歩くのもおぼつかないが、今では普通に歩けるまで回復していた。しかし、少女の足取りは重かった。

少女は自分の家の門にたどり着いた。家の形は少女にとっては牢獄、監獄という表現が合うかも知れない。明治時代に建てられ現在まで威風堂々と建っている巨大な家、横には古き道場まである。

少女は静かに門に手を掛け、敷地内に静かな足取りで入る。少女にとって、この場所は父親以外は全員敵であった。

「その、悪魔」

怨みがましい顔つきで中学生の体格の少年が竹刀を持って少女に近づいてくる。その少年は少女の兄だった。

「遅いんだよ。どこ行っていた」

少女に一発、竹刀を叩きつける。少女は何も言わなかった。言えなかった。反抗な態度を取ればさらに竹刀の一閃が飛んでくる。少女は感情を失くすしか自分を守る術がなかった。

「ちょっと、付き合え」

（おとうさん、いないんだ）

兄の行動で父親がいない事を少女は悟った。父親がいる時は少女の名前を呼ぶのが恒例だった。だが、名前ではなく『悪魔』と呼ばれたのが、父親がいない証明だった。

これから起こる事は、いつもの行事。少女の服を兄が引く。こうして、兄に逆らっては竹刀が飛んでくる。だから、少女は素直に従った。

服を無理やり引つ張られ連れて行かれた場所は、やはり道場だった。ここで、いつも子供達の武術の実験台にされている。いつもの様に少年、少女が複数集まっていた。

「昨日のプロレス見たか？」

「あれ、見た。見た」

「すごいよなあ。あのパワーボム」

「ああ、しかし、あの蹴りも凄かったよ」

「実験台もいるし、やってみるか」

「おいおい。大丈夫か？」

「大丈夫だって。こいつ、骨折れたのに数分で直っちまうし、誰にもばねえよ」

「そう・・・だなあ。やるやる」

「勇次、今日も見せてくれ」

「おうよ」

最初の頃は、少年たちの横暴に止める奴がいた。しかし、狂気は人の心を連鎖させる。狂気な雰囲気子供たちの心を麻痺させていた。

いつもの様に少女はあらゆる骨が折られ、内臓を壊し、精神を壊していく。

公園の少年達の方がまだマシだった行為であろう。ここは、狂気に狂った少年少女達の樂園だった。

父親がいない場合は、家にも道場にも入れてもらえなかった。少女の食事はなく、寝る場所は明治時代に建てられた古い蔵だった。蔵の中は雨風を多少は防げるが、防寒は防げなかった。しかし、いくら

食事抜き暴力を行おうが少女は死ななかった。

.....その日常が数年続けられた。

少女の兄、勇次は狂っていた。その狂わした切掛けは少女が生まれるときに遡る。

勇次は母親を溺愛していた。勇次は母親が妊娠し、妹が出来ることを楽しみにしていた。少年は親達の教育方針で妹の出産に立ち会うことになった。

「腹が割れる。腹がいたああああ。壊れる」

母親が娩台の上で取り乱す。

「お母さん。大丈夫。お父さん、お母さんが死んじゃうよ」

勇次も母親に同様取り乱す。勇次は母親の辛そうな顔を見るのが、たいきれないのか視線を母親から逸らす。その勇次の逸らした顔を父親が暖かい手を包み込む。静かに勇次の耳に厳しい言葉を叩きつける。

「お母さんをしっかりと見なさい。勇次、男だろ。しっかりと見るんだ」

その言葉は勇次にとっては厳しく、「なぜ、苦しんでいる母親を助けてくれないんだろ」という思いが勇次に占める。父親にとっては、勇次の教育のため、生命を大切にして欲しい。勇次がどれだけ親達に望まれてきた命か知って欲しいための親の愛情だった。

その母親の表情が変わる。母親が悶絶しだした。白目になり、口には泡が吹き出した。突然変わった母親の様子に周りの看護師、医者が慌しく動き回る。

勇次の手が強く握られる。厳格の父親が「大丈夫だ。大丈夫」と心配そうな声が勇次の耳を反復する。

勇次には、この状況がスローモーションにゆっくりと動いていた。

そして、事は起こった。

母親のお腹から、血の柱が舞った。勇次の目にはゆっくりと母親のお腹が穴を開く瞬間を、肌と筋肉が無理やり人体から剥がされる瞬間を見た。

分娩室が真っ赤な血で染まる。鉄の匂いがそこら中に充満し、勇次の鼻に刺激する。人間の一人分の血が部屋中を真っ赤に染める事が出来ると勇次の頭の中で理解した。

二分された母親から、小さい金槌を持った乳児が産声を病院中に響かせていた。

勇次は分かっていたいなかった。その状況で自分が笑みを浮かべていることを……。

勇次にとって、妹は恨むべき敵、狂気が心に芽生えた存在。

数年後、その狂気の種が開花する事によって事件が起こる。

誕生！！

いつもの狂気の宴が終わり少女は死んだように蔵の中で眠っていた。あれから、数年の時が流れ、少女は小学校に上がり、その頃には少女の唯一味方だった父も、少女の異常な身体能力に避けるようになっていた。

そのため、少女の衣食住などは、衣服は学校の制服、食事は学校の給食、住む場所は蔵になっていた。学校では生徒の虐め、家では勇次達の虐めが深刻化してきているため、ろくに食事がありつけない事や、衣服などはボロボロになっていた。彼女は幼いながら、親を頼らず、自分で守るすべを学ばなければいけなかった。

一寸の光が顔に当たり少女は目を覚ました。

(もう、朝かな)

光が顔にさしこむ瞬間が少女にとって、自然の目覚まし時計だった。いつもの様に機械のように学校に行く、そうゆう日々を送るはずだった。

少女は静かに目を開け、寝起きでだるい上半身を起し、目を擦る。そして、欠伸をした。彼女が目を開けるとまだ暗闇だった。蔵の高い窓には満月の光が差し込んでいる。しかし、普通で行けば少女の顔にまばゆい光が照らす筈はなかった。

窓の照らす満月の光。でなく、違う方向から少女の顔に鋭い光が当たること少女は気付いた。複数の息遣いが聴こえてくる。

ここで、少女は人生で最大な分岐点を向える。

少女が荒々しい息遣いが聞こえてくる方に顔を向けようとしたが、少女の手、足、口を強い力が押えつける。

（泥棒！！）

古き蔵には年代物の骨董品がある。それを狙った泥棒かと思って横目で一寸の光を照らす方に目を向けた。

その正体はいつも、少女を道場で実験台にしている少年達だった。その、少年達は妙にギラついた目、鼻息が荒く、妙に凄く興奮をしている状態に見えた。

少女は抵抗を諦めた。これは、少女にとって最大な防衛策だった。泣き叫べば、逃げ出せば、抵抗すれば、さらに最大な報復が待っている。諦めればそのうち少年達は諦めてくれる。今度も少女はそう思っていた。

「早くしろ」

少年の一人が荒々しい口調で何かを急かしている。

「まあまあ、待て」

ゆっくりと、手に鋭い銀色の光を持って勇次が少女の前に立つ。勇次の顔は少女には見えないが気配で笑みを浮かべていると分かった。

「服がじゃまだなあ。体をしっかり抑えとけ」

勇次は少年達に高圧的に命令する。武芸の名門の息子であり、同世代の中では抜群に武道の実力があつた。学生の男社会で言えば、喧嘩が強ければ逆らえる奴はいない。それに加え、あの狂気の空間を作つたのも勇次だつた。一種の教祖といつてもいいのかもしれない。

少女は自分の首に銀色の光を突きつける物を見た。その銀色の物が少女の首からお腹まで動く。それと、一緒に衣服が破れる音も少女は聞いた。

少年達の感嘆の声が聞こえた。そして、さらに少年達は興奮する。

「おい、早くやれよ」

「すげえ〜緊張してきた」

「はやく、裂けよ」

少年達は次々に感想を漏らす。少年達は少女を人間と見ていなかった。いや、この地域にいる誰もが少女を人と見ている人はいないだろう。

「じゃ、要望に答えてお腹を裂きます」

勇次は軽いおちゃらけな口調で少年達に言う。少女のお腹に銀色の光、いや、刃渡り30cmのナイフを突きつけている。

今まで少女は感情が無くなっていた。いや、少女自身、感情が無いだらうと思つていたに違いない。しかし、ナイフを少女にお腹に

突き付ける瞬間。彼女は初めて『死』を間近に感じた。

(ナイフ。 - - - さくもの。 - - -
- - - 肉を切るもの。ころす。し、視、屍、死、死、死
死死死死死死死死 - - -
- - - 死)

死の恐怖感を少女に襲う。少女には傷が治る不思議な力が宿っている。今まで、殴られても骨を折れても、『死』の恐怖はなかった。今は凶器の刃により『死』が頭に浮かぶ。

「うっ、うっ~~~~~」

口を押えられているため少女の悲痛な呻き声しか聞こえなかった。その声を聞いて少年達は興奮の最高潮になる。

生物の生存本能なのか、かつてない力で少女は暴れた。しかし、少女は一人、少年達は五人以上いた。

「おめえ、うぜえんだよ」

少年達の代表勇次が一言、少女にぶつける。

少年達に手、足をより強く押さえつけられ、そこから、うめき声が無くなるまで少女の顔、お腹を力一杯殴る。殴る。殴る。

そして、少女は動きが止まる。目がうつろになっている。もはや、現実なのか仮想なのか脳が朦朧としているだろう。

「じゃ、ファイナーレといこうか」

少年達は少女を殴ったおかげか、興奮は少し治まっていた。

そして、勇次は少女の胸から腹までナイフの垂直な一閃、少女にとっては上半身が冷たい感触が通り過ぎていった。

「うげ、血汚ねえ」

「あれが、胃か」

「うわ、びくびく動いてやがる」

「あはははあ、心臓だよ。あれ」

「子宮まで裂こうぜ」

惨い残獄、血の匂い、がこの場を占めていた。少女はあまりの苦痛で、気絶も出来なかった。少女の頭の中がクリアになり、あまりの苦痛で呻く。

(.....)
(.....正義を)

少女の苦痛が雷光になり、地面を強雨で叩き、少女の近くに雷を落とす。窓から、雷の光をピカアーと照らした。

(.....)
(.....ゆだねろ)

しかし、少年達は気が付かなかった。この、血の匂い、初めて見

る人の中身を少年達に驚異的な集中力と興奮を与える。

「おい、杭持つて来いよ」

「なんでだよ」

「標本にするんだよ」

「それ、ナイス」

少年達は少女の様子を見ずに話を進める。少女は絶対に『死』には『死』ないだろと誰もが考えていた。

(思い出せ。全てを……。屈辱を……)

少女の頭に鳴り響く。『解放しろ』とエンドレスが頭に鳴り続ける。

少年達は杭と、皮肉にも少女が生まれ持っていた金槌を、勇次は蔵の中で奥深くに締まっていた場所から取り出した。その金槌を使い、少女の手、足を地面に打ち付ける。

しかし、少女は死ななかった。気絶もしなかった。大量に血が出ている。人間の生きるために必要な血の許容範囲は超えていた。

さすがに少年達も少女を見て、恐れを見せた。少年達の誰かが言った。

「化け物……」と、誰もが思っていた「人間じゃない」と、

少女は痛みを気にしている余裕はなかった。必死に「解放」を止めていた。その行為を少女は知らなかった。いや、本能で分かっていた。しかし、心優しい少女は「解放」しなかった。

勇次はなかなか死なない少女に腹が立っていた。顔を憎悪で満たしてしまう。『母親を殺して、のうのと生きている少女に……。絶対、許しはしない』それが、勇次の心に絞めつける。

勇次は手に持っている金槌を少女の心臓に、杭と一緒に向ける。

『吸血鬼は心臓に杭を打たれると死ぬ』

どこかの文献で勇次は見たことがあった。それで、異常な、最悪な『悪魔』が死ぬだろうと考えたのだ。

その通りに勇次は杭を打ち込もうとした。しかし、ピクピク動く心臓が杭に刺さる一歩手前で、少女から発するまばゆい金色の光を最後に勇次、少年達は見た。

少女は心臓に打ち込まれると分かり、『死』より『生』を選んだ。

『死』がすごく怖かった。

今までの人生で少女は切実に願った

「生きたい。死にたくない」と、そして、

声の言うとおり『解放』した。

少女の意識が表から裏に還る事が分かる。

大量の知識が少女の脳に流れ込む。

そして、少女はトール神に意識を渡した。

トール神は雷を発する。少年達は光に包まれ灰になった。

少女は『人殺し』という重い十字架を背負ってしまふ。

これは、少女の過去、近衛刀がトールに変わる歴史を隼の記憶に刻み込まれた。

近衛刀

隼は手に杖を持ち、同じ枯れ果てている場所に立っていた。

(あれは、近衛刀の過去……)

頭の中に刻まれた記憶を必死に呼び起こす。あれは、疑いも無い本当にあつた話。一歩間違えば隼にもありえた話であつた。

隼には銘が傍にいてくれた。自分の存在を認めてくれた。しかし、近衛刀には誰もいなかった。誰もがその存在を認めなかった。

「私は維持するもの。そして、私は誰にも刻み、触れる事が出来、そこにあり、そして、行うもの」

玲瓏な美声が隼の耳を掠める。美声が聞こえた方に向けるとすぐ傍、顔と顔、体と体が触れるぐらいのすぐ近く、目の前にセミシヨートぐらいの髪型をした十代ぐらいの美女が立っていた。

「私は今でも刻んでいる。そして、姉さんになる」

隼を気にすることなく、言葉を繋ぐ。隼も質問することも、話しかけるのも無意味だと心奥底で分かっていた。

「私を姉さんと妹を繋ぐ者、そして、生成するもの」

セミシヨートの美女は魔方陣を広げる。彼女は『繋ぐ者』である。隼はその魔方陣に身をゆだねる。隼は杖になり、そこに二本の杖が場に残った。

無限の姿を映す鏡張りの場所に隼は行き着いた。その、鏡は過去の彼女と現在の彼女を映す鏡。ここは、近衛刀の部屋、居場所だった。

鏡が近衛刀の小さい幼女の姿から現代の姿を鏡と鏡が合わせ鏡になり、無限の姿を映す。ここは、近衛刀が近衛刀でいられる場所。近衛刀の心である。

鏡が鏡を写す中心点には、一人の女性が蹲っていた。

「私が殺したんじゃない。殺したんじゃないよ。違う、全て、ツールが殺したんだ。私じゃない」

悲痛な声と呻き声が場を満たす。隼はただ、近衛刀の悲痛な声を聞くことしか出来なかった。そして、近衛刀は言葉を紡ぐ。

「.....お兄ちゃんを殺したのも私じゃない。お母さんを殺したのも違う。違う。私じゃない。違う。私は何もやってない」

近衛刀の様子は幼い少女みたいにも見えた。隼の顔を見ようとしても、すぐに下のほうに顔を向け震えている。隼の中に刻まれた記憶の少女もそうだった。何かに怯え、怖がる。それが、彼女が彼女自身を守る唯一の方法だった。どんなに表情を無くそうが心の奥底では泣いていた。救いを求めていた。

これがツールではなく、本当の近衛刀の姿。

「犬神隼を傷つけたのも違う。私は必死に止めた。トールは聞かなかった。私のせいじゃないよ」

これも本当の話だ。隼自身も分かっていた。ロキと人格を交代したことを、それは、ロキとは違う人格だと言うことだ。

隼は近衛刀に一步步を進める。近衛刀に隼が一步近づくことに怯える顔を見せる。近衛刀に好意を持って接した人は何人いたんだろうか？ たぶん、誰もが彼女を蔑み、侮辱、嘲笑しただろう。

隼は近衛刀の震える小さな手を握る。近衛刀は隼が手を握ったときに初め隼の顔と目を数秒間だけ合わせた。

目を合わせた数秒間に近衛刀の想いが流れてくる。

全ての人々の悪意を一身に受け近衛刀は泣いていた。勇次の悪意でトールに意識を渡した。近衛刀はどんな形でも生きていたかった。死にたくはなかったのだ。

蔵が灰に変わった後、少年達と勇次は『死』にトールは『生』き残った。その事件によりトールは侮蔑、人々の悪意を刀ときより受けてしまう。だが、トールは侮蔑や蔑みを暴力で変えていった。いつもの様に、近衛刀を実験台にしようとする人々を逆に暴力で叩きのめす。全ての外敵を暴力で屈服させていった。

誰もトールに侮蔑、嘲笑をする人はいなくなった。近衛刀ときより、トールの傍には人がいた。近衛刀という存在はいらないのだと、同じ容姿でもトールの方が必要だと感じた。

.....近
衛刀の全てが否定された。

隼は近衛刀の手を掴み立ち上がらせる。そして、ただ一言を近衛刀の耳に呟いた。

「刀、行こう」

隼は近衛刀の手を引いて走り出す。

この場所でどんな言葉を言っても嘘になる。ただの偽善的な言葉。その人の傷を触れていても、記憶や過去を知っていても、その本人しか分からない傷である。でも、自分自身の殻に籠っても何も始まらない。だから、その近衛刀の殻を壊そうと隼は走り出した。

隼は大きな一つの鏡に向けて走り出した。彼女を導くのは自分だと確信して。そして、二人の美少女は鏡の中に消えていった。

隼は近衛刀の手を掴み立ち上がらせる。そして、ただ一言を近衛刀の耳に呟いた。

「刀、行こう」

隼は近衛刀の手を引いて走り出す。

この場所でどんな言葉を言っても嘘になる。ただの偽善的な言葉。その人の傷を触れていても、記憶や過去を知っていても、その本人しか分からない傷である。でも、自分自身の殻に籠っても何も始まらない。だから、その近衛刀の殻を壊そうと隼は走り出した。

隼は大きな一つの鏡に向けて走り出した。彼女を導くのは自分だと確信して。そして、二人の美少女は鏡の中に消えていった。

鏡の中から枯れ果てた大地に二人、近衛刀と犬神隼は立っていた。

「な、な、なにをす、するんですか」

面と向かって人と話すのが久しぶりなのか、小刻みに震え顔を背け声がどもっている。そんな状態でも隼に頑張って抗議する。

「いや、何となく」

「な何となく、あ、あ、あなたはそそんだけの理由で人をひ引つ張りだすんですか？」

「……。そうだよ」

「そうだよ。て、そそんんな」

「話をしてみたかったただけだけど」

「いや……ああの」

そうゆう言葉を言われたことがないのか、近衛刀はその小さな容姿もあり、小動物を想像させオロオロと落ち着かなく常にビクビクと動いていた。

「話すのも嫌だった」

その近衛刀の姿に、つい微笑みを隼は浮かべてしまう。

「そっそいう訳ではなく。いや、あのその」

「でも、私とは話すのはききっとく苦痛だとおお思っています」

「いや、結構、今の状況でもすごく面白いけど」

「ででも、ききっと私のほ本性をししし知ったら、きき嫌いになります」

「それは、『ツール』が人殺しだから」

「……！！」

的確に指摘されて近衛刀はビクビクしていた動きを初めて止め、石のように硬く、体や顔の表情が石化した。

「だって、『ツール』は俺の事だって殺したじゃん」

「えええ、あなたなんかここ殺していませんよ？」

隼の女体のという姿には、刀は見覚えがなかった。

「ああ、この姿じゃ分からないか……。今は、女の姿をしているが、男だよ」

「おおオカマです……ですか？」

「違う」

刀のボケに、隼は鋭く突っ込みを入れる。

「ごごごめんなさい」

それを素直に謝る刀であった。

「俺は犬神隼だよ。一応、戸籍上では司だけだな」

「……犬神はははやと!？」

「女体になった理由はたぶんツールに殺されたから」

「ごごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。……」

近衛刀の『罪』が表にでた言葉だった。だから、自分の殻に引籠もった。でも、もう逃げることは出来なかった。逃げ場所には犬神隼がやってきたのだ。だから、謝るしかなかった。どんなに糾弾されようが、それが近衛刀の『罪』の形だった。

「いや、謝られても困るんだけど」

「……ごごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。」

だが、近衛刀は謝ること止めなかった。ただ、怖かった糾弾されることを、罪を問われることを……。

「ああ、面倒くせえ」

隼に取っては、謝ってもらっても言葉の通りの意味だった。あれは、トールの事で近衛刀ではなかった。近衛刀の兄や少年達の事もあれは自業自得で正当防衛だ。母親にしても、例え、自分が銘に殺されようが恨みは絶対にしない。絶対にだ。逆に幸せを祈るぐらいだ。

下を向いて謝る近衛刀の顔を両手で掴み、上へ上げさせる。そして、隼の顔を見上げさせた。

「あやまるな」

「でもでも、私は……………」

近衛刀は顔や目を伏せようとするが、隼がそうはさせなかった。

「だから、怒ってないし、お前は近衛刀だ」

「？」

隼が何を言っているのかが近衛刀は分からなかった。隼は単純な話をしているだけだ。

「近衛刀は、俺の事を殺すのか？」

「い…………え…………」

「なら、どうでもいい」

素っ気無く淡々と隼は言った。ここで偽善的に「近衛刀には罪が

ないよ。悪くないよ」と言う人もいるだろう。しかし、『罪』は消えない。人を殺した事実も消せはしないだろう。それは、隼にも言えることだった。今、沢山の人が死んでいる。それは、ロキのせいと逃げるわけにはいけない。犬神隼の『罪』でもある。それは、決して否定は出来ないことだ。

だから、隼は近衛刀の存在を肯定した。けして、否定はしなかった。

「でも、私は必要ない人間だし。あなたも殺した……」

「んあな事はどうでもいい。本当にツールではなく近衛刀と話したかっただけだ」

真直ぐ隼は近衛刀の瞳を見詰める。近衛刀の瞳は純粹な濁りが無い、吸い込まれそうな漆黒の瞳をしていた。その当の見詰められている本人は真っ赤な顔で瞳を逸らそうと頑張っていた。

「私は訪れるもの、私は触れることは出来ない。しかし、いずれ触れるもの」

隼は近衛刀の顔を掴む両手を離し、幼き声が聞こえるほうに顔を向ける。それに、直り近衛刀も顔を向ける。

今まで通り女性が立っていた。その女性は年齢が一桁といってもいい幼き美少女、髪型はショートカットだった。

「お、おお知り合いですか」

「いや、知りはないが、て、隠れるなよ」

刀は隼の真後ろに隠れた。これも、少しは隼に信頼感を持っている証拠であろうか？ 判断を下すに材料が少なく難しかった。

「すすすいません。でも、すすすいません」

隼が注意しても後ろに隠れるのは止めなかった。やはり、人間不信なのか、小さい女の子が遠くにいるだけなのに少し体が震えていた。

「ちち近づいてきますよ」

「そうだな」

「ただ大丈夫でしょうか」

「何が？」

「だって、いい今、思えば、わわ私たちは仮定なのですが、に肉体がない精神体みたいじゃないでしょうか？ 普通の幽霊は冥界に行くのがそ相場です。神族みたいな感じでは、なのであの女の子も・・・うひい」

最後の『うひい』は刀の緊張が頂点に上がったらしい。あと、一押しで気絶しそうな勢いだ。

「つまり、あの少女も俺達と同じ存在だと。それか前世関係者の可能性がある」

「そそう・・・です」

「でも、この場所では違うじゃないかな」

隼は直感で言った。ここは、全てのものが存在し、全てのものが存在しない場所。

近衛刀もそれを感じたのか沈黙している。

「私は、いずれお姉ちゃんになる。それは、私の責務である」

一定の距離まで近づいて、ショートカットの美少女は幼き声を響かせる。

「私はこれから成すべき義務であり、債務である」

そして、ショートカットの美少女は今までの美女と同じく魔方陣を作る。

「選択の時である」

美少女は一言。犬神隼と近衛刀は魔方陣に吸い込まれ、枝が二本その場に残った。

その二本の枝を、ショートカットの美少女は持つ、そして、その場にロングヘアート、セミショートの美女が静かに現れた。

この美女、美少女は隼が会った順番に、ウルズ、ベルザンディー、

スクルドと名前がある。その三人はノルンとも言われている。しかし、彼女達は、その存在はない。

彼女達は時の支配者である。ウルズは『過去』、ベルザンディーが『現在』、スクルドは『未来』を司っている。この場所は全ての生きる物が通っていく場所。全ての物が「過去」現在「未来」を表裏一体に経験している。

そして、ノルン達は二本の枝を地面に刺す。その二本の枝が一本の若木になり、古き枯れ果てた樹木は灰になる。その樹木は役目を終えたのだ。新たな若木が全ての世界を支える樹木『世界樹』となる。

先の彼女たちが創造する新しい世界を支える新たな木である。

近衛刀（後書き）

お正月忙しい・・・。

復活

ここは、昔はユグドラシルと言われた場所。

今では名もなき場所。

ここで全ての運命が刻まれる。

「お待ちしていました」

礼儀正しくゆっくりと犬神隼と近衛刀にお辞儀した。

「うひい・・・」

刀は隼の後ろに素早く隠れた。刀の様子に気も留める余裕がなかった。

「みわちゃん」

ここにはありえない人の名前を呼ぶ。

「でも、おお大阪弁じゃない・・・よ。そそれに、そのい・服」

みわちゃんの姿ではあった。しかし、喋り方、仕草などは彼女には程遠い礼儀正しさである。そして、一番の違いはみわちゃんが着ている服が、どこかの民族衣装を着ていた。

「なんで、みわちゃんを知っているんだ？」

素朴の疑問を隼の後ろに隠れている刀にぶつける。

「と、トールの行動は、わ私の記憶にもなるから分かるんす」

「そうなのか。で、何でみわちゃんがここに居るんだ」

隼はすばやく本題に入った。

「私は、みわ様ではありません」

「じゃ、誰なんだ？」

「私は、みわ様の精神分裂体です。今の世には名前はありません。しかし、あえて名前をいいますと、シギンという名前になります」

「シギン!？」

突然、前世の妻の名前を聞いて隼は驚く。ちなみに、刀は隼の後ろで亀みたいに顔を出したり引つ込めたりと大忙しだ。どうやら、様子を伺っているようだ。

「そうです。みわ様の能力を知っていますか？」

「ドッペルゲンガーだっけ、自分のもう一人を生み出す奴」

「わわ私、もうひ一人のじ人物をみ見るとし死ぬと聴きました」

「それは、都市伝説だよ」

「もう一人の人物、前世のシギンの記憶を分裂させ創造しました」

それが、みわ様の能力……」

シギンは隼と近衛刀の顔色を見ながら、話を続ける。

「……です。精神体でしか行けない場所に私は行くことが出来ます」

人が死んだら冥界に行く。しかし、死んだわけでもなく肉体がある場合、例えば、二重人格などの精神だけ人格の居場所はどこにあるだろうか？その答えは、ユグドラシルという場所である。ユグドラシルのある世界樹が全ての、肉体や精神を繋ぎ、世界をも繋ぎ支える役目をしている。

「しかし、なぜ、みわちゃんの姿をしているんだ。シギンの顔でも良かった筈では」

「そうですね」

みわちゃんの格好したシギンは、隼が見たロキの記憶にあるシギンに変化する。その、変化中、隼の後ろから「うひい」と聞こえたのは、もはやお約束だった。

「みわ様が、犬神銘様と隼様が驚く顔を見たいからだそうです」

「あの、大阪弁め……」

「隼。内申覚えとき……」

突然、シギンの口調、仕草が変わる。よく朝の学校で聞く特有な大阪弁である。

「え、え、え、いい今、お大阪弁!？」

「て、もしかして、みわちゃんも聞いているのか」

「そうや、覚悟しときい。それに、先生をつけや」

「電波、受信しました。ピーーーーーー完了」

シギンは精一杯体を伸ばし、無気力に体をだらけさせる。目も表情も虚ろだった。そして、元の状態に戻った。FAXみたいな擬人化である。その様子を見ていた二人は共通の思いを占めていた「怖い」と。。。

「あ、終わった」

いち早く、気を取り直した隼が、シギンに向け発した。

「はい、そうですね。本題に入りましょうか」

『終わった』の意味を違う意味でシギンは取った。いつのまにか、後ろで反応しなくなつた小動物に気付いた。

「おい、大丈夫か!? 起きろ」

隼は、気絶している近衛刀を抱きしめ、軽く頬叩く。

「~~~~~うひゃ、は・はい。大丈夫です。で~~~~うひい」

その頬を叩く痛さに刀は気が付いたが、隼に抱かれていると分か

つたとたんに、ヤカンが沸騰したように顔が赤くなり、また気絶した。

「隼様には、重大な選択があります」

その様子に気も留めずに語りだすシギンである。

「ちょっと、待て。まだ、気絶してるって、て、語るなあ〜」

さすがに、ツツコミに追い付けなかったのか、大声を張上げる隼であった。

.....十分お待ちください。

「隼様は、これからどうしますか」

先ほどの事は無かったか様に話すシギン。刀も、隼も気にも留めないようにする。

「これから言うのは」

「そうです。隼様には、ロキ様として生きるか、犬神隼、司様として生きるかの選択が出来ます」

「元に戻れるのか？」

「そうです。しかし、ロキ様とトール様の戦いで多くの人間が死んでいます。その、多くの『死』を背負う事も承知してください。しかし、ロキ様として生きる場合では、神々の世界を創造されるため、

人間は全くいなくなり『罪』の十字架を背負うことはありません」

隼と刀は黙り込む。それを、見てシギンは無表情で続ける。

「さらに、刀様はトール様とは変わることが出来ません。ですので、隼様が表に出る場合には、トール様と戦う可能性が高いです」

「なんで、トールと交代が出来ないんだ」

「刀様は、幼少のときにトール様に意識を渡してしまい、表に出ていた年月がトール様の方が長いからです。しかし、隼様の場合は意識をロキ様に渡したのは数時間です。その違いですね」

つまり、隼が人間として『生きよう』とすると、トールに殺される率が高いということだ。それは、残獄な現実だった。

「さあ、選択してください」

民族衣装をシギンは大きく広げ、外の現世のビジョンが見える魔法陣を作り、隼と刀に見せる。

魔法陣から見える映像は、トールとロキの戦いだった。蒼い業火な炎、金色の雷を世界に落とす、その落ちたまばゆい光の中には、幾多の命が消えているだろうか？

人間として生きていく場合には、常にその命の重さを感じて生きていく事になる。しかし、神様と生きていく場合には、その人間自体がない。

刻々と重く残酷な運命の選択な時間が来ることが分かる。

ここは、隼にとって大きな人生の分岐点である。

そして、隼は運命を決める。

「俺は人間として生きていく」

真剣な顔、口調でしつかりと言い切る。つまり、残酷な現実を受け入れると言っているのと同じ意味だ。

「それで、いいんですか」

最後通告みたく告げるシギン。

「ああ」

しかし、隼は意見を変えなかった。そう、変える必要はなかった。

「では、魔法陣に手をお乗せ下さい」

シギンは、ロキを写している魔法陣に手を乗せる事を指示する。

「ままって、くくください」

その指示に従っている隼に、親を引き止める子供見たく隼の覗の裾を刀は掴む。

「なんだ」

「ななんで、いい行くんですか。ここ殺される可能性もあるんですよ」

人間として生きて行く事は、つまりトールに殺される可能性がある。つまり、トールとはいえ、間接的に刀が隼を殺すことになる。その事実には必死に刀は引き止める。

「あれは、ロキだろ。自分の体を返してもらうのは当たり前だろ」
それを当然の様に隼は答える。

「でも、ここでも、精神体でも色々こ、困りませんよ。せせ生活するなら、ここでもいいじゃないですか」

「ここは、平和だよな。争いもない。自分の思い通りの世界を創れる」

「なら……」

「でも、ここには銘がない。銘と話せない。銘の顔を見れない。だから、行くんだ」

ただ、簡単な選択だった。銘と世界をどっち取ると言われたら、銘を取るだろう。そうゆう所も、犬神兄妹はとても似ていた。

「でも、し死んでいる可能性があります」

近衛刀が言うとおりに死んでいる場合もある。しかし、その疑問にも隼は揺らぐことはない。

「でも、生きている可能性がある。それに、このままの状態だと銘は絶対に死ぬ。だから、行く」

銘が少しでも生きている可能性があるなら、絶対に行くこと決めた。

そして、隼は目でシギンに合図を送る。そして、隼は運命を決める戦いに参加することになった。

トールとロキの戦いは続いていた。ロキが多くの炎を発するのに対して、ミヨルニルで対抗するのがトールの戦いだ。

今も、ロキは何万の蒼い炎の球をレーヴァンティンで召喚する。その蒼い炎の球が一斉にトールに向かう。魔力では適わないトールは水平に一直線の金色の雷をミヨルニルで召喚し、炎に囲まれる瞬間に一線に放つ、その一線の穴が開いた炎の道を素早く掻き潜り一直線にロキに向かう。ミヨルニルの破壊力、体術ではトールが勝るために勝負に持ち込もうという魂胆だ。

しかし、その戦略もロキは分かっているため、炎の暑さを利用して陽炎、つまりロキの虚像の幻覚をつくりトールを翻弄する。トールはロキをミヨルニルで打ち壊そうとするが幻覚に掴まされたと分かり、すぐに金色の雷を場の空間一キ口を召喚し陽炎を掻き消した。金色の雷もロキが纏う蒼い炎の層で防がれていた。つまり、一進一退の攻防を繰り返していたのだ。

その攻防も崩れるときが来た。突然に拍子もなく分子単位にロキの体に変化する。

男体から女体に変化する。その変化と共にロキから犬神隼に変化した。その、変化の途中に隼とロキは一瞬だが初めての体面をする。なぜか、ロキは安堵の笑み浮かべていた。

そして、犬神隼は現世に甦る。隼の持つレーヴァンティンも蒼い炎から、紅い炎に変わっていた。

「面妖な」

トールは苦々しく呟いた。ロキの体が分子単位で変化している無防備の時に攻撃は簡単に出来たはずだった。しかし、トールは出来なかった。その蒼い炎を伴う体から、紅い輝く炎に変わる瞬間に見惚れていたのだ。

現に、世界を焼き尽くす蒼い炎は消え、犬神隼が持つ紅い炎を伴う剣『レーヴァンティン』から放つ、全ての生物が持つ魂の象徴の強き炎、暖かき穏やかなやさしい大気が世界を包む。そして、地震が止まり、大気が戻る。

トールは敵を見惚れていた自分を自責した。あれは、能力や形はどうあれ憎む敵なんだと。

すぐに気を取り直し、しかし、動揺は隠せないのか遠距離を伴う魔法を頭の中で構成し、ミヨルニルに金色の雷を分子、原子を集める。

隼は『全てを燃やし尽くす剣』ではなく『全てを創造する炎の剣』レーヴァンティンを力強く掴み、ロキと変換するときに脳に流れてきた知恵で、紅き炎を集める。

そして、両者は集める力を放出した。空には、紅と金色の二色に分かれた。

紅い炎は対象以外には燃やさない優しい炎である。蒼い炎と金色の雷とは違い、破壊を伴わない炎であった。

しかし、結果は見えていた。紅い炎は金色の雷に徐々に浸食され、あつという間に隼の放つ紅き炎を金色の雷が呑んだ。

なんとか、レーヴァンティンの影響力が利く範囲、紅き炎の層で防ぐが、完璧に防ぐことは出来なかった。隼の体が強い痺れが全身に走る。

魔力ではロキのほうが強いはずだった。しかし、それはロキだからである。

人間である犬神隼には神族の知識は断片的にしか理解できない。そのため、ルーン魔法の構成や、威力はロキ、トールの足元にも及ばない。レーヴァンティンをここまで使いこなし、トールと戦える時点で人間としては賞賛に値するだろう。

強い痺れを伴う体で隼は体制を整えた。隼は恐怖に体が震えていた。初めてトール対面した時もそうだった。人間と神の領域の隔絶された絶望的なまでの力の差。像に蟻が戦いを挑むようなものだ。

しかし、隼は知ってしまった。ロキと刀の記憶を刻み込まれ、世界には不幸が存在すること、そして、自分は力を手に入れてしまった。そう、銘を守る力、全てを変えられるかもしれない強き力を手に入れてしまったのだ。もう、子供みたく泣いてはいられない。頼ってもいられない。いや、誰も頼れる奴はいない。自分しか守れな

い物が存在するのだ。

「だから、戦うんだ。銘を守るために」

決意を胸に、全てを背負い、恐怖を勇気で塗りつぶし、犬神隼は
一歩前に踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7766x/>

神話の創り方

2012年1月10日00時49分発行